

# GANN

---

Vol. XIII.

August 1919.

No. 2.

---

## Kurze Inhaltsangabe der Originalaufsätze.

### Über die sogenannten Syncytiumzellen im Geschwulstgewebe.

Von

**Dr. K. Hashidzume.**

(Aus dem path. Institut der Kaiserl. Universität zu Tokyo.)

Verfasser hat die Syncytiumzellen im Geschwulstgewebe bei 11 Fällen histologisch untersucht. In allen diesen war die syncytiale Umwandlung in verschiedenem Grad fortgeschritten, und es konnte bestätigt werden, daß die Syncytialzellen von allen Zellarten herkommen können.

Er konstatiert bei 5 Fällen die Syncytium als sicher endothelialen Ursprungs, bei einigen derselben wurden typische Syncytialzellen gefunden. In einem Falle zeigte sich wegen des Vorhandenseins von hellen Geschwulstzellen eine äußerliche Ähnlichkeit mit Chorionepitheliom.

Seine Schlußsätze lauten:

1. Im Geschwulstgewebe können häufig Syncytiumzellen

und zuweilen eine dem chorionepitheliomähnliche Gewebsformation endothelialen Ursprungs ausgebildet werden.

2. Außer den Endothelien können auch die Epithelien und Bindegewebszellen syncytienähnliche Gebilde verursachen.

Wenn diese Gebilde in gewisser engerer Ausdehnung auch chorionepitheliomähnliche Struktur, zeigen so ist diese Ähnlichkeit doch nur mangelhaft ausgedrückt.

3. Die Mutterzellen dieser syncytialen Riesenzellen stammen entweder von den Tumorzellen selbst oder von neben dem Tumor neugebildeten interstitiellen Elementen infolge regressiver oder progressiver Prozeße.

4. In einer sicher einheitlichen Geschwulst kann durch besonderes Verhalten der Zellenanordnung eine den Plazentalzotten ähnliche Gewebsformation ausgebildet werden.

(Autorferat).

---



大正八年八月刊行

# 癌

第十三年第二册

社 團  
法 人

癌  
研  
究  
會





社團法人 癌研究會趣旨

近時ニ於ケル自然科學ノ進運ハ頗ル著シキモノアリ、從ツテ其基礎ヲ蹈メル醫學モ亦輒近ノ研究ハ多ク見ルヘキモノニ價シカラス、其研究自己ノ專門ヲ加ヘ、從テ極相離ニ至レリ。然ルモ現代ニ於ケル學界ノ進運數者カ各々自己ノ提攜研究ニ從事スル研究ノ甚ダ酸鼻ナル疾患ノ大ニシタリ、統計ニ徴スルニ社會ハ夫ニ命ヲ致スモハ古來ノ研究方ニ隨テ見ラレタル人生ニ及ホス悲慘ノ度甚タナリ、而シテ泰西ノ研究家ハメニ熱心ナル研究ニ向テ盛ニ積ミ、其人生ニ及ホス悲慘ノ度甚タナリ、而シテ泰西ノ研究家ハ亦相フ此方面ニ研究ニ向テ盛ニ積ミ、其人生ニ及ホス悲慘ノ度甚タナリ、而シテ泰西ノ研究家ハ謂フ生物學ノ事項、外科、其他、蓋シ痛癢助、勵ヲニ其疾患ノ例甚タ妙ナル抑モカタクナリ、而シテ泰西ノ研究家ハハノ風物ノ如キ、大問題、其各々廣シ、臨牀醫學科ニ跨リ、其研究ハ抑モカタクナリ、而シテ泰西ノ研究家ハコトヲ悟ルモノ、各々大問題、其各々廣シ、臨牀醫學科ニ跨リ、其研究ハ抑モカタクナリ、而シテ泰西ノ研究家ハ會ナルモノ、各々大問題、其各々廣シ、臨牀醫學科ニ跨リ、其研究ハ抑モカタクナリ、而シテ泰西ノ研究家ハカ、體、互ニ國際、主トシテ、逸國、力ヲ加シ、進メ、萬國、研究ヲ企テ、而シテ泰西ノ研究家ハ團、如キ、國際、主トシテ、逸國、力ヲ加シ、進メ、萬國、研究ヲ企テ、而シテ泰西ノ研究家ハシ、テ、風、味、生活、此、國際、共同、研究、力ヲ加シ、進メ、萬國、研究ヲ企テ、而シテ泰西ノ研究家ハ結果、ヲ、齋、得、然、至、大、貢獻、年々、得、本、病、爲、必、以、其、方面、研究、力ヲ加シ、進メ、萬國、研究ヲ企テ、而シテ泰西ノ研究家ハ有、忽、諸、附、コ、能、ハ、サ、於、テ、本、邦、ニ、有、テ、モ、上、記、世界、ニ、於、ケル、現代、醫學、ノ、趨勢、ニ、乘、シ、又、一、面、人、類、ノ、幸福、ヲ、進、メ、能、ハ、サ、於、テ、本、邦、ニ、有、テ、モ、上、記、世界、ニ、於、ケル、現代、醫學、ノ、趨勢、ニ、乘、シ、又、一、刻、下、ノ、緊、要、ナル、事業、ヲ、發、達、シ、テ、自、己、ノ、幸福、ヲ、進、メ、能、ハ、サ、於、テ、本、邦、ニ、有、テ、モ、上、記、世界、ニ、於、ケル、現代、醫學、ノ、趨勢、ニ、乘、シ、又、一、潮、鑑、ミ、科學、近、時、ノ、發、達、ヲ、移、シ、テ、切、切、ニ、人、類、ノ、幸福、ヲ、進、メ、能、ハ、サ、於、テ、本、邦、ニ、有、テ、モ、上、記、世界、ニ、於、ケル、現代、醫學、ノ、趨勢、ニ、乘、シ、又、一、

# 癌 第十三年 第二冊 目次

## 原 著

腫瘍組織内ニ於ケル所謂「シンチ、ウム」細胞ニ就テ 醫學士 橋爪賢次郎・毛  
悪性腫瘍組織増殖ノ末梢神經纖維ニ對スル態度 赤松信麿・一〇五

## 第十一回癌研究會學術集談會演說抄録

- 一「オルビトパীগス、パラジチクス」ニ就テ 長田勝芳・三五
- 二、植物ニ於ケル腫瘍類似ノ新生物ニ就テ(標本供覽) 末安吉雄・三五
- 三、血管肉腫ノ如キ所見ヲ有スル癌腫ニ就テ 吉川利三・三六
- 四、鼠肉腫ノ移植増殖ニ關スル知見補遺 藤縄喜代藏・三六
- 五、大鼠ノ人工肉腫移植ニ由ル組織的變遷及「レチ、ン」注射ト移植トノ關係ニ就テ 梅原信正・二六
- 六、移植シ得可キ鵝腫瘍一新種(大島系)ニ就テ 大島福造・二〇
- 七、移植シ得ベキ鵝腫瘍(武藤系)ノ異種

鳥類移植試驗ニ就テ 向山孝之・二五  
八、家鵝腫瘍ノ移植増殖ニ關スル知見補遺 加藤竹男・二五  
九、可移植性家兔肉腫 加藤竹男・二七

十、家鵝肉腫ノ胃轉移ニ就テ 小薮憲二・二六  
十一、家鵝肉腫ノ研究(第四回報告)

醫學博士 緒方知三・二九  
醫學博士 三田眞太郎・二九  
醫學博士 今 裕・三五  
十二、「ラノリン」飼養ニヨル家兔舌乳嘴腫ニ就テ

十三、人工的乳癌發生ニ就テ(第一回報告)

醫學博士 山極勝三郎・三四  
醫學博士 市川厚一・三四

## 雜 報

社団法人癌研究會第十二回定期總會並第十一回學術集談會記事  
理事會記事  
癌研究費補助追加  
山極、市川兩博士授賞之件  
理事、評議員囑託  
高木理事ノ逝去  
篤志家ノ寄附  
會員異動

第七條 基本金ハ評議員會ノ決議ヲ經ルニ非サレハ處分スルコトヲ得ス

第八條 本會ノ資産ハ有價證券ヲ買入レ又ハ郵便官署若クハ確實ナル銀行ニ預ケ入レ之レヲ保管ス但  
場合ニ由リ評議員會ノ決議ヲ經テ不動產ヲ買入ルルコトヲ得

第九條 本會收支ノ決算ハ翌年ノ定期總會ニ於テ之ヲ報告スヘシ

第十條 本會ノ會計年度ハ毎年一月一日ニ始マリ十二月三十一日ニ終ルモノトス

## 第五章 會 員

第十一條 本會ノ目的ヲ賛成補助スルモノハ内外國人ヲ問ハス何人タリトモ會員タルコトヲ得  
第十二條 會員ヲ分チテ左ノ三種トス

### 一、名譽會員

### 一、特別會員

### 一、通常會員

會員ハ本會ニ於テ發行スル會報及報告書等ヲ無料ニテ受クルコトヲ得

第十三條 名譽會員ハ學術上特ニ功績アルモノ又ハ特ニ本會ノ事業ヲ贊助スルモノ及壹千圓以上ヲ寄

附シタルモノニ就キ評議員會ノ決議ヲ經テ會頭之ヲ推薦ス

第十四條 特別會員ハ會費トシテ一時ニ金參拾圓以上ヲ納ムルモノ又ハ通常會員ニシテ滿十箇年間毎

年會費ヲ納メタルモノトス

第十五條 通常會員ハ會費トシテ毎年金參圓ヲ前納スルモノトス

第十六條 會員タラント欲スルモノハ其氏名現住所ヲ記シ本會事務所ニ申込ムヘシ

第十七條 退會セント欲スルモノハ其旨本會事務所ニ届出ツヘシ

## 第六章 役 員

第十八條 本會ニ左ノ役員ヲ置ク

總裁

一名

副總裁

一名

會 頭

一名

副會頭

一名

理事

七名(內理事長一名)

社團  
法人  
**癌研究會定款**

明治四十一年四月設立  
大正三年二月法人登記  
大正三年十一月改正  
大正六年四月改正

**第一章 目的及事業**

第一條 本會ハ癌ニ關スル研究及研究ノ獎勵ヲ爲スヲ以テ目的トス  
第二條 本會ハ前條ノ目的ヲ達スル爲メ懸賞論文ヲ募集シ、癌研究所、癌治療院ヲ設立シ又ハ學術集  
談會ヲ開催スル等ノ實行ヲ期ス  
但懸賞論文、癌研究所、癌治療院、學術集談會等ニ關スル規程ハ評議員會ノ決議ヲ經テ別ニ之ヲ  
定ム

**第二章 名稱**

第三條 本會ハ社團法人癌研究會ト稱ス

**第三章 事務所**

第四條 本會ハ事務所ヲ東京市本郷區本富士町貳番地ニ置ク

**第四章 資産**

第五條 本會ノ資産ハ左ノ如シ

- 一、癌研究會ヨリ引繼キタル資金
- 二、寄附金
- 三、會員ノ會費

- 四、前項以外ノ諸收入金

第六條 本會ハ前條資産ノ一部ヲ基本金トナスコトヲ得

第三十條 本會ハ必要ニ應ジ支會ヲ設クルコトヲ得

支會ニ關スル規程ハ評議員會決議ヲ經テ別ニ之ヲ定ム

第三十一條 本會ニ書記若干名ヲ置ク

書記ハ上長ノ命ヲ受ケ庶務會計ノ事務ニ從事ス

書記ハ會頭之ヲ任免ス

第三十二條 本會ニ金品ヲ寄附シタルモノアルトキハ其氏名ヲ簿冊ニ登錄シテ永ク本會ニ保存ス

第三十三條 會報「癌」ハ毎年四回之ヲ發行シ無料ヲ以テ會員ニ頒布ス

第三十四條 本定款ノ變更ハ總會ニ於テ出席會員三分ノ二以上ノ同意ヲ得ルコトヲ要ス

### 社団法人 癌研究會 役員

總裁	缺	員	森村 開作	評議員	本田 雄五郎
副總裁	男爵 澁澤 榮一	評議員	稻田 龍吉	同	遠山 椿吉
會頭	醫學博士 本多 忠夫	同	伊澤 達吉	同	岡 玄卿
副會頭	醫學博士 土肥 慶藏	同	伊丹 繁	同	岡田 和一郎
理事	醫學博士 長與 又郎	同	井上 準之助	同	天森 英太郎
理事	醫學博士 細野 順	同	磐瀬 雄一	同	金杉 英五郎
理事	醫學博士 木村 德衛	同	林 春	同	吉本 清太郎
理事	醫學博士 高木 喜寬	同	林 信雄	同	吉河 爲久藏
理事	文學博士 富士川 游	同	西山 信光	同	田代 義德
理事	醫學博士 佐々木 隆興	同	仁田 直	同	高木 兼寬
理事	醫學博士 佐々木 隆興	同	仁田 直	同	高木 兼寬

監事

一名

評議員

若干名

第十九條

總裁、副總裁ハ評議員會ノ決議ニ由リ之ヲ推戴ス

會頭、副會頭ハ會員中ヨリ總會ニ於テ之ヲ選舉ス

理事長、理事、監事、評議員ハ會頭ノ推薦ニ由リ總裁之ヲ囑託ス、但監事ハ他ノ役員ヲ兼

スルコトヲ得ス

第二十條

會頭、副會頭、理事長、理事、監事、評議員ノ任期ハ二箇年トス、但滿期再選又ハ再囑託

ルコトヲ得

第二十一條

會頭、副會頭、理事長、理事、監事及評議員ニ缺員ヲ生シタルトキハ補缺選舉又ハ囑託

ヲナスコトヲ得、補缺員ノ任期ハ前任者ノ殘期間トス

第二十二條

會頭ハ本會ヲ總理シ且總會、評議員會ノ議長トナル

副會頭ハ會頭ヲ補佐シ會頭事故アルトキハ之ヲ代理ス

第二十三條

評議員ハ本會樞要ノ事項ヲ評議ス

第二十四條

理事長ハ本會一切ノ會務ヲ處理ス

理事長事故アルトキハ他ノ理事代テ其職務ヲ行フ

第七章 會議

第二十五條

總會、評議員會ハ東京ニ於テ之ヲ開ク、但時宜ニ依リ變更スルコトヲ得

第二十六條

定期總會ハ毎年四月之ヲ開ク、但開會期ハ時宜ニ依リ變更スルコトヲ得

第二十七條

總會ノ招集ハ會報又ハ新聞若クハ通知書ニ依ツテ之ヲ行フ

第二十八條

總會ノ決議ハ出席會員ノ過半數ヲ以テ之ヲ決ス

第二十九條

評議員會ハ必要ニ應シ會頭之ヲ招集ス

第八章 雜則

# 癌

第十三年第二冊

大正八年八月刊行

原 著

## 腫瘍組織内ニ於ケル所謂「ジンチ、ウム」細胞ニ就テ

東京帝國大學醫學部病理學教室

醫學士 橋 爪 賢 次 郎

### (一) 緒 言

婦人ニ見ラル、惡性脈絡膜上皮腫ト形態學上同一ノ組織形態ガ種々ノ腫瘍殊ニ男子ニ於テモ見出サル、コトハ西曆一九〇二年 Schlagenhafter 及 Wlassow ガ孰レモ辜丸畸形腫ニ認メテ發表セシ以來、多數ノ學者ハ此組織ノ説明ニ議論ヲ闘ハセシガ未ダ確實ニ決定セザルナリ。

而シテ各學者ノ疑問トシテ議論ノ分歧スルハ、所謂ラングハンス層ノ細胞ニ一致スル細胞ニ就テヨリハ寧ロ「ジンチ、ウム」細胞ノ根原ニ在リ。

余ハ長與教授指導ノ下ニ腫瘍中ニ見ラル、「ジンチ、ウム」細胞ニ就テ觀察セリ。

### (二) 文 獻

○橋爪・腫瘍組織内ニ於ケル所謂「ジンチ、ウム」細胞ニ就テ



同	醫學博士	山極勝三郎	同	醫學博士	木下正中		醫學博士	樋口繁次
同	醫學博士	草間滋	同	醫學博士	佐藤達次郎	同	醫學博士	平山金藏
同	久保德太郎	同	醫學博士	佐藤三吉	同	醫學博士	平井政道	
同	栗本東明	同	醫學博士	阿久津三郎	同	鹽田廣重		
同	宇野朗	同	醫學博士	吾妻勝剛	同	醫學博士	宮本叔	
同	中濱東一郎	同	醫學博士	朝倉文三	同	醫學博士	三浦謹之助	
同	鶴田禎次郎	同	醫學博士	近藤次繁	同	醫學博士	三田定則	
評議員	醫學博士	相馬又二郎	評議員	醫學博士	今裕	評議員	醫學博士	三田定則

東京市本郷區本富士町二番地

血管ノ周圍ニ集マル等、通常ノ惡性脈絡膜腫ト相違セリトイフ。

此ノ如ク此組織ニ就テノ諸家ノ説ガ畸形腫ノ外胚葉ヨリ出ヅルモノナリト殆ド一致セル時ニ方リ、  
Sternberg (1904) ハ惡性ノ辜丸畸形腫ニ於テ組織的ニ大ナル空胞ヲ有スル原形質塊ヲ認メシニ拘ハラズ  
之ヲ血管外被細胞性肉腫ナリトシ、此「ジンチ、ウム」ヲ血管ノ胚芽 (Anlage) ナリトシ、此ノ如キ組織  
ハ脈絡膜ノ「ジンチ、ウム」細胞ヨリノミ來ルモノニアラズシテ、一部ハ母體血管ノ内被細胞ヨリ生  
ルモノナリトイヒ前記佛國學者ノ説ニ左袒セリ。

更ニ Münckeberg (1907) ハ「ジンチ、ウム」ヲ有スル辜丸腫瘍ヲ檢シテ其「ジンチ、ウム」ガ血管ニ對  
スル關係ニ相違アルヲ認メ、其ハ發生學的ニ各價值ヲ異ニスルモノナリト推定シ、辜丸腫瘍ヲ其「ジン  
チ、ウム」ニヨリテ二類トセリ、甲ハ惡性脈絡膜上皮腫形態ト上皮細胞性「ジンチ、ウム」トヲ有スル辜  
丸畸形腫、乙ハ血管外淋巴管内被細胞腫樣組織ト確ニ内被細胞性ナル「ジンチ、ウム」トヲ有スル腫瘍  
又ハ畸形腫ナリト。

之ニ於テ「ジンチ、ウム」ガ外胚葉性ナリトノ説ト内被細胞ヨリ出ヅトノ説ト兩立セル姿トナレリ。  
他方ニ於テ一九〇四年 Rabus ハ慢性刺激又ハ腫瘍發生ノ際肝細胞ハ「コルベン」樣ノ芽ヲ出シ多數ノ  
核ヲ生ジ、其ヨリ眞ノ巨態細胞トナリ得トシ、「ジンチ、ウム」樣増殖ハ胎盤ノ部分ヨリ生ズル他、或  
臟器ノ實質細胞ヨリモ生ジ得ルコトヲ決定シ得タリトナセリ。又 Reich (1907) ハ胃癌ノ諸例ニ於テ肉  
眼的、組織的ニ脈絡膜腫ニ固有ナル如キ部分ヲ視テ其モ亦癌成分ニ他ナラズトシ即チ惡性脈絡膜腫樣  
増殖ニ酷似セル組織ガ普通ノ癌腫成分ヨリ將來シ得ルコト疑ナシトイヘリ。

○橋爪・腫瘍組織内ニ於ケル所謂「ジンチ、ウム」細胞ニ就テ

○橋爪・腫瘍組織内ニ於ケル所謂「ジンチ、ウム」細胞ニ就テ

五八

成書ニ見ラル、諸家ノ報告ハ甚多數ニシテ枚舉ニ遑アラズ、茲ニ其梗概ヲ記シテ參考ニ供セントス。

惡性脈絡膜腫瘍組織形態ヲ腫瘍中ニ見タルハ既ニ早ク一八七八年 *Malassez et Monod* ガ所謂 "Sarcome angioplastique" トシテ報告シ「ジンチ、ウム」様細胞ハ發育不充分ナル血管ナリトシ此名稱ヲ與ヘタリ。其後一八九七年英國婦人科學會ニ於テ辜丸混合腫瘍ニ惡性脈絡膜腫瘍様組織アリシ報告アリシガ終ニ肉腫ナリト決定セラレタリ。

一九〇二年 *Schlagenhaufen* ハ辜丸畸形腫及其轉移ニ於テ同組織ヲ認メ、氏ハ妊卵被膜 (*Fruchthülle*) ヨリ出タルモノナリト説明シ、同時ニワルダイエル、ブレウス等ノ例ヲ再檢シテ畸形腫中ニハ葡萄狀鬼胎様ノ組織モ亦存在ストナセリ、同年 *Wassow* ハ多核巨態細胞ガ血管壁ノ萎縮及壞死ヲ起スヲ認メ、血管破壞ノ能力アリトシ本腫瘍ハ畸形腫タル根底ニ立テルモノニシテ胎生腺管ノ充分分化セザリシ上皮細胞ヨリ發生セルモノト解シタリ。

*Risael* (1903) ハ此ノ如キ組織ガ畸形腫殊ニ辜丸ニ來ルコトハ事實ナリ、然レドモ其ハ胎兒ノ外胚葉ヨリ出タルモノニシテ、他ノ外胚葉性組織ト同價ナリトシ、胎兒ノ卵膜ガ關與ストノ假說ニハ確證ナシトイヘリ。

*Pick* (1904) ハ畸形腫ニ見出サル、惡性脈絡膜腫様組織ハ外胚葉ヨリ來リシモノニシテ、此組織ノミガ主トシテ發育セルモノナリトシ、氏ハ特ニ "Epithelioma chorioectodermale" ト命名セリ此偏頗ニ發育セシラングハンス細胞ハ胞巢狀ニ集團スル傾向ヲ有シ、又腺管様トナリ乳嘴狀ノ突起ヲ形成シ、又

セシ淋巴管又ハ毛細血管ノ内被細胞ガ變化シタルモノト見做セリ。

續テ大野(章三)學士(1911)ハ武谷博士ノ松果腺畸形腫例ニ就テ組織の檢索ヲ遂ゲタル際、一部ニ惡性脈絡膜腫類似ノ形態ヲ認メタリシガ壞死部甚シカラザル故ニ之ヲ惡性脈絡膜腫ト認ムルニ躊躇シ單ニ密接ナル類似ノ點アルヲ指摘シタリ、然モ發生ニ就テハ云フ所ナカリキ。

最近赤松信麿氏(1917)ハ辜丸腫瘍ニ於テ惡性脈絡膜腫類似ノ組織形態ヲ認メシガ氏ハ其腫瘍ガ血管破壞性ニ働ケルヲ見ルモ發生的ニ血管壁トノ關係ヲ否定シテ癌腫ナリト診斷シ「ジンチ、ウム」ハ或條件ノ下ニ腫瘍細胞ヨリ出タル異型的「ジンチ、ウム」ナリトイヘリ。

之ニ於テ「ジンチ、ウム」細胞ハ外胚葉性、内被細胞性ノ他ニ結締織性ノモノ唱ヘラレ他方ニハ上皮細胞性異型「ジンチ、ウム」ノ稀ナラザルコト證明セラル、ニ至レリ。

以上ノ他其類例ノ報告多シ假ニ其主ナルモノヲ揭示スレバ次ノ如シ。

卵被膜説 Schlagenhafer 1902, Steinert, Scott, Bonney.

外胚葉説 Pick, (Wlassow) 1902, Risel, Steinhaus, Emanuel, Schmaus, 大久保榮 Glasfeld, Sigl,

内被細胞説 Malassez et Monod 1878, Carnot et Marie 1898, Dopter, Sternberg 1904, Marks, 中山茂

樹 Goldzieher, 保田收藏

外胚葉、内被細胞竝立説 Mönckeberg 1907.

達型「ジンチ、ウム」

上皮細胞性 Babes 1904, Risel, Vennet, Wussiljew, 赤松信麿

○橋爪・腫瘍組織内ニ於ケル所謂「ジンチ、ウム」細胞ニ就テ

次ニ Vennet (1900) ハ膀胱ノ癌及其轉移ニ於テ、惡性脈絡膜腫ニ類似ノ像ヲ見テ、氏ハ種々ノ點ヨリ此組織ハ癌組織ニ他ナラズト證明シ、此「ジンチ、ウム」ハ腫瘍細胞ノ進行的又退行的病機ノ兩方ニ際シテ生ズルモノナリトイフ。

Vassiljev (1913) ハ辜丸腫瘍ニ惡性脈絡膜腫ニ類似セル組織ヲ見、其ガ癌、腺腫性癌ト考フベキ腫瘍細胞トノ移行ヲ確認セシニヨリ、氏ハ腺腫性癌ノ一部ガ脈絡膜腫様ニ變性セルモノナリトセリ。

以上ノ諸説ハ病的狀態ニアル上皮細胞ヨリ一種ノ「ジンチ、ウム」ヲ生ジ來ルトイフ。

然ルニ又一方ニ於テ、一九〇九年 Ziehl<sup>2)</sup> ハ辜丸腫瘍ニ於テ定型的惡性脈絡膜腫ト同様ノ出血性結節ヲ見、別ノ部分ニ於テ其結締組織隔壁中ニ明ニ結締織性ナル多核ノ原形質樣形態アリテ、外胚葉性「ジンチ、ウム」トハ明確ニ區別シ得ルモノナリシトイフ。

我國ニ於テハ一九〇九年大久保學士ハ多數ノ辜丸畸形腫ヲ檢シ其中ニ惡性脈絡膜樣組織形態アルモノヲ指摘シ其「ジンチ、ウム」ハ外胚葉性組織ト直接移行セルヲ認ムルニ由リリーゼル、ビック等ノ外胚葉發生說ニ賛成セリ。

然ルニ中山茂樹氏 (1910) ハ男子ノ腹膜後腫瘍ニ於テ肉眼の組織的ニ惡性脈絡膜腫類似ノ組織形態ヲ認メ其血管ニ於テ内被細胞ト「ジンチ、ウム」トノ移行アルニ由リテ此腫瘍ヲ血管内被細胞腫ナリトシ「ジンチ、ウム」ヲ内被細胞ヨリ發生セリトナセリ。

更ニ保田學士 (1913) ハ男子ノ肋膜ニ發生セル腫瘍ニ於テ組織的ニ惡性脈絡膜腫樣形態ヲ認メシガ氏ハ之ヲ肋膜ノ内被細胞腫ナリトシ其「ジンチ、ウム」ヲ以テ固有ノ腫瘍細胞ニアラズトシ、前ヨリ存在

病歴 患者ハ元來智力劣等ナリシガ、死ノ六箇月前ヨリ身體俄ニ著明ノ發育ヲ現シ、陰莖ノ増大、陰毛腋毛ノ發生等ヲ來シ、二箇月前ヨリ故ナク嘔吐ヲ催ス榮養漸次衰へ、死ノ數週前ヨリ尿崩症ヲ來シ死ス。

解剖的診斷 一、瀰漫性出血性神經膠腫性「エベンチーム」炎（後ニ上記ノ如ク訂正）二、内腦水。三、軟腦膜及腦室脈絡膜叢ニ於ケル血色素沈著及水腫。四、右肺ニ於ケル初期沈降性肺炎。五、陰莖ノ異常發育。六、陰毛腋毛等ノ早期發生等

解剖所見 省略（神經學雜誌第十八卷一號參照）

### 組織的所見

松果腺原發腫瘍 殆ド全部ヲ一〇「ミクロン」ノ連續切片トシ「ヘマトキシリン、エオジン」染色ヲ施セリ。

腫瘍ハ實質性ニシテ特殊ノ構造ヲ示サズ、腫瘍細胞ハ集團トナリ又ハ散在ス、腫瘍ノ發育強キ部分ニテハ「グリア」組織モ亦増生セリ。腫瘍細胞ハ大形ニシテ圓形又ハ卵圓形、原形質ハ極メテ淡染シ、核ハ甚大ク圓形若クハ橢圓形ヲナシ、染色質ニ乏シキヲ以テ胞狀ヲ呈シ、一、二箇ノ核小體ヲ含ム。腫瘍ハ一般ニ出血ヲ伴ヒ、殊ニ松果腺ノ前半ニ著明ナリ。顯著ナルハ巨態細胞ニシテ、注意スレバ殆ド毎切片ニ認メ得ベシ。其形態不正ニシテ大小亦不同、原形質ハ「エオジン」ニ赤染シ強廓大ニテ多少泡沫樣ナル如ク見ラル、往々大ナル空胞寧ロ管腔ヲ有スルモノアリ。核ハ紡錘狀、長橢圓ナルモノ多ク亦圓形、卵圓形ニ見ユルモアリ、多ク長軸ニ沿ヒテ走り、染色質稍々多ク微細粉末狀ニ見エ核小體ヲ認ムルコトナシ。核數ハ大サニヨリテ一定セズ大ナルモノハ數十ニ及ブ。（附圖第一圖、第二圖）

○橋爪・腫瘍組織内ニ於ケル所謂「ジンチ、ウム」細胞ニ就テ

○橋爪・腫瘍組織内ニ於ケル所謂「ジンチ、ウム」細胞ニ就テ

六二

## 結締織性 Rissel 1909.

### (III) 材料

材料ハ總テ東京醫科大學病理學教室ノ解剖屍體ヨリ獲タルモノニシテ、豫テ組織標本トシテ長與教授ノ所藏セラレシモノ及ビ大正六年夏以來大正七年十二月迄ノ間ニ解剖セラレシ諸多ノ腫瘍例ヲ檢シ後記ノ數例ヲ得タリ。余ノ得タル材料ハ主トシテ「フォルマリン」硬化「バラフィン」包埋ヲ施シ、「ヘマトキシリン、エオジン」複染色、ワンギーソン染色、ビルシヨウスキー法、ハイデンハイン法等ヲ用ヒタリ、其他必要ニ際シ「ツエロイヂン」包埋又凍結切片ヲ用ヒタルモアリ。

此機會ニ於テ我教室主任教授恩師山極先生ニ深厚ナル敬意ヲ表シ本研究ニ際シ恩師長與教授ノ懇篤ナル御指導ト周到ナル御校閲トラ蒙リタルコトニ滿腔ノ感謝ヲ捧ゲ教室同僚諸氏ノ御援助ニ謝意ヲ表ス。

### (四) 余ノ觀察例

#### 第一例

○藤○之助 七歳 男兒 松果腺實質性腫瘍

本例ハ大正六年四月日本病理學會ニ於テ長與博士ガ演說セラレ、更ニ大正八年一月神經學雜誌第十八卷第一號ニ訂正記載セラレタルモノニ屬シ、博士ハ慎重ナル組織的檢索ニヨリ「松果腺ニ原發セル實質細胞性腫瘍」ナリト斷定セラレタリ。

其組織檢索中特殊ノ「ジンチ、ウム」細胞ヲ認メ得ラル、ニヨリコ、ニ加ヘタリ。患者ノ病歴其他ヲ簡單ニ轉載スレバ。

關係、毛細管トノ直接連續等全ク同様ナルコトヲ確認シ得。(附圖第五、第六圖)

### 考案

本例ガ「松果腺ノ實質性腫瘍ニシテ惡性出血性ナルコト」ハ長與博士ノ説明シ悉サレタル所ニシテ、其腫瘍細胞ノ性狀殊ニ蜘蛛狀突起ヲ出セル「グリア」細胞トノ相違ニ由リ、此腫瘍ハ松果腺ノ實質性腫瘍「ストルーマ」又ハ癌ト稱スベキモノナリト解決セラレタリキ。

而シテ其間質中ニ認めラル、「ジンチ、ウム」細胞ハ常ニ血管ト密接ナル關係ヲ示シ、之ニ反シ腫瘍細胞トハ何等ノ交渉ヲ認め難ク、其核ノ配置ガ屢々長軸ニ沿ヒテ縱列ヲナセルコト、其細胞體ガ血管内被細胞ト直接連續セルコトヲ證明シ得ルニヨリ、血管内被細胞ト同一ノ母組織ヨリ出タルコトヲ決定シ得ベシ。

稀ニ腫瘍細胞ノ間ニ「ジンチ、ウム」細胞ヲ見、恰モ惡性脈絡膜腫瘍ノ形態ヲ示セル所アルモ、注意スレバ「ジンチ、ウム」細胞ハ必ズ間質ヲ伴ヒ、腫瘍細胞トノ關係彼ニ於ケル如ク密接ナラズ且此ノ如キ部分ハ甚ダ稀ニシテ他ノ大部分ニ於テハ毫モ惡性脈絡膜腫トノ類似ヲ示サズ。

本例ニ於ケル「ジンチ、ウム」細胞ハ腫瘍形成ノ表面ニ立ツモノニアラズ、恐ラク腫瘍ニ附隨シテ新生セル間質中ニ伴ヒシ毛細血管ノ或モノガ發育異常ニ陥リ此ノ如キ内被細胞性萌芽ヲ作りシナランカ。

### 第二例

○野○次 二十歳 男子 松果腺畸形腫

本例ハ第一例ト同ジク長與博士ガ日本病理學會ニ演說セラレ更ニ神經學雜誌ニ記載セラレタリシモノニシテ、其出  
○橋爪・腫瘍組織内ニ於ケル所謂「ジンチ、ウム」細胞ニ就テ



此巨態細胞寧ロ「ジンチ、ウム」細胞ハ間質殊ニ血管ト密接ナル關係ヲ示セリ。當ニ近接セルハミナラズ連續切片ヲ追究スレバ屢々毛細血管壁ト「ジンチ、ウム」細胞體トハ直接連續セルヲ認メ、又毛細血管ノ分歧點ニ於テ巨大ナル「ジンチチウム」細胞ヲ形成シ、其原形質ト血管壁トハ融合シテ境界ヲ認メ難キモノアリ。此「ジンチ、ウム」ニ近接セル血管ノ内被細胞ハ肥大シテ核ハ紡錘狀ヲ呈シ漸次遠ザカルニ從ヒ普通ノ内被細胞ニ移行スルヲ確認シ得。(附圖第二圖)

此ノ如ク完成セル「ジンチ、ウム」細胞ノ他、腫瘍ノ前部殊ニ出血多キ部分ニ於テ毛細血管ノ一部ガ「ジンチ、ウム」細胞様ニ變性セルヲ認メ得。血管壁ノ一方ハ普通ノ内被細胞ニシテ對側ハ厚キ細胞體ヲナシ境界不明ナル原形質塊トナリ數箇ノ核ヲ含メルモノアリ或ハ稍々大ナル「ジンチチウム」ノ一部ニ赤血球ヲ含メル管腔アリテ毛細管ニ直接連續セリ。是等ノ「ジンチ、ウム」様細胞ハ亦「エオジン」ニ赤染シ其核モ亦前記「ジンチ、ウム」細胞ト同性狀ヲ示セリ。(第三圖、第四圖)。

此小ナル「ジンチ、ウム」様形態ト前記ノ「ジンチ、ウム」細胞トノ間ニハ種々ノ階級ニ在ル移行型ヲ認メ得。而シテ是等ノ「ジンチ、ウム」細胞ノ存スル所、又ハ其附近ニハ必ズ多少ノ組織内出血ヲ認メ得ルコトハ顯著ナリ。

第三腦室壁及頸髓ノ腫瘍浸潤。前者ハ其壁内面ニ淺キ腫瘍浸潤アリ、後者ハ中心管ニ沿ヒテ稍々著シキ浸潤ヲ示セリ其腫瘍組織ノ性狀殊ニ出血ニ傾ケル狀況ハ全ク松果腺ニ於ケル所見ト一致シ、腫瘍細胞ハ一層顯著ニ胞狀ヲ呈シ一見シテラングハンス細胞ニ酷似セルモ其間ニ「グリア」組織ヲ認メ出血ハ頸髓ニ於テ稍々著シ。其間質中ニ前記ト同様ノ「ジンチ、ウム」細胞ヲ見、其性狀及血管トノ密接ナル

上皮組織ハ囊腫又ハ腺管様トナリテ各切片ニ認メラル、而シテ最顯著ナルハ結締織網中ニ胞巢狀又ハ索狀トナリテ存スル上皮性腫瘍細胞ナリ、其形圓形乃至多角形ニシテ原形質ニ富ミ「エオジン」ニ淡染セリ、核ハ概シテ圓形胞狀ニシテ核染質ニ乏シク一、二ノ赤染スル核小體ヲ容ル、此細胞ハ結締織網間ニ稍々緩疎ニ排置セラレ細胞間廣シ、往々連續シテ列ヲ爲シ、又圓柱細胞ノ腺管様形態ト直接連續セルモノアリ、而シテ結締織ノ粘液様トナレル部分ニテハ此胞巢中ノ細胞稍々密集シ間隙ヲ示サザルモノアリ。

腺管。ハ多クハ單層ノ圓柱細胞ヲ以テ被ハル、核ハ染色質ニ富ミ多ク基底部ニ存ス、其間ニ盂狀細胞ヲ混ズルヲ見ル。腺管ノ圓柱細胞ハ往々甚ダ高キモノアリ、又多數ノ乳嘴様増殖ニヨリテ表面凹凸ヲ示セルモアリ、擴張シテ囊腫ヲナセルモノアリ、其際上皮細胞ハ骰子狀トナレリ。

表皮囊腫。大小種々アリ、數層ノ表皮細胞ヲ有シ内部ハ角質變化ヲ示スモノ多ク、往々充塞シテ腔ヲ有セズ、囊腫ノ或モノニハ硝子様凝固液ヲ容レ少數ノ圓形細胞ヲ混ズ。(以上長與博士論文參照)、

而シテ上記胞巢狀又ハ索狀ノ上皮細胞群中屢々一部分ニ腺管様造構ヲ示セルモノアリ、又別ニ此上皮細胞群ノ一部分或ハ全部ガ少シク變性ヲ呈セル處アリ。卽基質ノ粘液様トナレル部分ニ於テ各細胞體ハ互ニ密著シテ境界不明トナリ、原形質ハ「エオジン」稍々強ク赤染シ、核ハ胞狀ニシテ染色質ニ乏シク一、二個ノ核小體ヲ含ム、時ニ大小ノ空胞ヲ示スモノ、其周圍及細胞内ニ赤血球ヲ存スルモノ、核ノ變性ニ傾ケル像アルモノ等アリ。(第八、第九圖)此細胞群ハ一見シテ前記ノ細胞群ト稍々異ナル印象ヲ與フレドモ、其核ノ性狀ノ同一ナルコト、相互間ニ移行像アルコトヲ認メ得ベシ而シテ其境界

○橋爪・腫瘍組織ニ於ケル所謂「ジンチ、ウム」細胞ニ就テ

六六

血竈ノ附近ニ於テ惡性脈絡腫ニ見ル如キ「ジンチ、ウム」細胞アリ。余ハ本例ノ組織の檢索中ニ見タル「ジンチ、ウム」ニ就テ記スベシ。

病歴。患者ハ死前三ヶ月ニ頭痛嘔吐ノ發作アリ、眩暈暗眠遲脈、視力減弱等アリ、腎炎ノ徵候ヲ伴ヒ尿毒症ノ疑ノ下ニ死セリ。

解剖當時ノ診斷 一、第三腦室ニ於ケル小腦ト連絡セル混合腫瘍(畸形腫)。二、兩肺炎ニ於ケル結核性乾酪性限局竈及癒著性胸膜炎。三、兩肺高度ノ鬱血。四、慢性實質性腎臟炎。五、肝臟脂肪浸潤。六、小腸及大腸ノ加答兒。七、漿膜下溢血(心、肺、腹膜等)等

長與博士ハ腫瘍ノ位置其他ニヨリテ一、松果腺ニ發生セシ畸形腫ト訂正セラレタリキ。

解剖所見略ス(神經學雜誌第十八卷第一號參照)

### 組織の所見

腫瘍諸處ヨリ得タル多數ノ切片ヲ檢スルニ本腫瘍ハ多種ノ組織ヨリ成レル複雑ナル混合腫瘍ニシテ腫瘍中ニ見ラル、組織ヲ列舉スレバ。結締組織ハ他ノ腫瘍ニ間質トシテ存スルモノト異ナリ、其分佈相密等一定セズ、細胞ニ富メル肉腫様ノ部分、索狀紋様ヲナセル部分、鬆疎ナル部分等雜多ナリ、其他粘液樣組織、脂肪組織、軟骨、滑平筋等ヲ認ム。

血管ハ其分佈大小甚ダ不平均ニシテ、毛細管ノミヲ見又ハ稍々大ナル管腔ヲナセルモアリ、是等ノ血管ヨリ所々ニ腫瘍組織内又ハ結締組織内出血ヲ見ル。淋巴球ノ集族。結締組織内ニテ血管ノ周圍ニ小圓形細胞ノ浸潤集團セルヲ見ル但シ淋巴結節ノ如キ特殊ノ構造ヲ示サズ。

其或モノハ一側ニハ普通ノ稍々肥大セル内被細胞ヲ被ヒ、其對側ハ長キ「ジンチ、ウム」トナレリ、原形質ハ不正形ニ延長シ造構平等ナラズ屢々空胞ヲ作り赤血球又ハ白血球ヲ容ル、モノアリ、往々「エオジン」ニ赤染スル一二ノ滴狀物ヲ含ムモノアリ、核ハ一般ニ長紡錘形乃至橢圓形ニシテ著シク染色質ニ富ミ顆粒狀ヲ呈スルモ核小體ヲ認メズ、管腔ニハ赤血球ヲ容ル。此「ジンチ、ウム」ノ一端ハ肥大セル内被細胞ニ直接連續セリ。(第十一圖)

### 考案

本例ハ此簡單ナル記載ニ由ルモ直ニ畸形腫ナルコトヲ確認シ得ベキモノニシテ、主トシテ外胚葉性組織形態ノ發育増殖顯著ナルモノナリ。

而シテ前記上皮細胞群又ハ腺管ト密接ナル關係ニ在ル巨態細胞寧ロ「ジンチ、ウム」細胞ハ原形質、核ノ性狀全ク上皮細胞ニ等シク、核小體ヲ有スルコト竝ニ直接移行像アルコトニヨリテ、上皮細胞性異型「ジンチ、ウム」ナルコトヲ確信シ得ベシ。其空胞中稀ニ赤血球ヲ含ムモノアルモ同時ニ腺腔内又ハ周圍組織ニ出血ヲ認メラル、ニヨリ單ニ赤血球ノ横溢ニ因ル現象ナリト解シ得ベシ。而シテ此「ジンチ、ウム」ニハ空胞アルコト「エオジン」ニ濃染スルコト核ニ崩解變性ノ徵アルコト等ニヨリ退行變性產物ナリト信ゼラル。

次ニ血管ト關係アル「ジンチ、ウム」細胞ハ原形質ノ形狀不規則ニシテ、其網眼中ニ赤血球ヲ藏シ核ハ上皮細胞ト異ナリ多ク紡錘狀長橢圓形ニシテ縱ニ配列サレ染色質稍々多クシテ點狀ヲナシ、核小體ヲ缺如セル等内被細胞ニ一致セルノミナラズ、常ニ血管ト密接ナル關係ヲ示シ殊ニ其一端又ハ對側ニ

不明ナルモノハ既ニ「ジンチ、ウム」ト稱シ得ベシ。

同様ノ巨態細胞ニシテ腺管様ニ排列セル圓柱上皮細胞ト直接連續ヲ認メ得ル處アリ。(第七圖)

即チ胞巢狀上皮細胞群。腺管様ニ排列セル圓柱上皮、竝ニ「ジンチ、ウム」巨態細胞ノ三者ハ相互ノ間ニ明ナル移行像ヲ認メ得ラル、ナリ。

然ルニ血管(恐ラクハ亦淋巴管)ニ一致シテ別様ノ巨態細胞寧ロ「ジンチ、ウム」ヲ認ム。即チ緩疎ナル結締織中ニ不正形ノ管腔ヲ圍メル扁平ナル細胞アリテ、其細胞境界ハ不明トナリ、一部分ニ於テ細胞ハ甚ダ肥大シ、往々大小ノ空胞アリ、核ハ長橢圓又ハ卵圓形ニシテ染色質ニ富ミ顆粒狀トナリ、明ニ核小體ヲ示サズ、此被覆細胞ハ前記上皮細胞トハ染色上全然其性狀ヲ異ニシ、又周圍結締織トノ關係密接ナリ、而シテ此「ジンチ、ウム」様細胞ハ淋巴管ト關係アルモノ、如キモ淋巴管トノ直接連續ヲ認メ難シ。(第十圖)

或部分ニテ毛細血管ノ一端ニ網狀ヲ呈セル不正ノ原形質アリ、「エオジン」ニ淡染シ多數ノ空胞即網眼中ニ赤血球ヲ充塞シ、核ハ橢圓紡錘形乃至細長桿狀ニシテ縱ニ走り染色質ニ富ム、核ノ稍々大ナルモノハ胞狀ニ見ユルモ核小體ヲ認メズ、赤血球ノ間ニ二、三ノ淋巴球ヲ混ズ、周圍ノ結締織トノ間ニハ空隙ヲ存シ赤血球散在ス、周圍ノ結締織中ニモ出血アリ、此像ニ近ク數個ノ毛細管アリ、其一ハ此「ジンチ、ウム」ニ直接連續セリ。(第十二圖)之ト同様ノ形態ニシテ上皮細胞群ト直接シ複雑ナル像ヲ呈セル處アレドモ其細胞體及核ノ性狀明ニ相違セルニ由リ區別シ易シ。

最顯著ナルハ出血多キ腫瘍ノ一部分ニ於テ、諸處ニ毛細血管ニ近ク「ジンチ、ウム」細胞ヲ見ル。

腹膜後腫瘍。纖弱ナル間質不規則ニ走リテ大小ノ胞巢ヲナシ腫瘍細胞ヲ充塞セリ、腫瘍細胞ハ圓形又ハ多角形ニシテ原形質ハ「エオジン」ニテ極メテ淡染シ、核ハ大形ニシテ殆一定シ圓形橢圓形乃至多角形ナリ、核染質稍々多量ニシテ微細顆粒トナリ全體ニ分佈セラル、多クハ一個ノ核小體ヲ含ム、細胞間ニハ纖細ナル結締組織纖維ノ走レルヲ認メ、腫瘍細胞トノ關係密接ナリ、核ニハ往々崩壞又ハ「ピクノーゼ」ヲ示セルモノアリ、胞巢中央ニハ屢々壞死ヲ見ル。往々間質ニ接セル腫瘍細胞一列ヲナシテ念珠様トナレル處アレドモ常態ニアラズ。

淋巴結節轉移。其所見同前、壞死竈稍々著シ。

肺ノ轉移結節。腫瘍組織ハ上記ト同様ナレドモ、壞死部稍々強度ニシテ出血ヲ伴ヘリ、間質ハ甚ダ細ク周圍ノ肺胞ハ無氣狀態トナレリ。

腫瘍細胞ノ間ニ處々ニ巨態細胞様形態アリ、細胞體ハ圓滑ニシテ突起ハ少シ、「エオジン」ニテ淡紅色ニ染ミ平等ノ構造ヲ示シ著シキ空胞ヲ見ズ、核ハ大小不同ニシテ核染質ニ乏シキモノ多シ稀ニ一個ノ核小體ヲ含ム、核ノ一部ハ既ニ崩壞ヲ起セルモノアリ。

同様ノ形態ニシテ或モノハ中央ニ赤血球又ハ其變形物ヲ含ミ、或ハ多數ノ赤血球ヲ含メル腔ヲ有ス、其核ハ或ハ上記ト同ジク或ハ凹凸不平トナリ或ハ核溶解ニヨリテ囊狀トナリ「ヘマトキシリン」ニ染ミ難キモノアリ、而シテ其或モノハ確ニ内被細胞ヲ被ヘル毛細血管ト直接ニ連續セリ加之赤血球ヲ容ルル毛細血管ハ一側ハ普通ノ内被細胞ヲ示シ對側ノ内被細胞肥大シテ多核トナリ上記ノ巨態細胞ト同様ハ形態ヲ示セルモノアリ。(第十三、第十四、第十五圖)

○橋爪・腫瘍組織内ニ於ケル所謂「ジンチ、ウム」細胞ニ就テ

七〇

普通ノ内被細胞ヲ認メ其トノ移行ヲ確認セシムルニ於テ、此「ジンチ、ウム」ハ内被細胞ヨリ來リシモノナルコトハ動カスベカラズ。

即チ本例ニ於テハ上皮細胞性竝ニ内被細胞性ノ「ジンチ、ウム」ヲ認メ得ラル、ナリ、而シテ前者ハ大小胞巢ノ全部又ハ一部ガ退行變性ニ陥リテ生ジタルモノ、如ク其形狀ハ多ク圓滑不正形ニシテ、居處ノ形ニ從ヒ自ラ突起ヲ出ス如キ狀ナク核ノ性狀ハ後者ト全然相違セリ。之ニ反シ内被細胞性「ジンチウム」ハ普通、惡性脈絡膜腫ニ見ラル、夫レノ如ク極メテ不正形ニシテ突起ヲ出シ又ハ空胞ヲ作り核ハ染色質多ク細胞内ニ縦列ヲナシ核小體ヲ認メザル等全然夫レニ一致セリ、唯原形質ハ比較的透明ナルヲ見ルノミ。此内被細胞性「ジンチ、ウム」ハ、恐ラク腫瘍中ニ於テ血管新生スルニ當リ腫瘍ノ影響ヲ蒙リ異常ノ發育ヲ來シテ此ノ如キ形態ヲ生ジタルモノナラン。

### 第三例

○堀某 五十九歳 男子 睾丸肉腫轉移

病歴 一年半前肉腫ノ疑ヲ以テ左側睾丸剔出手術施行、爾來異常ナカリシモ漸次ニ腹部緊満全身倦怠意頻促ヲ訴ヘ兼テ腎炎ニ罹ル、試験の開腹手術後三日ニシテ衰弱死亡。

解剖的診斷 一、腹膜後腫瘍。二、左側睾丸ノ手術ニ因ル缺損。三、兩肺、肝及腸間膜淋巴結節ノ轉移腫瘍。四、腹腔ニ於ケル撒種。五、腹水。六、全身臟器ノ貧血。七、輕度ノ慢性腎炎。八、心筋褐色萎縮、兩肺鬱血等。

解剖所見 略ス。

組織的所見

解剖所見摘要。體格小、高度ノ羸瘦、腹部膨滿腹壁ヲ通シテ多數ノ結節狀抵抗ヲ觸知ス、腹水三「リール」、腹膜全面ニ稠密ナル腫瘍ノ撒種アリ結節ハ米粒乃至鵝卵大、乳白色ニシテ剖面蠟樣、處々軟化空洞アリ。

右卵巢。六×四浬、約鵝卵大、表面ハ球狀ノ腫瘍組織ニテ被ハル、硬度一樣ナラズ。左卵巢。表面ハ厚キ板狀、內部ニハ結節狀ノ轉移アリ。肝、上下兩面共ニ腫瘍ノ撒種浸潤著明ナレドモ肝實質中ニハ腫瘍組織ヲ認メ難シ。

### 組織の所見

伊藤學士ノ精細ナル記載アルベキニヨリ、コ、ニハ主トシテ腫瘍中ニ見ラル、巨態細胞ニ就テ記載セントス。

原發卵巢腫瘍(右側)。處々ヨリ得タル多數ノ切片ヲ檢スルニ、間質結締織ハ廣狹一定セズ不規則ニ走リテ大小ノ胞巢ヲ作り、胞巢ハ不定ノ形ヲナシ腫瘍細胞ヲ容レ、其間ニ更ニ細キ結締織索アリテ小分ス。腫瘍細胞ハ一般ニ稍大形ニシテ圓形乃至橢圓形ヲナシ密集シテ細胞ノ境界明ナラザル處アリ、核ハ細胞體ニ比シテ大、其形ハ圓又ハ橢圓ナルモノ多シ、而シテ細胞竝ニ核ハ其大サ、形共ニ甚不定ニシテ、小ナルモノハ殆ド淋巴球ニ近ク、大ナルハ甚巨大ナリ、即チ腫瘍細胞ノ多形性(Polymorphic)顯著ナリ、核自己ハ染色質ニ乏シク限界鮮明ニシテ胞狀ナク、大抵一二箇ノ核小體ヲ有ス、往々核染色質ニ富ミタルモノアリ、又核分割像ヲ認メ得。腫瘍細胞ノ配列竝ニ間質トノ關係ハ場所ニヨリ著シキ相違アリ、多クノ部分ハ上記ノ如キ腫瘍細胞ガ大小ノ胞巢ヲ作り、間質結締織ハ細キ索條トナリテ胞巢内ニ進入シ腫瘍細胞ト密接ナル關係ヲ示シ、普通肉腫ニ見ラル、如キ浸潤性ノ狀態ヲ認ム。然ルニ他ノ部分ニテハ或ハ一層ノ扁平又ハ骰子狀細胞ニテ被ハレ内部ニ腔ヲ示セルモノアリ。或ハ高圓柱形



### 考案

本例ハ原發腫瘍ヲ檢シ得ザリシモ、睾丸ヨリ發生セシ圓形細胞肉腫ノ多發轉移腫瘍ヲ來セシモノナリ。而シテ其肺轉移ニ見ラル、巨態細胞ハ、其性狀腫瘍細胞ト類似スル所アルモ細胞體稍々強ク染色シ核ノ大小不同ナルコト竝ニ毛細血管ト直接連續セル同様ノ組織形態アルコト、其内部ニ赤血球ヲ抱容セルモノアル等ニ由リテ、此巨態細胞ハ毛細血管壁ノ内被細胞ヨリ變型的ニ發生シタルモノナリト信ズ、殊ニ同様ノ形態ヲ他ノ轉移腫瘍ニ認メザルコトハ其ガ腫瘍細胞ヨリ發生セシモノニアラザルヲ説明セリ。

而シテ此巨態細胞ニハ核染質ノ溶解崩解等顯著ナルヲ以テ恐ラク新生毛細血管内被細胞ガ腫瘍ノ爲ニ退行變性ヲ起シテ生ジタルモノナランカ。

### 第四例

○野某 四十三歳 婦人 右卵巢癌腫

本例ハ伊藤醫學士ノ解剖セラレシモノニシテ同氏ハ其研究ノ成績ヲ近ク發表セラル、筈ナリ。

病歴 大正六年八月(死前八箇月)以來腹部緊滿膨隆ヲ認メ爾來膨滿漸次増大シ屢々穿刺ニヨリテ内容ヲ洩セリ、九月末ニ至リ子宮後部ニ四五ノ拇指頭大ノ腫瘍ヲ觸レ、十二月右側實質性卵巢腫瘍ノ診斷ヲ確メ(當時既ニ爲卵大)爾後衰弱加ハリ、七年三月下旬死ス。

解剖的診斷 一、右側卵巢癌腫。二、癌腫性全腹膜炎。三、左側卵巢及前縱竇ノ轉移。四、腹水。五、貧血。六、萎縮性積滯子肝。七、心筋褐色萎縮等。

腸間膜轉移及前縱竇轉移ニ於テ腫瘍細胞ノ多形性甚顯著ナルヲ認メ、殊ニ後者ニ於テハ「ジシチ、ウム」様ノ巨態細胞ガ明核ノ腫瘍細胞間ニ點綴シテ、恰モ達型ノ惡性脈絡膜腫ニ似タル像ヲ呈スレドモ、間質殊ニ血管ノ多數ニ認メラル、コトハ注意スベシ（第十七圖）

### 考案

本腫瘍ハ解剖的ニ右側卵巢ヨリ發生シタル惡性實質性腫瘍ナルコトヲ確認セラル、モ、其組織的検査ニ方リ種々ノ疑義ヲ惹起セシム。腫瘍組織ガ屢々肉腫様ニ浸潤シ間質ト密接ナル關係アル如ク其腫瘍細胞ノ或モノハ肉腫ノ圓形細胞ヲ想ハシム、然モ他部ニ於テ紡錘形、圓柱形細胞アリ、又腔ヲ圍ミテ腺管様ヲナセルモノアリ、又腫瘍中最多ク存スル細胞ハ胞狀ニシテ核染質ニ乏シキ核ヲ有スルコト等ハ肉腫ニ反對ス。

又所謂「ペリテリオーム」ノ如ク血管周圍ノ放線狀配列、腫瘍細胞ノ多形性ヲ示セルハ內被細胞腫ヲ疑ハシムルモ上記ノ如キ細胞ノ性狀殊ニ腺管様、乳嘴腫様ヲナスコト又種々ノ方法ニヨルモ細胞間物質ヲ證明シ得ザリシコト等ヨリ內被細胞腫トハイヒ難クシテ本腫瘍ハ上皮細胞腫即チ癌腫ナリトスルヲ最穩當ナリト信ズ。此點ニ就キテハ伊藤學士詳細ニ記載説明セラル、筈ナリ。

而シテ此腫瘍中ニ見ラル、巨態細胞ハ腫瘍細胞ノ達型増殖ニ由リテ發生シタルモノナリト信ズ、上記ノ如ク巨態細胞ノ原形質核ノ性狀全ク腫瘍細胞ト一致シ、殊ニ腫瘍細胞中二三核ヲ藏スルモノ諸處ニ認メラル、ハ此兩者間ノ移行型ニ他ナラズ、之ニ反シ巨態細胞ハ間質殊ニ血管トハ密接ナル關係ヲ示サズ、即チ此巨態細胞ハ腫瘍細胞ヨリ發生セシモノニシテ上皮細胞性ナリ。

ノ細胞整列シ、卵圓形ノ核其基底部ニ占居シ恰モ腺管ノ如キ像ヲ呈スルモノアリ。其著シキモノハ乳嚢様ノ増殖アリテ、乳嚢性卵巢嚢腫ニ於ケル如キ美シキ形態ヲナス。殊ニ顯著ナルハ中小血管ノ周圍ニ散子狀又ハ短圓柱形ノ腫瘍細胞放線狀ニ整列重疊シテ所謂「ベリテリオーム」トイフベキ像ヲ示セル處アリ。

腫瘍ノ變化ヲ蒙ラザル部分尙處々ニ殘リ卵巢固有ノ組織アリ、而シテ白體ノ一部腫瘍ノ浸潤ヲ蒙リ其組織間隙ニ腫瘍細胞ノ進入セルヲ認メ得。尙腫瘍組織中ニ於テ屢々胞巢ノ中央ニ壞死ヲ認メ得タリ。是等ノ腫瘍細胞ノ間ニ多數ノ巨態細胞アリ、其形不規則ニシテ大サ亦一定セズ、唯其巨大ナルモノナク又著シク突起ヲ出セルモノナシ、原形質ハ腫瘍細胞ト同様「エオジン」ニ淡染シ若クハ稍々暗染ス、内部均等ナルモノアレドモ屢々數箇ノ空胞ヲ有ス、脂肪染色ニヨリ滴狀ノ脂肪ヲ認ムルニヨリ恐ラク其脱落セシ痕ナラン。核ハ其大サ性狀等腫瘍細胞ト全ク相等シク、唯染色質ニ富ミ且巨大ナルモノ一層多數ニ認メラル、核小體一箇ヲ認メ得ルモノ多シ、核ノ數ハ大抵三、五箇ニシテ十箇ヲ超ユルモノ稀ナリ、大抵細胞體ノ一部ニ集團シ又ハ不規則ニ散在ス、屢々核崩解ヲ示セルモノヲ混ズ、此ノ如キ巨態細胞ハ大抵胞巢ノ中部ニ散在スルモノ多シ、往々壞死竈ニ近キモノアリ、又稀ニ間質ニ接シ極小ナル細胞團ノ一部又ハ半部以上ヲ占ムルモノアリ、要スルニ巨態細胞ノ配置ニハ一定ノ法則ヲ認メ得ザルナリ。(第十六圖)

轉移腫瘍。他側卵巢。腸間膜。ドーグラス氏窩。腸壁漿膜面。肝ノ表面。前縱竇等ニ存スルモノノ就レモ上記諸型ノ腫瘍組織ヨリ成リ、腫瘍細胞ノ性狀、巨態細胞ノ分佈其他全然上記ト同様ナリ、就中

肝臓内腫瘍 結締組織著シク増殖シテ肝實質ハ大小ノ胞巢ヲ成シ、各胞巢ニハ腫瘍細胞充塞スレドモ腐敗氣腫ニ因ル空隙アリ、又壞死ニ陥レル部分甚多シ。腫瘍細胞ハ一團ヲナシ其間ニ纖小ノ毛細管アルヲ明ニ認メ得ル處アリ、腫瘍細胞ハ圓形多角形ニシテ原形質ニ富ミ、多數ノ空隙脂肪顆粒ヲ示シ、核ハ胞狀ニシテ圓形橢圓形亦甚大ナリ、染色質ニ乏シク一二箇ノ核小體ヲ認メシム、此單核腫瘍細胞間ニ之ト錯綜シテ多數ノ巨態細胞アリ。

巨態細胞、小ナルモノハ二三箇ノ核ヲ有シ胞狀ニシテ腫瘍細胞ノ其ト等シク健全ナル外觀ヲ呈シ、原形質亦空胞ヲ有スルコト少シ、然ルニ稍々大ナル巨態細胞ハ核數十數箇乃至二十ニ及ビ其性狀前者ト同一ノモノアレドモ屢々染色質ニ富ミ、甚シク、大形トナレルモノアリ。核質ノ融解、崩解著シキモノニハ亦空胞モ著明ナリ。核ノ配置ハ多ク中心ニ集團セルモ亦一方ニ偏在セルモアリ、此巨態細胞ノ形ハ甚不定ナレドモ屢々突起ヲ出シ多クハ紡錘狀星芒狀ヲナス、而シテ眞ノ「ジンチ、ウム」ノ如キ甚延長セル突起ヲ出サズ。而シテ單核ノ腫瘍細胞ヨリ二三核乃至多核ノ巨態細胞トナルマデノ各階級ノ移行像ヲ認メ得ベシ。

### 考案

本例ノ實質性肝癌ナルコトハ松井學士ノ詳細ナル記載ト説明トニヨリテ決定セリ。而シテ其腫瘍細胞間ニ存スル巨態細胞ハ、腫瘍細胞ト染色上ノ性質ヲ等シクスルコト及ビ各階級ノ移行型ヲ追跡シ得ルコトニヨリテ、腫瘍細胞ヨリ來リシモノ即チ上皮細胞性ナルコトハ明ナリ。

此ノ如キ巨態細胞若クハ「ジンチ、ウム」ガ癌腫ノ際屢々發見セラル、コトハ既ニマルシャン、ケブハ

○橋爪・腫瘍組織内ニ於ケル所謂「ジンチ、ウム」細胞ニ就テ

七六

更ニ此巨態細胞ガ腫瘍細胞ノ退行變性產物ニアラザルコトハ、其所在寧ロ壞死部ニ近カラズ、染色ノ狀態モ腫瘍細胞ト相違セズ、其附近ノ腫瘍細胞ニ核分割像アルコトニヨリテ認メ得ベシ、然モ巨態細胞ニハ核崩解ヲ見ルコト腫瘍細胞ニ比シテ屢々ナルコトハ爭ヒ難シ。

ミッヘルハ卵巢癌腫ニ惡性脈絡膜腫樣形態ヲ認メタリシガ本例ハ氏ノ例ニ酷似セル所アリ、唯所謂「ジンチ、ウム」樣形態甚不完全ニシテ惡性脈絡膜腫類似ヲ云ヒ難シ、唯前縱資轉移結節ニ多少類似ノ像アルモ間質、血管ノ進入ハ之ヲ裏切ルモノナリ。

## 第五例

○川○雄 六十一歳 男子 原發性實質性肝癌

本例ハ東京醫學會雜誌第三十二卷第十五號ニ松井醫學士ノ報告セラレタルモノニシテ、解剖的ニ原發性膽囊癌ト思ハレシガ、組織的檢案ニヨリテ原發性實質性肝癌即「ヘパトーム」ナルコトヲ證明セラレタリ。

病歴 患者ハ壯年時ニハ大酒ナリシガ近年攝養シ最近ニハ殆ド之ヲ廢ス、大正六年十二月偶然肝右葉ノ著明ニ腫大セルヲ發見セラレ、續テ兩葉ノ腫大ヲ認メラル、爾來時々熱發アリ、大正七年三月熱發ト共ニ惡心嘔吐ヲ伴ヒ、三月二十日來黃疸アリ、更ニ下痢蛋白尿等加ハリ衰弱ノ極終ニ四月七日死去。

解剖的診斷 一、原發性膽囊癌但シ膽石無シ、二、肝内轉移殊ニ右葉、三、肝腐敗性氣腫、四、膽囊壁癌腫性浸潤及膽囊壁及其内腔ヘノ出血、五、脂肪心、六、慢性腎臟炎、七、高度ノ全身性黃疸、八、實質性諸臟器ノ高度脆軟（主トシテ腐敗）等。

組織的所見

ハ數層ノ腫瘍細胞ヲ被ヘリ。腫瘍細胞ハ大ニシテ橢圓形又ハ短圓柱狀ヲナシ周圍ノ關係ニヨリ種々ノ形狀トナル、往々明ニ短圓柱細胞ノ間質上ニ整列セルヲ見ル、原形質ハ「エオジン」ニ淡染シ多少泡沫樣構造ヲ示セリ、核モ亦大ニシテ圓形乃至橢圓形ヲナシ胞狀ヲ呈シ染色質ニ乏シク往々一箇ノ核小體ヲ有ス、屢々核ノ變形染色質増加ヲ認ム、又異常ニ巨大ナル胞狀核ヲ見ルコトアリ、核崩解ノ像ヲ混ズルコトアリ。

腫瘍細胞ノ境界屢々不明トナリ、著シキモノハ巨態細胞ヲ形成ス、其小ナルハ二三核一團ヲナシ大ナルハ五六箇以上アリ、多クハ腫瘍細胞ト同等ナレドモ其一部ハ「ビクノーズ」樣トナリ核崩解ヲ示セリ(第十八圖)

原形質ハ腫瘍細胞ニ等シキモ稀ニ一二ノ空胞ヲ示セリ、巨態細胞ハ一般ニ圓滑ナル形ヲ有シ突起ヲ出スコト少シ稀ニ稍々長キモノアリ、又結締組織ニテ圍マレタル一箇ノ胞巢全部ガ細胞境界ヲ消失シ巨態細胞トナレルモノ屢々ナリ、稍々大ナル胞巢ニテ中央部壞死ニ陥リタルモノアリ。

結締組織間質中又ハ腫瘍組織ノ内外ニ於テ「ヘマトキシリン」ニ濃染セル大小不定形ノ石灰沈著ヲ認ム。腹膜淋巴結節ノ轉移。腫瘍組織ハ亦腺管樣島嶼狀トナリテ存シ、石灰沈著壞死等上記ト同様ナリ、巨態細胞ハ前記ト同様ニシテ腫瘍細胞ヨリノ階級的移行像ヲ認ム。

### 考 案

本腫瘍ハ解剖的組織のニ輸膽管粘膜炎上皮細胞ヨリ發生シタル癌腫ニシテ石灰沈著ヲ伴ヘリ。本例ノ巨態細胞ハ其原形質及核ノ性狀全ク腫瘍細胞ノ其ト一致シ、其相互ノ間ニ漸進的移行ヲ認メ

○橋爪・腫瘍組織内ニ於ケル所謂「ジンチ、ウム」細胞ニ就テ

○橋爪・腫瘍組織内ニ於ケル所謂「ジンチ、ウム」細胞ニ就テ

七八

ルド、ボルマン氏等ノ既ニ示サレシ處ニシテ、リーゼルハ胃癌ノ二例ニ於テ腫瘍組織中ニ多核ノ「ジンチ、ウム」ヲ認メ恰モ惡性脈絡膜腫瘍ノ形態ヲ呈セシモ、其ハ癌腫成分ニ相違ナキコトヲ述ベ且ツ眞ノ脈絡膜腫瘍形態ヲ有スル腫瘍ト區別スベキヲ說ケリ。

本例ニ於テハ前記第四例ト同様ニ巨態細胞ハ腫瘍細胞ヨリ來リシモノニシテ、其トノ間ニ二三核乃至多核ヲ有スル移行型ヲ追究シ得ラレ、且ツ其原形質及核ハ全然腫瘍細胞ノ其ト同様ナルモノ多ク、其所在必ズシモ壊死部其他退行變性部ト關係ヲ示サズ、即チ腫瘍細胞ノ違型の増殖ノ產物ナルベシト信ズ。リーゼルモ其例ニ於テ發育旺盛ナリシヲ認メテペテルゼンノ巨態細胞ハ癌細胞ノ破壞始マレル微ナリトイフニ反對セリ。

## 第六例

○藤某 六十二歳 男 膽囊輸膽管癌腫

病歴 死亡前八箇月頃腹部ニ壓迫緊張感アリ漸次膨滿ヲ來ス、若キ頃微毒ニ罹リシコトアリ飲酒セズ死ノ一箇月前入院爾後二回ノ穿刺ニヨリ腹水六「リ」テルヲ漏ス漸次衰弱加ハリ死亡、(診斷肝硬變)

解剖的診斷 一、膽囊輸膽管癌腫、二、膽囊、肝及鎖骨上門脈周圍腹膜後淋巴腺ニ於ケル轉移、三、膽囊水腫、四、肝輸膽管ノ擴張、五、膽管及膽管周圍膿瘍、六、漿膜水腫、七、全身ノ萎縮、八、萎縮腎等。

### 組織的所見

原發腫瘍 肝ノ一部ト癒著セル部分ニシテ肝莢膜肥厚シ、其中ニ大小多數ノ腫瘍組織アリ、腺管樣トナリ又ハ實質性細胞索トナリテ肝ニ向ヒ増殖進行セル像ヲ呈ス、腫瘍組織ハ多ク管腔ヲ有シ一層又

テ原形質ニ富ミ其ハ居處ノ關係ニヨリ種々ノ形態ヲ取ルモ橢圓形多角形ナルモノ多シ、往々小ナル空胞アリ、脂肪ノ脫出シタル跡ナル如シ、核ハ圓形卵圓形ニシテ概シテ染色質ニ乏シク透明胞狀ニ見ユ、大抵一箇ノ核小體ヲ有ス、往々染色質網ノ太キモノアリ、屢々同様ノ細胞ニシテ二三核ヲ有セルモノアリ、又細胞ノ境界不明トナリ融合セル如ク見ユルモアリ。所見ハ概シテ普通胃ニ見ラル、硬性、癌ニ一致シ、唯間質中弱キ又ハ稍々強キ圓形細胞浸潤アリ、壞死ハ認メ難シ。

腸間膜淋巴結節轉移。結節ハ大部分腫瘍組織トナリ其一端ニ淋巴腺ノ構造ヲ認メ得、殊ニ其部分ニ淋巴竇ニ腫瘍細胞群ノ栓塞ヲ認ム。

其他ノ部分ニ於テハ癌組織ノミヲ認メラレ、其間ニ纖細ナル結締組織索不規則ニ走リテ極小ナル細胞群ニ分テリ、此ノ如キ小胞巢中ニ數箇ノ細胞融合セル如ク見ユルモノアリ、又其或モノハ明ニ細胞境界ヲ認メ難キ巨態細胞アリ、其形不規則ニシテ多クハ類圓形ナレドモ亦突起ヲ有スルモアリ、原形質ハ腫瘍細胞ト等シク往々小空胞ヲ含ム、核ハ亦癌細胞ノ其ト同一ナリ、而シテ二三核ノ腫瘍細胞アルハ此巨態細胞トノ移行型ト見做スベキモノナリ。

轉移腫瘍ニ於テハ稍々大ナル胞巢ヲ作り、其中心ニ壞死ヲ認メ得ル處アリ。

### 考案

本例ニ於ケル巨態細胞ハ其性狀腫瘍細胞ト全然同一ニシテ其間ニ種々ノ移行型ヲ認メ得ルニヨリ、癌細胞ヨリ生ジタルコトハ疑ナシ。(本例ガ胃幽門部ニ發生シタル硬性癌ナルコトハ病歴其他ノ示ス所ニヨリテ明ナリ)。



ラル、ニヨリ巨態細胞ハ腫瘍細胞ヨリ發生セルモノナリ。

其發生スルニ當リ二三核ノモノヨリ進デ巨態細胞トナルヲ認ムルニヨリ、違型増殖ノ結果トシテ生ジタリト思ハル、ト同時ニ、他方ニ於テ巨態細胞ニハ核染質増加、核崩解空胞形成等退行變性ノ像ヲ呈シ、殊ニ一胞巢全部ガ一箇ノ巨態細胞トナレルヲ見レバ、恐ラク此巨態細胞ハ腫瘍増殖ト同時ニ起レル退行變性ノ產物ナルベキカ。

本腫瘍内ニハ一見シテ違型脈絡膜腫ノ如キ觀ヲ呈スル部分アレドモ、細胞ノ配置ハ不規則ニシテ、巨態細胞中ニモ胞狀ノ核アリ、他ノ部分ニハ惡性脈絡膜腫類似ノ像ヲ見ズ、即本腫瘍ハ惡性脈絡膜腫ニハ全ク關係ナキコトヲ斷言シ得。

### 第七例

○岡○太郎 四十三歳 男子 幽門部癌腫

病歴 大正七年三月初旬頃胃部不快感アリ日々一回嘔吐アリ、四月胃部ノ劇痛ヲ覺ヘ咖啡渣樣物ヲ吐出ス、胃腸吻合手術施行セラレシガ五月十日死亡。

解剖的診斷 一、纖維素性化膿性全腹膜炎 二、化膿性肋膜炎、三、纖維素性心囊炎、四、幽門部腫瘍性狭窄、(癌腫)五、肺水腫、六、兩側實質性腎炎、七、胃加答兒、八、局處及腸間膜淋巴結節轉移等。

### 組織的所見

胃原發腫瘍 胃壁ハ腫瘍組織ニヨリテ肥厚セリ、腫瘍ハ著シク増殖セル結締織中ニ細キ細胞柱又ハ索條トシテ増殖セリ、稀ニ稍々大ナル胞巢ヲナセドモ大抵ハ數箇ノ細胞群ヨリ成ル、腫瘍細胞ハ大ニシ

人工肛門ヲ作ル、爾後症狀増悪タニ轉移ヲ來シ七月中旬死亡。

解剖的診斷 一、會陰部附近ニ發生セル肉腫（？）二、腸骨窩腺、腹膜、左右鼠蹊腺及氣管枝腺ニ於ケル轉移、三、兩下肢及手背ノ浮腫、四、漿膜下出血、五、心臟單純擴張、六、全身貧血、七、左腎ノ腫脹、八、右側輕度ノ水腎、組織の所見。

腫瘍ハ一般ニ多數ノ廣狹不定ノ結締織層ニヨリテ大小形不同ノ胞巢ヲ作り、腫瘍實質内ニハ多數ノ細間隙アリ緻密ナル海綿樣構造ヲ呈ス。腫瘍細胞ハ圓形又ハ卵圓形或ハ多角形ニシテ大形、原形質ハ極テ淡染シ、核ハ圓形卵圓形ニシテ細胞體ニ比シ大ク、染色質ハ其量不定ニシテ或ハ稍々多量或ハ甚少量、何レモ微細顆粒ヲナセリ、往々核小體ニ似タル像ヲ見ルコトアルモ赤染セズ、注視スレバ太キ染色質網ノ結節ニ他ナラズ、而シテ腫瘍細胞及其核ハ周圍ノ狀況ニヨリ多少其形ヲ異ニセル處アリ。

顯著ナルハ巨態細胞ニシテ、其數ハ切片ニヨリテ多少ノ差アルモ一般ニ甚多ク、大抵間質結締織ニ接近シテ存シ時ニ之ト密接シテ原形質ノ連續セル如ク見ユルモノアリ、其形ハ概シテ圓形、不正橢圓形、紡錘形等ナルモ稀ニ稍々長ク不規則ノ突起ヲ出セルモノアリ、腫瘍細胞ト同ジク極メテ淡染シ往々稍々暗色ノモノアリ著シキ空胞ヲ見ルコトナシ、一般ニ細胞體ノ中心部ハ周緣部ヨリモ淡染シ、殆ド透明ナルモノアリ、又大形ノモノハ小形ノモノヨリモ淡染セリ、核ハ圓形卵圓形ニシテ往々腎臟形或ハ鎌狀ノモノアリ、核染色質ハ其量不定ナレドモ其性狀ハ全然腫瘍細胞ト一致セリ、核數ハ四五箇ヨリ十數箇ニ及ブ、配置ハ多ク結核巨態細胞ニ類シ大抵邊緣部ニ縱列ヲナシ中心部ハ空虚ナリ、稀ニ不正ニ群居セルモアリ、巨態細胞ノ或モノニ於テ核染色質著シク増加シ核崩解ヲ來セルモノヲ混ジ居レリ。

○橋爪・腫瘍組織内ニ於ケル所謂「ジンチ、ウム」細胞ニ就テ

而シテ巨態細胞ガ原發部位ニテ極メテ輕度ニシテ、轉移結節中ニ比較的顯著ナルハ恐ラク周圍組織ノ相違ニ因ルナラン、即胃壁ニ於テハ結締織ノ増殖強キ爲ニ腫瘍組織ハ其間ニ細キ索狀細胞群トシテ見ラレ、轉移ニテハ自由ニ増殖發育シ得ラレ、稍々大ナル胞巢ヲ作レリ、巨態細胞ノ形成モ亦同一ノ關係ニアル如シ。

巨態細胞ノ或モノハ往々空胞ヲ有スレドモ多數ニ於テハ原形質核ノ性狀全ク腫瘍細胞ト同一ニシテ、巨態細胞ニ特ニ多ク退行變性像ヲ見ザルコト。壞死セル部分ニ巨態細胞ノ痕跡ヲ認メザルコト。竝ニ退行變性ヲ示サル原發腫瘍ニテモ巨態細胞形成ノ狀態ヲ認メ得ルコト等ニ由リ、此巨態細胞ハ癌細胞ノ違型増殖ニヨリ形成セラルト考フルハ至當ナルベシ、然モ此際融合作用モ亦行ハレシコトヲ否定スベキ理由ヲ有セズ。

## 第八例

### ○木某 二十四歳 男 陰莖血管内被細胞腫

本例ハ嘗テ長與博士ガ「三浦守治先生就職二十年祝賀論文集」ニ「陰莖血管内被細胞腫」トシテ記載セラレシモノニシテ、博士ハ「本例ハ小骨盤内ニ發生シ急速ニ増殖セシ惡性腫瘍」ナリトセラレ、精細ナル組織的檢索ニ由リテ「海綿體起根部殊ニ尿道海綿體球部ヨリ發生セシ血管内被細胞腫」ナリト決定セラレタリキ、而シテ此腫瘍組織ニハ異常ニ顯著ナル巨態細胞アルコト博士ノ記載セラレシ如ク余ハ其ニ就テ觀察セリ。

病歴 二十一歳淋疾ニ罹リ一旦治癒セシモ、二十三歳ノ三月陰莖ト肛門トノ中間ニ小指頭大ノ結節ヲ發見セシガ疼痛ナシ、九月鼠蹊腺ノ腫脹ヲ認メ、二十四歳ノ三月入院、當時腫瘍ハ鶩卵大トナリ剔出不可能ニシテ便通不能ノ爲メ

口腫瘍細胞ノ違型増殖ノ爲ニ生ジタルモノト説明スルヲ解シ易シト信ズ。

本例ノ巨態細胞ハ上記ノ如ク結核ニ於ケルラングハンス巨態細胞ニ酷似セリ、ヘルクスハイメル氏ハ結核巨態細胞ハ類上皮細胞ヨリ來レルヲ證明シ、其移行型ニ於テ本例ニ見ル如キ核ノ對立的配置ヲ見、其中央ニ Sphäre ヲ確認シ、氏ハラ氏巨態細胞ハ原形質分割ヲ伴ハザル持續的核分割ニヨリテ類上皮細胞ヨリ發生セリト證明セリ、本例ニ於テハ細密ノ構造ヲ檢シ得ザルモニ核對立ノ像ト完成セル形態トニ於テ兩者ニ類似ヲ見ルヲ以テ前記ノ余ノ假設ハ全ク無價值ニハアラザルベシ。

## 第九例

### ○石〇三 男兒 大腿骨膜肉腫

本例ハ癌第十二年第一冊ニ長興博士兒玉學士ノ報告セラレタル「大腿骨骨膜ヨリ發生セル軟骨肉腫ノ極メテ廣汎ナル肺轉移」ニシテ同記載ヲ抄録スルコト左ノ如シ。

病歴 大正五年十一月初メテ右大腿下端内側ニ腫脹疼痛アリ一時加療ニヨリ輕快、大正六年一月再び同様ノ症狀アリ切開シテ腫瘍ヲ發見シ肉腫ト診斷セラレ、同月十六日同大腿上部ヨリ切斷セリ、然ルニ四月右胸部ノ疼痛アリ、發熱、咳嗽ヲ伴ヒ増惡シテ七月左胸ニ及ビ同十五日死亡。

原發腫瘍 大腿下端内側約半部隆起シ暗赤色ノ浸潤アリ縱斷面ニテ腫瘍ハ骨膜又ハ其直下ヨリ發生セルコトヲ認ム。解剖所見 前縱竇及胸腔ノ下半ハ到處腫瘍組織ノ占ムル所トナリ各臟器ハ之ニ癒著セリ、腹腔、腹膜後腔ニ腫瘍ナシ、腫瘍ハ大人頭大右胸腔ニアルモノ最大ニシテ下葉ニアルモノハ軟化セリ、上中葉ハ無氣狀トナリ轉移結節アリ。腫瘍ハ灰白乃至淡黃灰白色ニテ血容少シ、大部分軟骨樣硬度ヲ有シ表面滑澤ナリ、小結節ニハ往々石灰沈著アリ。

○橋爪・腫瘍組織内ニ於ケル所謂「ジンチ、ウム」細胞ニ就テ

(第十九圖)

又屢々間質ヲ被覆セル一層ノ腫瘍細胞ノ列中特ニ高マリテ數層ノ細胞群トナリ、其或モノハ上記ノ巨態細胞ノ前階ナル如ク見ユ。(第二十、二十一圖)

尙注意スレバ腫瘍細胞中ニ屢々二三核ヲ有スル巨態細胞移行型ト思ハル、細胞ヲ認ム、其大ハ腫瘍細胞ト大差ナク原形質、核ノ性狀ハ同一ナリ、二核ノモノニ於テ其核ハソレゾレ腎臟形又ハ鎌狀ヲナシテ相對立セルモノアリ、進デ三四核アルモノニテモ亦相對立セル如キ配置ヲ示セリ、更ニ多核ナルモノト前記巨態細胞トノ間ニハ各階級ノ漸進的移行型アリ、是等少數核ヲ有スルモノ移行型ノ腫瘍細胞ニテ其核原形質ニ退行變性ヲ認メ難シ。

考案

本腫瘍ガ血管内被細胞腫ナルコトハ長與博士ノ銳利ナル觀察ト説明トニヨリテ確定的ナリト信ズ、即チ腫瘍細胞ハ海綿體ノ血管内被細胞ヨリ増殖シ來リシモノナリ。

而シテ巨態細胞ハ上記ノ所見即チ細胞性狀ノ一致、種々ノ階級ニ在ル移行型ニ由リテ腫瘍細胞ヨリ來リシモノナルコト即チ内被細胞性ナリト斷言シ得ベシ。

長與博士ハ此巨態細胞ハ「腫瘍細胞ノ融合ニヨリテ」生ジタルモノト説カレタリキ、實ニ其形狀トイヒ又一列ノ腫瘍細胞中一部ニ巨態細胞ノ膨レ上リタル如キ所見トイヒ融合ニ適スル如シ、然モ前記ノ如ク巨態細胞ノ前階ト思ハル、少數核ヲ有スル腫瘍細胞ニハ核崩解、空胞形成ノ如キ退行像ヲ認メザルコト及ビ二核ガ細胞兩極ニ對立セル狀況等ハ此巨態細胞ガ單ニ融合ニヨリ生ジタリトイフヨリモ寧

果トシテ生ゼル肉腫細胞ニシテ腫瘍細胞トノ各階級ノ移行型アルコト細胞體及核ノ性狀全然相一致セルコトハ其證トナスベシ即チ結締織性巨態細胞ナリ。

而シテ周圍ノ發育旺盛ナリト思ハル、部分ニテ此巨態細胞ハ毫モ退行變性ノ徵ヲ認メズ、周圍ノ腫瘍組織ニ退行變性ノ徵候アル部分ニテ巨態細胞ニモ退行變性ヲ想ハシムル所アリ、從テ此巨態細胞ハ腫瘍細胞増殖ノ際ニ發生シタルモノニシテ單ニ退行變性產物ニアラズト信ゼラル。

此種ノ巨態細胞ハ屢々發見セラル、モノニシテ其外觀モ亦眞ノ「ジンチ、ウム」細胞トハ甚相違セリ、即チ本腫瘍ニ於テハ腫瘍細胞ヨリ發生シタル巨態細胞ヲ有スレドモ眞ニ「ジンチ、ウム」ト稱スベキ形態ヲ發見シ得ザリキ。

## 第十例

○珍○次郎 四十歲 男子

病歴 記錄ナシ

解剖的診斷。一、腹膜後腔ニ發生セル惡性腫瘍(原腎遺殘?ヨリ出タル上皮細胞性腫瘍)。二、兩肺及肺門部淋巴結節ニ於ケル轉移。三、脊柱前縱走韌帶ノ腫瘍性浸潤(第二乃至第四腰椎ノ高サ)。四、急性腎炎、五、肝心臟褐色萎縮。六、萎縮性脾等

解剖所見摘要 腹腔ヲ開クニ大網ハ前腹壁ト癒著シ第二乃至第四腰椎ノ高サニ一箇ノ不平結節狀ノ表面ヲ有シ柔軟ナル手拳大ノ腫瘍アリ脊柱ニ密接シ大動脈下腔靜脈ハ腫瘍組織ヲ貫通シ兩輸尿管ハ腫瘍ノ兩側ヲ走ル腫瘍ノ前面ハ腹膜ニテ被ハレ腸管ト關係ナシ。腫瘍ハ表面灰白色ニシテ所々黃色ヲ帶ビ割面ハ所々ニ壞死竈アリ軟化シ暗褐乃至暗紅

○橋爪・腫瘍組織内ニ於ケル所謂「ジンチ、ウム」細胞ニ就テ

組織の所見。

肺轉移腫瘍。長與博士兒玉學士ノ記載セラレシ如ク本腫瘍ハ「著シク軟骨形成機轉ニ富メル紡錘形肉腫ニシテ其間ニ粘液腫組織ヲ交ヘタル軟骨肉腫或ハ粘液腫性軟骨肉腫ト稱スベキモノ」ナリ、而シテ處々ニ石灰沈著及壞死ヲ認メ且ツ多數ノ巨態細胞アリ。

腫瘍細胞ハ種々ノ形ヲ呈スレドモ、多數ハ紡錘狀ニシテ稍々短ク圓形ニ見ユルモアリ、細胞體ハ「エオジン」ニ赤染シ核ハ比較的大ニシテ短橢圓形ヲナシ染色質ニ富ム、其他ニ屢々圓形、多角形、又長紡錘狀細胞アリ、從テ核モ長紡錘狀鑷狀等ヲ見ル。

腫瘍細胞ノ間又ハ稍々單獨ニ巨態細胞アリ、大抵數箇乃至十箇位ノ核ヲ有ス、核ハ腫瘍細胞ノ其ト性狀一致セルモ其形稍々大ナルモノアリ、又多數ニ存スルトキ稍々小ナルモアリ、巨態細胞ノ小ナルモノハ腫瘍細胞ト殆異ナラザルモ、大ナルモノハ其形稍々不正ニシテ諸方ニ突起ヲ出シ細胞體ニハ閉ニ空胞ヲ示ス恐ラク脂肪滴ノ脱出セル跡ナルベシ、其他ニ「エオジン」ニテ赤染スル滴狀物ヲ多數ニ認ムルコトアリ、核ノ配置ハ一定セズ大抵中央ニ群居セルモ往々一列ヲナシ或ハ一側ニ偏在シ或ハ邊緣ニ輪狀ニ竝ブ、是等ノ巨態細胞ト腫瘍細胞トノ間ニハ各種ノ移行型ヲ示セリ。

尙腫瘍細胞巨態細胞共ニ核質溶解又ハ融合ヲ示セルモノ存シ、時ニ脂肪顆粒ヲ含ム壞死部又ハ散在性ニ存スルモノニハ殊ニ退行變性ノ像ヲ認メラル。

考案

本例ニ於ケル巨態細胞ハ長與博士兒玉學士ノイハル、如ク「違型的ニ發育セルカ又ハ違型分割ノ結

ミ赤染セル腫瘍細胞赤血球ト混在セリ。

往々是等ノ腫瘍細胞ノ間ニ數箇ノ細胞其境界不明トナリ融合セル如ク見ユル一種ノ巨態細胞アリ、不正形ニシテ原形質ハ泡沫様ニ見エ「エオジン」ニ一層淡ク染ミ、其核ハ全然腫瘍細胞ノ其ト等シク通常三四箇乃至十箇ノ核ヲ有セリ、其細胞體ノ一部ニ於テ境界尙明ニ認メ得ル所アリ、或モノハ結締織網中ニ存シ恰モ一小胞巢中ノ細胞群融合シテ巨態細胞トナレル如キ印象ヲ與フ。

然ルニ或部分ニ於テ結締織間質中ニ別様ノ巨態細胞アリ頗ル大ニシテ不正形ヲナシ「エオジン」ニ淡染シ雲霧様ノ潤濁アレドモ空胞ヲ見ズ、核ハ數箇アリ長橢圓、桿狀又ハ紡錘形ニシテ染色質ニ富ミ縱ニ整列セリ、此巨態細胞ノ一端ハ間質中ノ毛細血管ニ向ヒ其血管壁ノ一側ハ同様ノ構造ヲ示セリ、然レドモ此巨態細胞ノ原形質及核ノ性狀ハ其周圍ニ在ル結締織細胞ノ其ト全ク一致セルヲ認ム、此種ノ巨態細胞ハ同一斷片ヨリノ切片ニハ見ラル、モ他部ノ切片ニハ發見シ得ザリキ。(第二十二圖)

又別ノ一切片ニ於テ血管ノ周圍ニ上記ト同一ノ腫瘍細胞ガ層ヲナシテ放線狀ニ整列シ恰モ所謂「ベリテリオーム」ニ固有ナル如キ像ヲ示セリ、然レドモ此ノ如キ形態モ亦甚稀ニシテ他ノ切片ニハ見出シ難シ。

肺轉移結節。米粒大豌豆大ノ小ナル轉移結節ニ於テモ既ニ中央壞死ニ陥リ、腫瘍組織ハ周圍ニ殘リ不規則ニ結締織ニヨリテ分タレ胞巢ヲ作り多少肺胞ノ痕ヲ示セリ、屢々中央ニ出血セルモノアリ、腫瘍細胞ハ原發腫瘍ニ於ケルト同一ノ性狀ヲ有ス。稍々大ナル結節ニ於テハ腫瘍細胞ト結締織トノ關係稍々複雑ナリ、結締織ハ纖維ニ乏シク種々ノ方面ニ走り、其網眼中心ニハ「エオジン」ニ赤染スル細胞

○橋爪・腫瘍組織内ニ於ケル所謂「ジンチ、ウム」細胞ニ就テ



○橋爪・腫瘍組織内ニ於ケル所謂「ジンチ、ウム」細胞ニ就テ

八八

色ヲ呈ス其他ノ部分ハ帶紅白色ナリ、肺、兩側共ニ腫瘍浸潤ニヨリテ胸壁ニ堅ク癒著シ表面及剖面ニ於テ各葉ニ多數ノ大小不同(米粒乃至鵝卵大)ニシテ概テ球形ヲナセル轉移結節アリ表面ニハ中央ノ陥没ヲ見、剖面ニ壊死ヲ見ル、寧丸、尋常大肉眼の著變ナシ

### 組織の所見

腹膜後腔ノ原發腫瘍。處々ヨリノ切片ヲ見ルニ、結締組織ハ廣ク又ハ狭ク種々ノ方向ニ走り、其ニ大小ノ腫瘍細胞巢アリ胞巢狀又ハ島嶼狀ヲ呈ス、胞巢ノ中央ニハ壊死出血ヲ見ル處アリ。

腫瘍細胞ハ一般ニ胞巢中ニ緩疎ニ配置セラレ間質トノ間及相互間ニ空隙ヲ示セリ、細胞自己ハ稍大ニシテ多クハ多角形類圓形ナレドモ亦骰子狀圓柱狀ノモノアリ、殊ニ胞巢ノ周縁ニ整列セルモノハ恰モ腺上皮細胞ノ如ク骰子形又ハ短圓柱形ナリ、腫瘍細胞體ハ「エオジン」ニ淡染シ其量多ク平等ノ構造ヲ示セルモノアルモ亦多少泡沫様ニ見ユルモアリ、核ハ一般ニ大形ニシテ胞狀圓形又ハ橢圓形ナリ核染質ニ乏シク多クハ一箇ノ核小體ヲ含ム。

此明核細胞ノ間ニ稍々異ナル腫瘍細胞アリ、細胞體ハ彼ニ比シ稍々大ク幾分暗染シ不正形ナリ、核ハ染色質甚多クシテ其構造ヲ認メ難ク變形甚シク紡錘狀鎌狀等不規則ナリ、此細胞ハ上記明核細胞ノ間ヲ點綴シ、圓柱狀細胞トシテ腺上皮様ニ整列セル間ニモ散在セリ、尙此兩種細胞ノ性狀相半セル中間ノ細胞アリ其移行型ナル如シ。

是等ノ腫瘍細胞ノ間ニ「マトキシリン、エオジン」染色ニテ淡紫色或ハ淡青色ニ染ル球狀ノ滴狀物アリ平等ニシテ特殊ノ構造ヲ示サズ、一種ノ分泌物ナル如キ感ヲ與フ、壊死部ニアリテハ淡青色ニ染

被細胞性「ジンチ、ウム」ニ比シ原形質核ノ性狀甚異ナルヲ以テ余ハ結締織性ナリト信ズ。

肺轉移腫瘍ニ於テ原發腫瘍ト同一ノ成分ヨリ成ルモ配列ノ異ナル爲メ一種美麗ナル像ヲ作り、胎盤絨毛ヲ髣髴タラシム、然モ其兩種細胞ガ元來單一ナルコトハ其間ニ種々ノ移行型アルニヨリ明ナリ、唯此腫瘍細胞ハ空隙ヲ被覆スル性質ヲ有スルコトハ此ノ如キ像ヲ生ゼシ一原因ナルベシ。クロツツハ卵巢ノ原發性惡性脈絡膜腫ニ於テ一部分ニ絨毛ニ似タル形態アリシヲ述ベ、其ガ眞ノ絨毛ト異ナリ、結締織血管ヲ缺如シ明核細胞柱ガ「ジンチ、ウム」ニ包マレ周圍ニ出血アリシトイフ。余ノ例ニテハ間質竝ニ血管ヲ有シ且絨毛樣形態ノ間ニ細胞ノ破壞產物アリクログツツノ例ト全然一致セルニアラザルモ絨毛類似ノ像ヲ呈スルコトニ於テ相似タルハ興味アリトイフベシ。

### 第十一例

○上○藏 四十一歲 男子

本例ハ大正八年一月東京醫學會ニ於テ松井醫學士ノ演說セラレシ肝癌ニシテ、其組織の檢索ニ於テ惡性脈絡膜腫類似ノ像ヲ呈セリ（同會誌第三十三卷第九號）

病歴 大正七年十月患者ハ初メ上腹部疼痛發作續テ右季肋部ニ腫瘍發見シ（過鵝卵大）、醫師ニヨリ微毒ノ診斷ノ下ニ「サルヴァールサン」注射ニ回水銀注射十二回ヲ受ク、然モ漸次腫瘍ハ増大シ羸瘦加ハル、死前五日急ニ腹部ノ膨滿強ク一般症狀不良トナル、黃疸ナシ。

解剖的診斷 一、原發性實質性肝癌兼肝硬變、二、兩肺ニ於ケル多數ノ轉移、三、橫隔膜下面ノ轉移結節、四、門脈胃周圍ノ淋巴結節竝ニ腸間膜前縱竇淋巴結節腫脹、五、門脈中ノ腫瘍栓塞、六、肺左葉前緣ニ於ケル組織破壞及出

○橋爪・腫瘍組織内ニ於ケル所謂「ジンチ、ウム」細胞ニ就テ

○橋爪・腫瘍組織内ニ於ケル所謂「ジンチ、ウム」細胞ニ就テ

九〇

破壊産物「ヘマトキシリン」ニ僅ニ青染スル滴狀物及赤血球等ヲ容レ、間質ニ直接シテ上記ノ腫瘍細胞列及之ヲ被ヘル暗色細胞アリ、就中暗色細胞ハ顯著ナルヲ以テ恰モ胎盤ニ於ケル絨毛ヲ見ル如キ印象ヲ與フ、然レドモ明核細胞ヲ被ヘル暗色細胞列ハ個々別々ニシテ眞ノ「ジンチ、ウム」ニアラズ、間質モ新生セル柔軟ナル結締織ナルベキモ胎兒ノ結締織トハ明ニ區別シ得ベシ、壞死出血共ニ強シ。

### 考案

本例ハ其腫瘍細胞ノ性狀、結締織トノ關係、配列ノ狀態及ビ分泌物ト思ハル、滴狀物質等ニヨリ殆ド疑ナク上皮細胞腫ナリトイヒ得ベシ、而シテ其母組織ハ甚疑問ナルモ其發生ノ位置、細胞ノ性狀ニ幾分ノ類似アルニヨリ恐ラク原腎遺殘ヨリ發生シ來リシモノナランカ。

此腫瘍組織中處々ニ見ラル、巨態細胞ハ、其細胞體及核ノ性狀全ク腫瘍細胞ト一致セルコトニヨリ、殊ニ巨態細胞ノ一部ニ於テ細胞境界ノ尙認め得ルモノアルニヨリ、腫瘍細胞ヨリ發生シタルモノ即チ上皮細胞性ナリトイヒ得ベシ。此巨態細胞ノ或モノハ結締織網中ニアリテ全細胞群ヨリ形成セル像ヲ示スコト竝ニ一部分ニ細胞ノ境界ヲ殘セルコト等ニヨリテ此巨態細胞ハ腫瘍細胞ノ融合ニヨリテ發生シタルモノ即チ「ジンブラスマ」ト稱スベキモノナリ、而シテ此「ジンブラスマ」形成ハ恐ラク結締織網其他ノ關係ニヨリ榮養狀態ニ變調ヲ來シタル爲ナラン。

間質結締織中ニ偶然發見セラレタル巨態細胞ハ其原形質及核ノ性狀周圍ノ結締織細胞ト一致セルニヨリ嘗テリーゼルノ記載セシ所謂結締織性「ジンチ、ウム」ト稱スベキモノナラン。然レドモ附近ノ毛細血管トノ近親關係ヲ否定シ得ザルニ由リ内被細胞性ニアラズト斷言シ難シ、然モ他ノ場合ニ見ル内

腫瘍細胞ハ甚大ニシテ圓形橢圓形乃至多角形ナリ、細胞體ハ「エオジン」ニ極メテ淡染シ甚透明ニシテ多少泡沫様ノ構造ヲ認メ得ルノミ、「スダン」染色ニテ滴狀ノ脂肪ヲ認ム、核ハ圓形橢圓形ニシテ胞狀ヲナシ染色質ニ乏シク大抵一箇ノ核小體ヲ有ス、處々ニ核分割像ヲ認メ得。

顯著ナルハ各腫瘍胞巢ノ周縁ニ特ニ濃染セル細胞列アルコトニシテ、弱廓大ニテ惡性脈絡膜腫ニ類似ノ像ヲ呈ス、強廓大ニテ此細胞列ハ胞巢ノ周縁ニ整列セルモ、屢々中斷セラレテ上記ノ腫瘍細胞其間ニ介在セルコトアリ、此特殊細胞ハ其形一定セズ圓形橢圓形ノモノ稀ニ存スルモ多クハ紡錘狀星芒狀半月狀等ニシテ、「ヘマトキシリン、エオジン」染色ニテ暗色ニ染ミ「スダン」ニテ脂肪ノ微細顆粒ヲ示シ、又往々膽色素顆粒ヲ包容セルモノアリ、比較的大ナル空胞ヲ示セルコトアリ、核ハ腫瘍細胞ニ比シ稍々小ナリ、其形亦甚不定ニシテ圓形卵圓形又ハ長橢圓形若クハ紡錘狀鎌狀豆狀等アリ、極メテ核染質ニ富ミ核小體ハ認メ難シ、ハイデンハイン染色ニテハ一層暗黒ナリ。(第二十四圖)

此細胞ハ常ニ胞巢間毛細管ニ直接シテ存シ、其細胞原形質ハ毛細管ノ内被細胞ノ其ト直接連續セルコトヲ認メ得ベシ、屢々此細胞ノ境界不明トナリ不正形ノ「ジンチ、ウム」ヲ形成セルコトアリ、此特殊細胞ハ其核往々毛細管内被細胞ノ核ト平行シテ縱列ヲナセルコトアレドモ、却テ之ト直角ニ胞巢内部ニ向ヒ増殖スル姿勢ヲ示セルモノ多シ(第二十三圖)、又此細胞列ト内被細胞トノ間ニ狹キ空隙ヲ示セルモノアルモ細胞ノ一部ハ必ず内被細胞トノ連絡ヲ保テリ、又屢々胞巢ノ中部ニ毛細管ト連絡ナキ特殊細胞群ヲ見ルコトアルモ、連續切片ヲ追跡スレバ亦直接連續セルコトヲ確認シ畢竟内部ニ向テ増殖強度ナリシヲ知ルベシ、尙此特殊細胞ト内被細胞トヲ比較スルニ原形質核共ニ其性状一致シ唯其形

○橋爪・腫瘍組織内ニ於ケル所謂「ジンチ、ウム」細胞ニ就テ

九二

血、七、腹腔内出血約「二・五」リール等。

解剖所見摘要 肝ハ異常ニ大ニシテ四四五〇瓦殊ニ右葉巨大ナリ、其上面前縁ニ近ク手拳大ノ軟キ腫瘍アリ殆ド波動ヲ徴シ得。其他ニ小豆大ノ腫瘍結節アリ、左葉前縁ニ近ク鶏卵大ノ腫瘍アリテ表面潰爛シテ凝血ヲ附ス（腹腔内出血ノ源泉）、肝實質ハ硬ク腫瘍ハ軟シ、截面ニモ大小ノ結節多數ニ認メラル、腫瘍ノ截面ハ孰レモ同様ニシテ淡黃色ヲ呈シ其中ニ放線狀ニ走レル白色ノ索條アリ、腫瘍ハ處々ニ出血アリテ其部ハ暗褐色ヲ呈ス、腫瘍組織ト肝組織トノ限界ハ極メテ明瞭ニシテ周圍組織ハ強ク壓排セラレ、腫瘍ノ遠心性増殖ヲ認メ得ベシ、肺其他ニ見ラル、轉移腫瘍ハ粟粒乃至大豆大ニシテ總テノ性狀上記ト同一ナリ。

### 組織の所見

肝組織ハ増殖肥厚セル結締組織ニヨリテ小葉ニ分タル、此間質中輸膽管ノ増殖アリ、肝實質ハ處々著シキ萎縮ニ陥リ、殊ニ腫瘍組織ニ接スル部分ハ腫瘍ノ増大ニヨル壓迫ノ爲メニ平行ニ走レル細小ノ細胞索トナリ、原形質赤染シ核ハ「ピクノーゼ」ヲ示シ縮小シテ退行變性顯著ナリ、之ニ反シ他ノ部分ニ於テ往々散在性ニ肝細胞著シク肥大シ核モ約二倍大トナリ稍々濃染セリ、一般ニ肝細胞索ノ方向甚不正トナリ中心靜脈ノ周圍ニ於テ肝細胞ノ脂肪變性並ニ萎縮アリ尙間質中往々圓形細胞ノ浸潤ヲ認ム。腫瘍組織ハ周圍トノ限界明確ニシテ、肥厚セル結締組織索ニヨリテ大小ノ分野ヲ作り、更ニ大小ノ胞巢ニ分タル、此胞巢ハ纖細ナル毛細血管ヲ以テ圍繞セラレ、其ニハ明ニ内被細胞ヲ認メ且屢々赤血球ヲ容ル、腫瘍組織内又ハ其周圍ニ屢々大小ノ出血アリ、又腫瘍胞巢ノ數箇ガ壊死ニ陥リ或ハ之ニ傾ケル所アリ、是等ノ變化ハ其程度廣狹ニ於テ甚不定ナリ。

普通「ハバトーム」ニ於テ癌細胞ノ増殖ニ伴ヒ毛細管ハ單ニ受働的ニ新生シテ胞巢ヲ形成スルモノナレドモ、本例ニテハ上記所見ノ如ク毛細管内被細胞ノ増殖旺盛ニシテ胞巢内部ニ向ヒ進入セルヲ認メ得ベシ、其著シキモノハ胞巢中央部ニ及ビ毛細管トノ連絡ナキ如キモノアリ、此ノ如キ内被細胞ノ増殖ハ其處ニ毛細管ヲ新生シ新胞巢ヲ形成セントスルヲ表示セルモノトイヒ得ベシ。

本腫瘍ノ處々ニ於テ明核ノ癌細胞ト暗色ノ増殖セル内被細胞トノ關係甚複雑トナリ、往々惡性脈絡膜腫類似ノ像ヲ呈ス、殊ニ暗色細胞ガ「ジンチ、ウム」トナレル場合ニ然リ、然モ此二種細胞ハ上記ノ如ク別箇ノモノニシテ暗色細胞ハ腫瘍ノ間質ヨリ増殖セルモノニ他ナラズ即混合腫瘍ニモアラズ類畸形腫性ニモアラズ唯表面的ニ惡性脈絡膜腫類似ノ形態ヲ示ス部分アリトイフニ過ギズ。

### (五) 總括

辜丸ノ惡性腫瘍ニ見ラル、「ジンチ、ウム」細胞ニ就テメンケベルヒハ從來諸學者ハ類似少キニ拘ハラズ惡性脈絡膜腫ノ増殖ト等シトナセリ、勿論實例ノ或モノニテハ疑モナク婦人ノ惡性脈絡膜腫ト等シキ腫瘍アルベシ、然モ氏ノ三例ニ於テハ惡性脈絡膜腫ノ構造ヲ想ハシムル部分ガ稀ニ見出サル、ノミニシテ其類似モ全ク表面的ニシテ變性ノ機轉ニヨリテラ氏細胞ノ如ク見ユルナリトシ、氏ノ例ニ於テハ「ジンチ、ウム」ハ孰レモ内被細胞性ナルコト疑ナシトイヘリ。

余ノ第一例ニ於ケル「ジンチ、ウム」ハメ氏ノ記載ニ似テ多ク出血アル部分ニ見出サル、コト、毛細管トハ直接連續ヲ證明シ得ルコト、毛細血管壁ハ一方ハ普通ノ稍々肥大セル内被細胞ヨリ成リ對側ハ「ジンチ、ウム」細胞ニ變化セルコト等ハ明ニ此「ジンチ、ウム」細胞ノ内被細胞性ナルコトヲ證明ス、

○橋爪・腫瘍組織内ニ於ケル所謂「ジンチ、ウム」細胞ニ就テ

ニ相異アルノミ、而シテ此細胞ハ出血ノ部分ニハ存スルモ壊死ニ傾ケル部分ニハ著シカラズ。

肺ノ轉移腫瘍、結節狀ニシテ境界著明ナリ腫瘍組織ハ上記ト同一ニシテ、特殊細胞列殊ニ著明ニ見エ從テ惡性脈絡膜腫トノ近似ハ一層顯著ナリ、出血、退行變性像亦同様。

### 考案

本例ガ原發性實質性肝癌ナルコトハ上記ノ簡單ナル記載ニヨルモ直ニ認メラレ得ベキモノト信ズ。而シテ腫瘍組織中ニ存スル上記特殊細胞ハ興味アリ、腫瘍細胞ハ普通ノ上皮細胞腫、癌腫ニ見ル如キ圓形多角形ニシテ胞狀ノ核ヲ有シ染色質ニ乏シク明ニ「エオジン」ニ赤染スル核小體ヲ有セルニ反シ、特殊細胞ハ其形不定ニシテ原形質暗染シ核モ不定形ニシテ殊ニ核染色質ニ富メルコト竝ニ核小體ヲ有セザルコトニヨリテ腫瘍細胞ト同一ナラズ即チ上皮細胞ニ屬セザルコト明ナリ、但シ胞巢周縁ニテ往々其間ニ腫瘍細胞介在シ殊ニ其細胞體ニ空胞少ク「エオジン」ニ赤染セルトキ恰モ兩者ノ移行型ナル如キ感アルモ其ハ單ニ混在シ殊ニハイデンハイン染色ニヨレバ腫瘍細胞ノ核ハ胞狀ナルモ特殊細胞ノ核ハ特ニ暗色ニシテ區別明瞭ナルノミナラズ其間ニ移行型ヲ認メ難シ。

而シテ此特殊細胞ハ常ニ胞巢周圍ノ毛細血管内被細胞體ト直接連續ヲ示シ、或ハ内被細胞ト平行セル核ノ縱列ヲ見或ハ内被細胞ト直角ニ胞巢中心ニ増殖ノ姿勢ヲ示セルモノニ於テモ必ズ細胞體ノ直接連續アリ、内部ニ存スルモノモ連續切片ニテ内被細胞トノ連繫ヲ説明シ得ルヲ以テ、此特殊細胞ハ毛細血管特ニ内被細胞ト密接ナル關係ニアルモノト斷言シ得ベシ、尙其他ニ此細胞ノ形態染色ノ性狀等ガ内被細胞ニ等シキヲ以テ、此特殊細胞ハ確ニ毛細血管ノ内被細胞ヨリ出タルモノナリト信ズ。

ステルンベルヒハシユラーゲンハウフエル、ビツク等ニ反對シテ、氏ノ腫瘍ハ所謂血管外被細胞性肉腫ニシテ、「ジンチ、ウム」ハ血管ノ萌芽ナリトセリ、我第十一例ニ於テハ惡性脈絡膜腫樣組織アリテ「ジンチ、ウム」ハ毛細管内被細胞ノ増殖ニヨリ生ジタルコト明ニシテ又毛細血管ノ萌芽ニ他ナラズ。次ニ第一、第二、第三例ニ於テハ内被細胞性ノ「ジンチ、ウム」ハ孰レモ腫瘍ニ伴ヒ新生セル間質結締織中ノ血管ヨリ生ジタルモノナリ、但シ第二例ハ畸形腫ニシテ各胚葉性組織中増殖最顯著ナルハ外胚葉性產物タル上皮細胞組織ニシテ他成分ハ之ニ隨從セル間質ト同様ノ關係ニアリト謂ヒ得ベシ、即チ腫瘍ノ間質ニ在ル毛細血管ヨリ「ジンチ、ウム」ヲ發生シ得ルナリ。

而シテ此「ジンチ、ウム」細胞發生ノ動機ハ間質中ニ毛細管新生スルニ際シ腫瘍ノ影響ニ由リ恐ラクハ營養條件ノ變化ヲ來スニ因ルナランカ、即チ毛細管ノ萌芽ガ正常ノ發育ヲ遂グルコトヲ得ズシテ其内被細胞ノ或モノガ違型的ニ「ジンチ、ウム」トナリシモノナリ、而シテ其營養條件ノ變化ニハ進行的ト退行的トヲ考ヘ得ラレ兩者共ニ可能ナルベシ、第十一例ニテハ前記ノ如ク増殖性、進行性ノモノナルベク、其他ノ三例ニテハ出血多キ部分ニ屢々見ラル、コト、間質結締織ノ粘液腫樣變性アル部分ニ屢々存スルコト等ニヨリ恐ラク退行性ノ意義ヲ有スルモノト考フルヲ穩當ナリト信ズ。

外胚葉性「ジンチ、ウム」ニ就テ。ビツク、リーゼル等ハ辜丸畸形腫ニ在ル惡性脈絡膜腫樣組織中ノ「ジンチ、ウム」ト外胚葉性組織トノ直接連續ヲ認メテ、其ハラ氏細胞ト共ニ外胚葉ノ特殊表示形態ナリトセリ。

余ノ第二例ニ於テハ上記内被細胞性「ジンチ、ウム」ノ他ニ、外胚葉性產物ナル腺管樣組織ノ上皮細



而シテ此「ジンチ、ウム」ノ周圍ニ明核胞狀ノ腫瘍細胞アリ、殊ニ第三腦室壁ノ浸潤竈ニ於テハ細胞界鮮明ニシテ核モ一層透明ナルニヨリ極狭キ範圍ニテハ一見惡性脈絡膜腫ニ似タル像ヲナス、然レドモ其ハ極小ノ部分ニ限ラレ全般ノ像ヲ見レバ直ニ其近似ガ眞ナラザルヲ認メ得。

第二例ニ見ラル、「ジンチ、ウム」ノ或モノハ第一例ニ於ケルト同様ニ明瞭ナル所見ニ由リテ確ニ内被細胞性ナルコトヲ證明シ得タリ、然レドモ此場合ハ單ニ毛細血管壁ニ「ジンチ、ウム」樣變化ヲ認ムルノミ。更ニ第三例ニテハ亦内被細胞性ノ巨態細胞ニシテ其數モ甚少ク「ジンチ、ウム」トシテノ形態完全ナラズ第二第三例共ニ惡性脈絡膜腫ニ類似ノ形態ヲ示サズ。

然ルニ最後ニ獲タル第十一例ニ於テハ處々ニ惡性脈絡膜腫類似ノ形態ヲ成セリ、此腫瘍ガ原發性實質性肝癌ナルコトハ前記ノ如ク唯毛細血管内被細胞ノ増殖ニヨリ暗色ノ「ジンチ、ウム」ヲ生ジ周圍ノ原形質透明ニシテ胞狀核ヲ有スル腫瘍細胞ト共ニ表面的類似ヲ示セルノミ、(殊ニ毛細血管固有ノ内被細胞ヲ認メ得ズシテ出血ヲ伴ヘル部分ニ於テハ其類似ハ殆ド同一ナリトイヒ得ベキ程度ニ進メルモ靜ニ他ノ部分ト共ニ熟視スレバ單ニ類似ニ過ギザルヲ認メ得)、又此「ジンチ、ウム」即チ暗色細胞ガ内被細胞ノ違型増殖ニヨリテ發生シタルモノナルコトハ余モ前記ノ如ク證明シ得タル所ニシテ松井氏所報ノ正確ナルヲ知レリ。

以上四例ノ觀察ニヨリテ腫瘍組織中ニ於テ毛細血管内被細胞ハ不完全ナル或ハ完全ナル「ジンチ、ウム」細胞ヲ生ジ得ルモノニシテ斯ル場合ニ於テ其或モノハ惡性脈絡膜腫類似ノ形態ヲ生ズルコトアルベキヲ斷言シ得。

第八例ハ内被細胞性、第九例ハ結締組織細胞性ノ巨態細胞ヲ有シ其ニ違型増殖ニヨリテ生ジタルモノト考ヘ得ベシ(但シ第八例ニ融合モ亦與レル如シ)此二例ハ單ニ巨態細胞ヲ有スルノミニシテ「ジンチチウム」ト稱スルニ至ラズ、然レドモ是等ノ巨態細胞ヲ生スルニ至ラシメタル榮養條件ノ如何ニヨリ、本來ノ腫瘍細胞ヨリ直接ニ「ジンチ、ウム」巨態細胞ヲ生ジ得ベキコトハ考ヘ得ラルベシ。

リーゼルハ三十八歳男子ノ辜丸畸形腫ニ於テ固有ノ惡性脈絡膜腫樣構造ヲ有スル結節ノ他、別ニ結締組織隔壁中ニ結締組織性多核ノ「ジンチ、ウム」樣形態ヲ認メ上記結節中ノ「ジンチ、ウム」トハ明ニ區別スベキモノナリシトイフ。余ハ第十例ニ於テ偶々間質中ニ恐ラク結締組織細胞性ト思ハル、「ジンチ、ウム」樣形態ヲ認メタリ、此ハリーゼルノ其ト比較シ得ザルモ、前記セシ如ク内被細胞性「ジンチ、ウム」トハ明ニ區別スベキモノニシテ、多數ノ切片ニ發見シ得ザリシハ遺憾トスルモ、余ハ此「ジンチ、ウム」ヲ以テ結締組織性ナリト信ジリーゼルノ所言ヲ確言スルモノナリ。

第十例ノ肺轉移腫瘍ニ多少絨毛ニ類似セル如キ特殊ノ像アルコトハ前記ノ如シ、然レドモ原發腫瘍其他ニハ此ノ如キ所見ナク且ツ注意シテ觀察スレバ其ハ全然區別セラルベキモノニシテ、腫瘍細胞配列ノ狀態、間質新生ノ關係等ガ偶々此ノ如キ美麗ナル像ヲ呈セシニ過ギズ、即チ單一ナル腫瘍ニ於テモ上記ノ如キ種々ノ關係ニヨリ絨毛ニ類似セル像ヲ呈シ得ルナリ。

### 結論

一、「ジンチ、ウム」細胞ガ諸種細胞ノ融合若クハ異型増殖ニヨリテ生ズルコトハ周知ノ事實ニシテ、余ノ今回ノ調査モ亦之ヲ證ス。

○橋爪・腫瘍組織内ニ於ケル所謂「ジンチ、ウム」細胞ニ就テ

胞ト直接連續セル又ハ其ヲ承認シ得ベキ「ジンチ、ウム」樣組織形態ヲ認ム、然レドモ其多數ハ細胞體圓滑ニシテ突起少ク「エオジン」ニ濃染シ構造平等ナラズ屢々空胞ヲ示シ核ニモ變性像ヲ認ムルモノ多ク通常ノ「ジンチ、ウム」トハ全ク其性狀異ナリ、此所見ヨリ此「ジンチ、ウム」樣形態ハ退行的機轉ニヨリ上皮細胞ヨリ生ジタル所謂「ジンブラスマ」ニ他ナラズト信ズ

第十例ノ腫瘍細胞間ニ見ラル、巨態細胞ハ亦之ニ屬スルモノナリ。

諸所ノ癌腫ニ於テ屢々巨態細胞「ジンチ、ウム」形成ノ爲ニ惡性脈絡膜腫類似ノ像ヲ呈スルコトアルハ既ニ早クマルシヤン、ゲプハルト等ニヨリ認メラレシガバーベスハ肝ノ炎症又ハ腫瘍ノ際肝細胞ヨリ巨態細胞ヲ生ジ惡性脈絡膜腫樣ノ像ヲ呈スルコトヲ注意シ、リーゼルハ胃癌二例ニ同様ノ組織形態ヲ認メ辜丸腫瘍ニ見ラル、惡性脈絡膜腫樣形態ト區別スベキヲ說ケリ。余モ亦此ノ如キ子宮癌ヲ見タルコトアリ上記第四、第五、第六、第七例亦之ニ類ス。

此四例ニ於テ見出サル、巨態細胞ハ、前記セシ如ク腫瘍細胞ノ違型増殖ニヨリテ生ジタルモノニシテ、其大ナルモノハ「ジンチ、ウム」ト稱シ得ベキモ多クハ單ニ巨態細胞ニ他ナラズ、又腫瘍細胞トノ移行甚露骨ニシテ孰レモ惡性脈絡膜腫樣ノ印象ヲ與ヘズ、唯是等ノ巨態細胞ノ形成一層顯著ニシテ大ナル「ジンチ、ウム」ヲ生ジタルトキハ遂ニ惡性脈絡膜腫樣形態ヲ生ジ得ト言ヒ得ルニ過ギズ。

第十例（恐ラクハ第七例第八例モ亦）ノ巨態細胞ハ腫瘍細胞ノ融合ニヨリテ生ジタルモノニシテ、第二例ノ上皮細胞性「ジンブラスマ」モ亦然リ是等ハ少クモ融合ニヨリテ生ジタルニアラズト斷定スルニ足ル根據ヲ認メ得ザルナリ。

第八例ハ内被細胞性、第九例ハ結締組織細胞性ノ巨態細胞ヲ有シ共ニ違型増殖ニヨリテ生ジタルモノ

- Wlassow**, Über die patho- und Histogenese des sogenannten „sakroko angioplastische“ (Virchow. Arch. B. 169. II. 2. 1902).
- 6) **Wlassow**, (Zit. nach Risel—Lithar-Osieri. Ergeln. 1907). 7) **Pick**, Zur Kenntnis der Teratome: Plasmomartige Wucherung in einer „Dermoidkyste“ des Eierstocks. (Berl. klin. Ws. No. 51. 1902). 8) **Steinert**, Über die embryonalen Geschwülste der Keimrüben und über das Vorkommen chorionepithelomartigen Bildungen in diesen Tumoren. (Virch. Arch. B. 174. 1903). 9) **W. Risel**, Über das chorionepitheloma malignum u. die analogen Wucherungen in Hodenteratomen. (Arbeit aus path. Inst. zu Leipzig. 1903). 10) **Pick**, Das Epitheloma chorioepitheliale. (Deuts. klin. Ws. No. 7-8. 1904). 11) **Marks**, Über einen eigenartigen piliären Tumor der Leber nebst Bemerkungen zur Chorionepithelionfrage. (Ziegler's Beitr. B. 36. 1904). 12) **Sternberg**, Zur Kenntnis der „chorionepithelionartige Wucherungen“ in malignen Hodenteratomen. (Verh. d. deutsch. path. Gesell. Ref. in Zblt. f. allg. Path. No. 13. 1904). 13) **Babes**, Über epitheliale Knospenbildung und Riesenzellen. (Verh. d. Deuts. path. Gesell. Ref. in Zblt. f. allg. Path. S. 981. 1904). 14) **Steinhaus**, Über Chorionepithelionartige Wucherungen beim Manne. (Wien. med. Ws. No. 17. 1903). 15) **Michel**, Ein Karzinom des Eierstocks mit chorionepithelionartigen Bildungen. (Zblt. f. Gyn. No. 14. 1905). 16) **Pick**, Zur Lehre von Epitheloma chorioepitheliale. (Zblt. f. Gyn. No. 18. 1905). 17) **Djewitzki**, Über einen Fall von Chorionepithelion der Harnblase. (Virch. Arch. B. 178). 18) **Askanaazy**, Teratom und Chorionepithelion der Zäpfel. (Verh. der Deuts. path. Gesell. Ref. in Zblt. f. allg. Path. 1906). 19) 伊與又郎, 陰莖血管内被細胞腫殊ニ其巨應細胞ニ就テ. (三浦先生就職二十年祝賀論文集. 明治三十九年. 1906). 20) **Mönckeberg**, Über „Syncytium“-haltige Hodentumoren. (Virch. Arch. B. 190. 1907). 21) **Iwase**, Pliniäres Chorionepithelion des (Varians. (Arch. f. Gyn. B. 85. 1908. Ref. in Zblt. f. allg. Path. 1909). 22) **Risel**, Zur Frage der chorionepithelionähnlichen Geschwülste. (Ziegler. Beitr. B. 42. 1907). 23) **Risel**, Ein Hodenteratom mit chorionepithelionartigen Bildungen. (Verh. der Deuts. path. Gesell. XIII Tag. Ref. in Zblt. f. allg. Path. 1909). 24) **Vennet**, Chorionepithelionähnlicher Harnblasenleids mit gleichartigen Metastasen beim einen Manne. (Virch. Arch. B. 196. 1909). 25) **Glaeserfeld**, Über das Hodenteratom mit chorionepithelionähnlichen Bildungen. (Zeits. f. Krebsforsch. B. IX. II. 3. 1910). 26) 中山茂樹, 所謂假性腺絡膜上皮腫. (痛. 第四年. 第一第二册. 明治四十三年. 1910). 27) **Mori Takeyoshi**, Über ein metastasierende Hodenteratom. (Virch. Arch. B. 207. 1912). 28) **Wassiljew**, Zur Frage der chorionepithelionartige Geschwülste bei Männern.

二、而シテ殊ニ内被細胞ハ、腫瘍内ニ於テ悪性脈絡膜腫ノ「ジンチ、ウム」ニ類似ノ形態ヲ生ジ、然モ其或モノハ悪性脈絡膜腫様組織形態ヲ形成スルコトアリ。

三、内被細胞ノ他、上皮細胞竝ニ結締細胞モ亦「ジンチ、ウム」類似ノ形態ヲ發生シ得。

此ノ如キ「ジンチ、ウム」巨態細胞モ明核ナル腫瘍細胞ト同時ニ存スルトキハ、多少ノ廣サニ悪性脈絡膜腫類似ノ形態ヲ形成シ得ベシト雖モ其類似觀ハ内被細胞性ノゾレニ及バズ。

四、是等ノ「ジンチ、ウム」細胞ノ母細胞ハ腫瘍細胞ナルコトアリ、又腫瘍ニ伴ヒ新生セル間質組織性ノモノナルコトアリ。更ニ是等ノ巨態細胞ハ或ハ「ジンチ、ウム」或ハ「プラスモチウム」(「ジンブラスマ」)トシテ組織ノ退行性進行性病機ノ孰レヨリモ發生シ得ベシ。

五、明ニ單純ナル腫瘍ニ於テ其腫瘍細胞ノ配列ノ關係ニヨリテ胎盤絨毛ニ類似セル組織形態ヲ生ジ得。

六、終ニ余ガ此腫瘍内ニ於ケル「ジンチ、ウム」細胞ノ調査ハ、胎盤ノ「ジンチ、ウム」ガ母體內被細胞性ナルベシトノ曩ニ我教室ヨリ大槻氏、近年渡邊氏ガ報告セル主張ヲ異ナリタル方面ヨリ支持スルモノト謂フヲ得ベシ。

# 引用書目

- 1) Schlegelhauser, Über das Vorkommen chorionepithelium- und trophoblastentartiger Wucherungen in Teratomen. (Wiener klin. Ws. No. 22 23, 1902).
- 2) Malassez et Mond, Sur les tumeurs à myxoplexes (sarcomes angioplastiques). (Arch. de phys. norm. et path. 1878). (Zit. nach Kiesel).
- 3) Carnot et Marie: Sarcome angioplastique. (Zit. nach Wassow).
- 4) Dopfer, Sur un cas de sarcome angioplastique. (Arch. de med. exper. et d. anat. path. B. 12. Zit. nach Wassow).
- 5)

第十三圖 第三例睾丸圓形細胞肉腫ノ肺轉移ニ於ケル毛細血管壁ノ「ジンチ、ウム」樣變化(b)赤血球(G)腫瘍細胞

第十五圖 第四例卵巢ノ原發性腫瘍ノ一部(S)腫瘍細胞ノ「ジンチ、ウム」樣變化

第十七圖 同上例前縱竇ニ於ケル轉移、腫瘍細胞(G)ノ「ジンチ、ウム」樣變化(S)

第十八圖 第六例膽囊輸膽管癌腫ニ於ケル腫瘍細胞ノ「ジンチ、ウム」樣變化(S)

第十九圖 第八例陰莖血管內被細胞腫ニ於ケル巨癌細胞(R)、(G)腫瘍細胞(b)赤血球

第二十圖

第二十二圖 第十例腹膜後上皮細胞腫ノ間質ニ見ラル、「ジンチ、ウム」(S)(G)腫瘍細胞(B)結締組織細胞(c)毛細血管(b)赤血球

第二十三圖 第十一例原發性實質性肝癌ニ於ケル内被細胞性「ジンチ、ウム」(S)(c)内被細胞(G)腫瘍細胞(b)赤血球(m)腫瘍細胞ノ「ミトーゼ」

第二十四圖 同上一半ハ惡性脈絡膜腫類似ノ像ヲ呈ス

○橋爪・腫瘍組織内ニ於ケル所謂「ジンチ、ウム」細胞ニ就テ

(Mitteilung d. Kaiserl. Univers. in Saratow. B. 4, 1913. Ref. in Zht. f. allgem. Path. S. 264, 1914). 29) S. Ohkubo, Zur Kenntnis der Embryone des Hohlraums (Arch. f. Entwickl.-mech. d. Organism. B. XXVI. 1909). 30) S. Yasuda, Beiträge zur onkologische Kenntnis der sogen. heterotopische Chorionepitheliome. (福岡醫科大學紀要. 大正二年. 1913). 31) Klotz, Ein Fall von primären Chorionepithelion des Ovariums, als Beiträge zur Frage des Epithelioma chorionectodermale. (Hegar's Beiträge z. Gyn. B. 17, S. 369, 1912). 32) Herzheimer u. Roth, Zur feineren Struktur und Genese der Epithelzellen und Riesenzellen des Tuberkels. (Ziegler's Beiträge z. path. Anatom. B. 61. H. 1, 1915). 33) 大野章三, 松果腺嚢形腫. (福岡醫科大學雜誌. 第八卷. 第一號. 大正三年. 1914). 34) 赤松龍雄, 悪性脈絡膜上皮腫様組織形態ヲ有スル第Ⅸ腫瘍ノ組織發生ニ就テ. (京都醫學雜誌. 第十四卷. 第七號. 大正六年. 1917). 35) 長興又郎, 松果腺ノ病理追記. (日本病理學會演說. 大正六年. 1917). 36) 長興又郎, 松果腺ノ病理. (日本神經學雜誌. 第十八卷. 第一號. 大正八年. 1919). 37) 大橋謙次郎, 悪性「ジンチ、ウム」非上皮細胞論. (滿. 第二年. 第二冊. 明治四十一年. 1908). 38) 渡邊純一郎, 家兎子宮ニ於ケル胎盤形成. (東京醫學會雜誌. 第三十二卷. 第十二號. 1918). 39) 松井捨八郎, 血管内被細胞ノ著シキ肥大増生ヲ伴フ實質性肝瘤ノ一例. (東京醫學會雜誌. 第三十三卷. 第九號. 1919).

# 解

- 第一圖 第一例松果腺腫瘍中ノ「ジンチ、ウム」(Syn.)毛細血管(Cap.)トノ直接連繫ヲ示ス(Cia.)ハ腫瘍細胞
- 第二圖 同上腫瘍組織(Cia.)中ニ於ケル毛細血管壁ノ「ジンチ、ウム」様變化(Syn.)
- 第三圖 同上例頸髓ノ腫瘍浸潤ニ於ケル毛細血管壁ノ「ジンチ、ウム」様變化
- 第四圖 同上例頸髓ノ腫瘍浸潤ニ於ケル毛細血管壁ノ「ジンチ、ウム」様變化
- 第五圖 第二例松果腺嚢形腫ニ於ケル上皮細胞性「ジンチ、ウム」(S)腺管様圓柱細胞(E)トノ直接連繫
- 第六圖 同上間質結締組織(E)ノ鬆疎トナレル間ニ在ル上皮細胞島ノ「ジンチ、ウム」様變化(S)(b)赤血球
- 第七圖 同上淋巴管(c)壁ノ「ジンチ、ウム」様變化
- 第八圖 同上毛細血管壁ノ「ジンチ、ウム」様變化(b)赤血球(c)毛細血管(c)内被細胞
- 第九圖 同上毛細血管壁ノ「ジンチ、ウム」様變化(b)赤血球(c)毛細血管(c)内被細胞
- 第十圖 同上毛細血管壁ノ「ジンチ、ウム」様變化(b)赤血球(c)毛細血管(c)内被細胞
- 第十一圖 同上毛細血管壁ノ「ジンチ、ウム」様變化(b)赤血球(c)毛細血管(c)内被細胞
- 第十二圖 同上毛細血管壁ノ「ジンチ、ウム」様變化(b)赤血球(c)毛細血管(c)内被細胞

Tafel I.

Fig. 10.

第十圖



Fig. 7.

第七圖

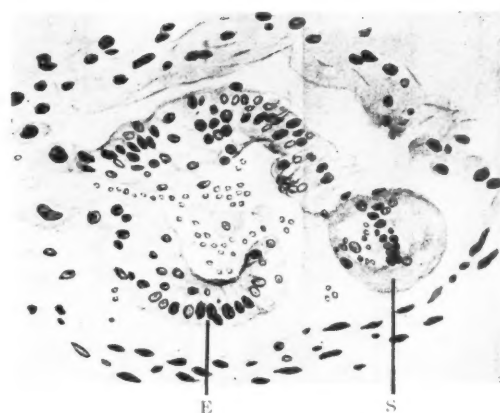


Fig. 2.

第二圖

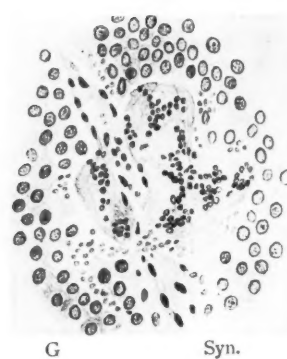


Fig. 1.

第一圖

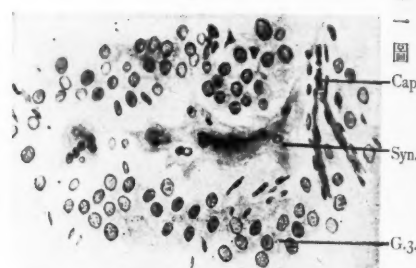


Fig. 11.

第十一圖

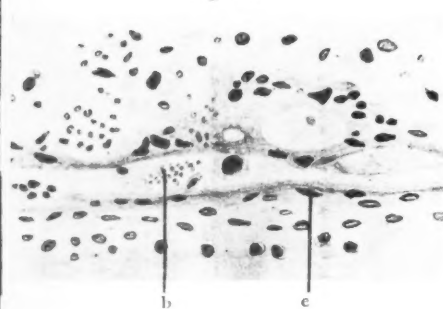


Fig. 8.

第八圖

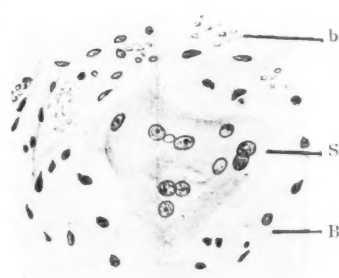


Fig. 4.

第四圖

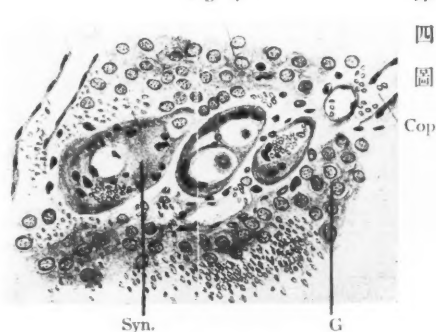


Fig. 3.

第三圖

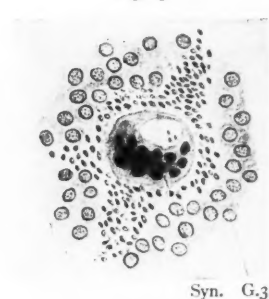


Fig. 12.

第十二圖



Fig. 9.

第九圖

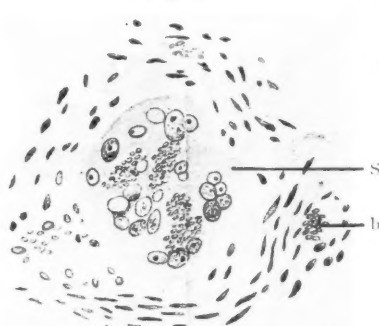


Fig. 6.

第六圖

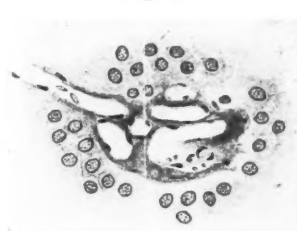
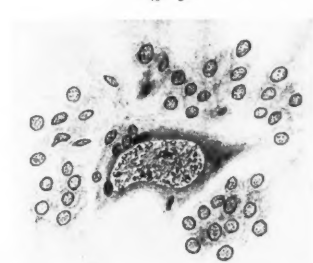


Fig. 5.

第五圖





○橋爪・腫瘍組織内ニ於ケル所謂「ジンチ、ウム」細胞ニ就テ

V  
1  
3  
■  
2  
A  
U  
G  
1  
9  
XUM

Tafel II.

Fig. 23.

第二十三圖

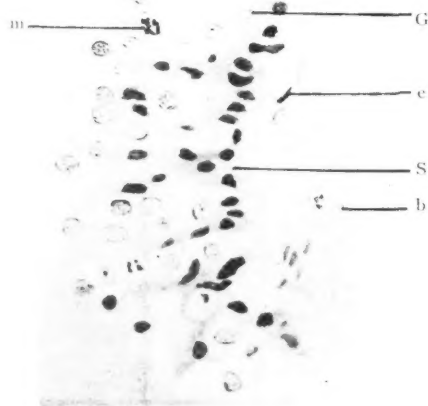


Fig. 24.

第二十四圖

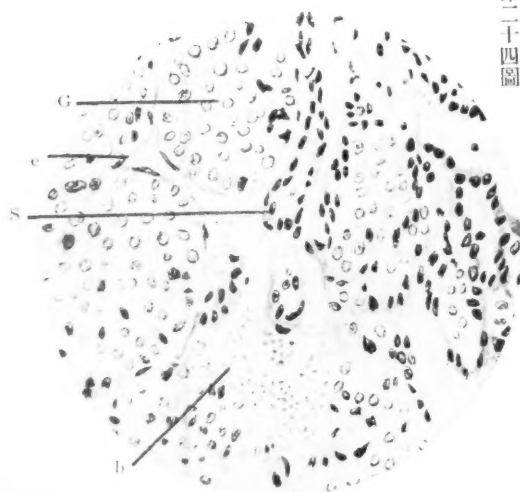


Fig. 20.

第二十圖

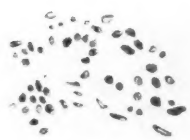


Fig. 21.

第二十一圖

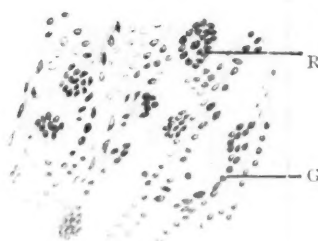


Fig. 22.

第二十二圖



Fig. 15.

第十五圖

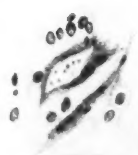


Fig. 14.

第十四圖

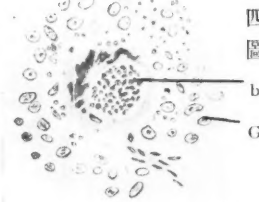


Fig. 13.

第十三圖

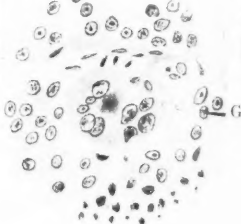


Fig. 17.

第十七圖

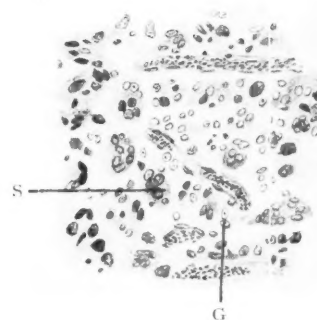


Fig. 16.

第十六圖

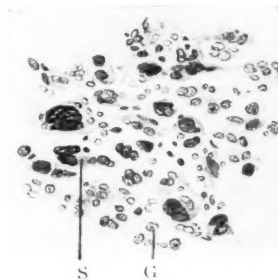


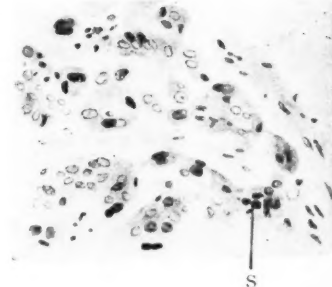
Fig. 19.

第十九圖



Fig. 18

第十八圖



V  
1  
3  
-  
2  
A  
U  
G  
1  
9

XUM

第十三圖  
第十六圖  
第十八圖

# 悪性腫瘍組織増殖ノ末梢神経纖維ニ對スル態度

京都帝國大學醫學部病理學教室

赤 松 信 麿

## 目 次

### 第一章 緒 論

### 第二章 悪性腫瘍組織ノ神經纖維ニ及ボス影響

#### 一、總論

二、神經纖維索周圍淋巴管ニ於ケル所見

三、神經纖維索周圍結締組織ニ於ケル所見

四、神經纖維索内結締組織ニ於ケル所見

五、神經營養血管ニ於ケル所見

六、髓鞘ニ於ケル所見

七、軸索ニ於ケル所見

八、Schwann 氏鞘ニ於ケル所見

九、神經纖維索周圍及ビ其内部ニ於ケル小圓形細胞浸潤

## 第一章 緒 論

腫瘍組織殊ニ悪性腫瘍組織ノ増殖ガ其周圍ノ他種組織ニ及ボス影響及ビ是等ノ他種組織ガ腫瘍組織

○赤松・悪性腫瘍組織増殖ノ末梢神経纖維ニ對スル態度

### 第三章

竈ニ於ケル所見  
悪性腫瘍組織ガ神經纖維ヲ侵ス態度——悪性腫瘍組織増殖ノ進行徑路トシテノ神經纖維——

### 第四章

悪性腫瘍組織増殖ニ因スル神經纖維ノ變性所見

#### 一、節狀變性

二、神經纖維腫脹性變性

三、神經纖維顆粒狀變性

イ、軸索顆粒狀變性

ロ、髓鞘顆粒狀變性

### 第五章 結 論

附圖說明

文獻

V  
1  
3  
2  
A  
U  
O  
1  
9

XU

度ノ研究ハ、蓋、惡性腫瘍組織増殖ノ組織學的研究上ニ於テモ重要ナル事項ニシテ、是等兩組織相互間ニ存スル因果的關係ノ研究ハ極メテ興趣アル問題ナラズトセズ。而カモ此病理組織學の檢索ガ反ツテ神經組織ノ生物學的性質ノ闡明ニ對シテモ亦重大ナル意義アルコト亦、疑フ可カラズ。

余ハ今之ニ關スル研究ニ於テ二三ノ所見ヲ得タルヲ以テ、先ヅ人體ノ材料ヲ基礎トスル總括的報告ヲ發表セントス。

### 研究ノ材料及ビ方法

材料ハ總テ人體ヨリ得タル惡性腫瘍組織ト、其周圍諸組織及ビ其腫瘍ノ轉移竈ト其周圍諸組織ニシテ、必要ニ應ジテハ其他ノ部分ノ神經組織ヲモ檢シタリ。參考トシテハ良性腫瘍組織ト其周圍諸組織トヲ調査シタリ。材料ノ大部分ハ之ヲ我ガ病理學教室ノ剖檢例ヨリ求メ、一部分ハ外科學教室ニテ手術ニ依リ切除セラレタルモノナリ。此外科的材料ノ分與ニ對シテハ、外科學教室伊藤學長ニ衷心感謝ノ意ヲ表ス。

是等材料ノ處置ニ關シテハ、常ニ腫瘍組織ノ周邊部ヲモ可成の廣ク切除シテ、是ヲ同時ニ同一種固定液ニ固定シ、且血管ノ走行其他ニ注意シテ稍々大ナル神經纖維索ノ走行ノ想像シ得ラルベキ部分ヲモ同時ニ固定シタリ。

各種ノ材料別ヲ表示スレバ次ノ如シ。

腺癌

一〇例

腺細胞狀癌

七例

扁平細胞癌

一一例

硬性癌

二例

○赤松・惡性腫瘍組織増殖ノ末梢神經纖維ニ對スル態度

ノ増殖ニ對スル態度如何ハ、腫瘍細胞増殖ノ組織學的研究上、重要ナル一部分ナリ。之ヲ文獻ニ徵スルニ藤浪教授ノ腫瘍組織増殖ト横紋筋組織トノ關係ノ研究ヲ初メ、今博士ノ腫瘍組織増殖ト平滑筋組織トノ關係ノ研究、及ビ腫瘍組織増殖ト骨組織トノ關係ノ研究、菊地氏ノ腫瘍組織増殖ト血管トノ關係ノ研究以外ニ、田中、東、Goldmann Schmidt 等諸氏ノ多クノ研究業績アリ。然レドモ腫瘍殊ニ惡性腫瘍組織ノ増殖ト神經組織トノ關係ニ至ツテハ Hense 氏ノ惡性腫瘍組織殊ニ癌組織ノ神經淋巴管ニ於ケル成長及ビ蔓延ニ關スル研究アリ又之レガ記事ノ所々ニ散見セルモノナキニ非レドモ、未ダ特ニ此方面ニ就テ研究ヲ行ヒ、充分徹底セル業績ヲ出シタルモノアルヲ知ラズ。

組織學ノ示ス所ニ據レバ、凡テノ健康ナル細胞及ビ組織ノ成長及ビ増殖ニ對シテ、神經組織ハ極メテ重要ナル位置ニアリ。凡テノ細胞乃至組織ハ其成長及ビ増殖ノ方向及ビ様式ノ上ニ於テ神經組織ノ支配ヲ免カル、コト能ハザルノミナラズ、諸種細胞及ビ組織、殊ニ上皮性諸細胞ノ機能、就中、腺細胞ト神經組織トノ間ニハ極メテ重要ニシテ且、興味アル多クノ相互的關係アリ。而シテ是等健康ナル細胞乃至組織ト神經組織トノ關係ニ就テハ多クノ研究者ニヨリテナサレタル研究業績其數少シトセズ。然レドモ病的組織ト神經組織トノ關係ニ至テハ、其研究必シモ多カラズ。況ヤ其増殖ノ態度病的ニシテ且、破壊的乃至侵掠的ナル惡性腫瘍組織増殖ト神經組織トノ關係ニ就テハ其研究業績極メテ稀ナリ。其之アルモ多クハ他ノ目的ノタメニナサレタル研究ニ於ケル偶然ノ所見トシテ簡單ナル記載ヲ、而カモ極メテ少數ニ於テ文獻上ニ見ルヲ得ルノミナリ。

而シテ惡性腫瘍組織ノ増殖ガ神經組織ニ及ボス影響及ビ神經組織ガ惡性腫瘍組織ノ増殖ニ對スル態

## 第二章 腫瘍組織ガ神經纖維ニ及ボス影響

記事ノ繁雜ヲ避ケンガ爲メニ、上記各例ノ一々ニ就キテノ説述ヲ廢シ、各例ヲ通覽シテ惡性腫瘍組織増殖ニヨリテ影響セラレタル神經纖維ノ組織學的變化ヲ一括シテ記スコト、セリ。余ノ検査セル神經纖維ハ主トシテ末梢神經ヲ選ビタリ。中樞神經組織ト腫瘍組織トノ關係及ビ中樞神經組織ニ根源ヲ有スル腫瘍組織ト其中樞神經組織トノ關係ニ就テハ今記述セズ。

### 一、總論

惡性腫瘍組織ノ増殖、漸ク高度トナレル際、其部位ニ存在セル末梢神經纖維索ハ全ク此腫瘍細胞群ニヨリテ圍繞セラレタルモノアリ。又一側ノミガ腫瘍細胞群ト相接シテ反對側ニハ未、腫瘍細胞ノ存在ヲ認メザル場合アリ。又同一神經纖維索ニ於テモ、病的ナル纖維ト比較的健康ナル纖維トガ相近接シ相混交シテ散在性ニ存在スルモノアリ。或ハ同一腫瘍細胞群中ニ在リテモ其細胞集簇ト相離レテ一見無關係ナルガ如キ位置ニ立ツモノアリ。

余ハ各例ヲ精細ニ検査シタルガ、多數ノ場合ニ於テ目撃シタルコロニ據レバ、腫瘍細胞ハ先ヅ病竈ノ周邊部ヨリ増殖ヲ始メ、之ニ當ル周圍組織ノ破壊乃至壞死ヲ促シ、或ハ組織間隙ニ沿フテ索狀ニ侵掠ヲ逞ウスルモノアレドモ、腫瘍細胞ガ神經纖維ニ對シテ特殊ノ親和力乃至ハ非親和力ヲ有スルガ爲メニコトサラニ之ニ接近シ、又ハ之ト相離レントスルガ如キ像ニ遭遇シタルコトナシ。即、神經纖維モ腫瘍細胞ニ對シテハ其破壊侵掠ヲ被ムルコト他ノ諸組織ノソレト大差アルコトナシ。而カモ此惡

○赤松・惡性腫瘍組織増殖ノ末梢神經纖維ニ對スル態度



○赤松・惡性腫瘍組織増殖ノ末梢神經纖維ニ對スル態度

一〇八

惡性脈絡膜上皮腫

一例

多形性圓形細胞肉腫

二例

大圓形細胞肉腫

三例

纖維肉腫

一例

小圓形細胞肉腫

五例

腺腫

三例

紡錘形細胞肉腫

二例

筋腫

二例

材料ハ可及的新鮮ナルモノヲ選ビタルモ、事情止ムヲ得ザル場合ニ於テハ死後二十四時間ヲ經タルモノモアリ

固定液トシテハ主トシテ一〇倍「フォルマリン」液ヲ常用シタルモ、必要ニ應ジテハ Orth 氏液 Muller 氏液或ハ其他ノ液ヲ用ヒタリ

而シテ神經纖維染色ハ可成ニ困難ナル操作ノ一ナリ。殊ニ腫瘍組織中ニ介在スルモノ或ハ其周圍ニ存在スルモノ、染色ハ單ニ分離セラレタル神經纖維ノ染色ニ比シテ尙一層ノ困難ヲ感ゼシメタリ。余ハ常ニ對照トシテ健康ナル坐骨神經切片ニ同時ニ同一ノ操作ヲ行ヒ、其組織像ノ比較ヲ行ヘリ。

神經纖維各成分ノ染色法トシテ古來舉ゲラレタルモノ其數多シ。然レドモ余ハ固定液及ビ既ニ貯藏セラレタル標本ノ貯藏液ノ關係上、主トシテ Bielschowsky 氏法、本田氏「ズダン」Ⅲ・「ヘマトキシリン」法 Weigert 氏法等ヲ用ヒタリ。而シテ參照ノ爲ニハ、其他諸氏ノ推奨スル法ヲ用ヒ、且、常ニ「ヘマトキシリン」・「エोजン」複染色ヲ行ヒテ腫瘍細胞及ビ其他ノ諸種細胞組織ノ組織學的檢索ヲナシ、上記諸種ノ染色法ニ由レル神經纖維ノ組織像ト比較スルコトヲ力メタリ。

於テ反ツテヨリ強度ノ擴張ヲ見ル場合アリ。而シテ是等ノ場合ニ於テモ多數ノ連續切片標本ニヨツテ之ヲ檢スレバ一見腫瘍細胞群トハ隔離ノ狀ニアルモノニ於テモ、腫瘍細胞ハ遠ク該神經纖維索ノ中心部乃至末梢部ニ於テ神經纖維索ヲ圍繞シテ索ノ反對側ニ及ビ、延イテ淋巴管腔ノ擴張ヲ起シタルノ像ヲ見ルコトアリ。而カモ斯ノ如キハ決シテ常ニ然ルニ非ズシテ多數ノ連續切片ヲ精檢スルモ遂ニ如上ノ像無ク、即、神經纖維索ノ一側ニ腫瘍細胞ノ存在ヲ索外ニ認メ之ト反對側ニ周圍淋巴管腔ノ擴張アルヲ確認セシメ、後者ガ唯反應的ニ現出セラレタルコトヲ推定セシムルニ足ルモノアリ。尙、此際考慮スベキハ惡性腫瘍細胞ニ因スル毒素の物質ノ作用如何ノ問題ナリ。之ニ關シテハ後述スベシ。尙、附言スベキハ、腫瘍組織増殖ニ際シテ甚度、出現スル圓形細胞浸潤竈ガ廣ク存在スル場合ニ於テモ、此裡ニ在ル神經纖維索周圍ノ淋巴管腔ハ腫瘍細胞竈ニ於テ見ルト同一ナル擴張ヲ示スモノアルコトナリ。

### 三、神經纖維索周圍結締組織ニ於ケル所見

腫瘍組織ノ侵掠ノ時期ノ如何ニ由リテ、神經纖維索周圍結締組織ノ像ハ種々ナレドモ、其初期ニ於テ一般ニ認メラル、モノハ此結締組織ノ肥厚ナリ。コハ凡テノ場合ニ於テ全神經纖維索ヲ圍繞シテ現ハレ、腫瘍組織ト神經纖維索トガ相接著スル一側乃至一局部ニ於テノミ起ル像ニ非ズ。此關係ハ神經纖維索ノ横斷面ト縱斷面トヲ合ハセ考フル時ハ殊ニ著明ナリ。是等ノ像ハ神經纖維索ガ腫瘍組織ノ侵掠ニ對スル一種ノ反應性防禦裝置トモ考ヘ得ラル、現象ニシテ周圍結締組織ノ肥厚ガ神經纖維索ヲ圍繞シテ起ルコトモ結締組織ガ單ニ惡性腫瘍組織ノ機械的壓迫ニノミ對スル以外ニ、是等細胞ノ產出セル毒素の物

性腫瘍組織ガ初メテ神經纖維索ニ達シ之ヲ破壞シテ其内部ニ侵入セル場合ニ於テハ、此腫瘍細胞ハ其纖維相互ノ間隙ニ沿フテ神經纖維索内ニ特ニ其進路ヲ求メテ増殖シ、依テ遠隔ノ部ニ進ミツ、アル像ヲ見ルコト屢々ナリキ。且、神經纖維索内ニ侵入セル腫瘍細胞群ハ其侵入側ニノミ沿フテ神經纖維索内ヲ進行スルモノニ非ズシテ、更ニ其索ノ中心部ニモ進ミ其部ニ於テ腫瘍増殖ノ進路ヲ取リツ、アルモノヲモ認メシメタリ。

而シテ之ヲ神經纖維索全體トシテ觀察スルニ、惡性腫瘍組織ノ増殖ニ對シ神經纖維ガ腫瘍増殖ノ方向ト同一方向ニ唯壓排セラル、像ハ尠ク、神經纖維ハ其位置ニ於テ惡性腫瘍細胞ノ侵掠進入スルマ、ニナリタル狀ヲ見ル事多シ。之ヲ良性腫瘍組織ノ場合ト比較スルニ、此場合ニ於テハ神經纖維ハ唯單ニ機械的壓迫ノ爲メニ腫瘍増殖ノ方向ニ壓出セラレタル像ヲ呈スルガ多シ。且、各神經纖維ノ走行ヲ精檢スル時ハ、神經纖維索中ニ惡性腫瘍細胞ノ侵入ヲ被ムルト否トニ拘ハラズ、必發ノ現象トシテ認メ得ラル、モノハ神經纖維ノ走行ノ正常ナラザル事ナリ。即、各纖維ノ走行ハ一般ニ不規則トナリテ多クハ蛇行シ、或ハ螺旋形ニ迂曲ス。此ハ神經纖維索内間質結構ノ迂廻彎曲ト共ニ明ニ認メ得ラル、像ナリ。

## 二、神經纖維索周圍淋巴管ニ於ケル所見

増殖腫瘍組織ト直接セル神經纖維索ニ於テハ勿論、腫瘍細胞群ト比較的隔離シタル位置ニアル神經纖維索ニ於テモ、殆、凡テノ場合ニ認メラル、ハ神經纖維索周圍ノ淋巴管腔ノ擴張ナリ。腫瘍組織ガ神經纖維索ト相接スル場合ニ於テモ、兩者ガ互ニ相接スル部位ニノミ淋巴管腔ノ擴張ガ認メラル、ニハ非ズシテ、反ツテ神經纖維索ノ反對側、即、同一視野中、腫瘍組織トハ一見無關係ノ狀ニアル部位ニ

レドモ是レ腫瘍細胞ノ侵掠ニ因ル神經纖維ノ二次的ニ變化シタル像ニシテ、腫瘍組織ノ増殖更ニ旺盛ナル場合ニ於テハ、腫瘍細胞ハ其獨特ノ集簇ヲナシテ神經纖維索全部ヲ破壞變性セシメ、時ニ唯僅少部分ニ於テノミ若干ノ神經纖維ヲ散見セシムルニ過ギズ。

### 五、神經榮養血管ニ於ケル所見

惡性腫瘍組織ト血管トノ關係ハ菊地氏ノ既ニ論述セラレタル所ニシテ今敢テ再ビ之ヲ記載スルノ要ナシト雖、余ノ檢索シ得タル標本ノ示ス所ニヨレバ神經榮養血管ニ於テハ、毛細管ノ小ニ至ルマデ常ニ認メ得ルモノハ血管腔ノ擴張及ビ血球ノ充盈ナリ。時トシテハ其榮養血管壁破レテ其部位ニ小出血竈ヲ認ムル場合アリ。カ、ル場合ニ於テハ附近ノ神經纖維以外、腫瘍細胞自己モ著明ナル變性ニ陷レルヲ常トセリ。

其然ラザル場合、即、神經纖維ノ各成分ニ明カニ腫瘍組織ニ因ル多少ノ變性ヲ認メ得ル場合、又ハ腫瘍細胞ガ明カニ神經纖維索内ニ浸潤セル場合ニ於テモ、其榮養血管腔内ニ明カニ腫瘍細胞ヲ發見スルコトハ極メテ困難ナリキ。而シテ腫瘍細胞ガ血管腔内ニ於テ崩壞湮滅スルコトアルハ既ニ明カナル事實ニシテ、コハ神經纖維索ト榮養血管腔トヲ相比較シテ、何故ニ前者ニ腫瘍細胞ノ多クヲ發見スルニ拘ハラズ、後者ニ腫瘍細胞ヲ探求スルコトノ困難ナル所以ヲ説明スル一助タリ得ベシ。尙ホ、神經榮養血管腔内ニ存在セシ個々ノ腫瘍細胞ガ血流ニ依テ流レ去ルコト無キ能ハザランモ、是等腫瘍細胞ノ増殖ニ當ツテ神經組織ガ血管腔内ヨリモ却テヨリ好都合ナルコトアルヲ思ハシム。唯質實セル神經纖維索ガ管腔ヲ有スル血管ニ比シテ其轉移竈形成ニ關與スルコトノヨリ少キハ固ヨリ考察ニ難カラズ。

○赤松・惡性腫瘍組織増殖ノ末梢神經纖維ニ對スル態度

質ノ作用ニ因ル結締組織ノ反應性肥厚ナリトモ考ヘ得ラル、ナリ。

而シテ腫瘍組織ノ侵掠及ビ之ニ伴フ組織破壊ガ更ニ高度ナル時期ニ於テハ、其結締組織維ハ遂ニ萎縮ヲ呈シ、破壊ノ狀ニ陥リ、核ノ染色漸ク不良トナリ、場合ニヨリテハ周圍結締組織ハ終ニ認ム可カラザルニ至ル。此際、腫瘍組織ノ侵掠漸ク盛ニシテ、腫瘍細胞ハ神經纖維索内ニ突入シ又ハ亂入スルノ狀ヲ呈セリ。

#### 四、神經纖維索内結締組織ニ於ケル所見

腫瘍組織ノ浸潤漸ク深部ニ及ビ個々ノ腫瘍細胞或ハ其集簇ガ神經纖維索内ノ處々ニ認メラル、モノニ於テハ、索内結締組織維ハ一見増殖肥厚セルモノ、如シ。然モ一々ノ結締組織維ヲ精檢スレバ、其必シモ然ラザルヲ認ムル場合多シ。即、「ヘマトキシリン」ニ對スル核ノ染著力漸ク不良トナリ纖維自己ニ於テモ其染色一樣ナル能ハズ。要スルニ是等結締組織維モ他ノ諸組織ノ如ク腫瘍組織ニヨリテ同様ニ潰滅スルヲ認メシムルモノナリ。

而シテ神經纖維ニ於テモ後ニ記載スルガ如ク其軸索、髓鞘ノ變性強度トナリ、唯 Schwann 氏鞘核ノ増殖盛トナリ、神經纖維萎縮消失シテ神經纖維自己モ一樣ニ結締組織性ニ染色セラル、場合ニ於テハ、既ニ存在セシ索内結締組織維トノ區別、鏡檢上、極メテ困難ナリキ。尙、腫瘍組織ノ間質結締組織ト上述結締組織トノ鑑別ニ至テハ、之ヲ Daniel 氏ノ分別法ニ從フモ亦極メテ困難ナリ。唯腫瘍組織間質結締組織ノ増殖極メテ著明ナル場合ニ於テノミ辛ウジテ彼此ヲ區別シ得ルノミ。此神經纖維ノ變性強度ニシテ結締組織性ニ染色スルモノ多數ナルトキハ、神經纖維索ハ一見、結締組織維増殖ノ觀ヲ呈セリ。然

該小顆粒ガ吸收乃至連搬セラレタルモノニシテ、髓鞘ノ構造ハ遂ニ全ク破壊セラレテ周圍ノ結締織乃至腫瘍細胞或ハ淋巴細胞ニヨリテ其位置ヲ奪ハル、ニ至ル。Wiggert氏法染色ニヨルモ上述ノ如キ像ハ明カニ認メ得ラル、モ、本田氏法染色ニヨレバ「ズダン」Ⅲ小顆粒ノ狀ハ殊ニ著明ニ認ムルコトヲ得タリ。即、「ズダン」Ⅲニヨル髓鞘ノ染色調ハ中性脂肪顆粒ニ見ルガ如キ美麗ナル鮮紅色ニハ非ズシテ稍々淡ナル黃色ノ調ニ富ム色トシテ現ハル、ガ爲ニ、髓鞘ノ變性ニヨル小顆粒ノ「ズダン」Ⅲニ對スル染色上ノ對照ハ極メテ著明ナリキ。

尙ホ、附言スベキハ髓鞘ニ於ケル漏斗狀構造ニ就テナリ。漏斗ハ一般ニ軸索ヲ中心トシ、Schwann氏鞘下ヨリ起リ、略々、一定ノ間隔ヲ以テ相竝列スルモ、其幅ハ一般ニ周邊部ニ於テ稍々狭ク、且、其緣稍々不正ニシテ平滑ナラズ。多數例ニ於テ認メ得ルモノハ漏斗ノ各部ハ決シテ一樣ノ太サヲ有セズ、中央部ニ於テハ最モ實質シ周邊部ニ近クニ從ツテ次第ニ菲薄トナルコトナリ。而シテ各漏斗ハ正當ナル場合ニ於テハ數箇又ハ十數箇ガ略々一定ノ方向ニ竝列スルヲ常トスレドモ、髓鞘ニ一定度ノ變性ノ現ハル、ニ及ンデハ、其方向往々相反シテ出現スルコトアリ、且、本漏斗ノ間隔漸ク不正トナルニ至ル。而シテ是等間隔ノ神經角質基材ハ其ノ蜂巢狀構造甚シク減少シ、大ナル空洞ノ如ク見ユルコトアリ、又比較的正常ノ構造ニ近キモノアリ、全ク空虚ニシテ角質基材ノ殆んど存在セザル觀ヲ呈スルモノモアリ。

而シテ特ニ注目ニ値スルモノハ、變性セル髓鞘ガ其神經角質基材ノ蜂巢狀構造ヲ消失スルニ至ラズシテ斷裂スルコトナリ。此場合ニ於テモ其斷端ハ一般ニ不正ニシテ凸凹アリ、「ズダン」Ⅲニ好染セラル

○赤松・惡性腫瘍組織増殖ノ末梢神經纖維ニ對スル態度

## 六、髓鞘ニ於ケル所見

腫瘍組織ニヨツテ起ル髓鞘ノ第一ノ變化ハ其網狀構造ニ於テ認メラル。正常ノ髓鞘ニ於ケル蜂巢狀構造ハ規則正シク、且平等ニ配列セラル、モ、變性セル髓鞘ニ於テハ其網眼ノ大サ不整トナリ且、其配列極メテ雜然タリ。變性高度ニ至レバ髓鞘中ニハ「ズダン」Ⅲニ好染スル小顆粒ヲ認メシム。此小顆粒ノ大小及配置ハ極メテ不同ニシテ且、不規則ナルヲ常トス。變性更ニ高度トナレバ髓鞘ハ終ニ節狀ニ斷裂ス。カ、ル場合ニ於テ其髓鞘ヲ本田氏ニ從ツテ染色スレバ「ヘマトキシリン」ノ色ヲ取ルコト不良トナリ且、其色ハ一般ニ淡トナル。カ、ル場合ニ於テハ「ズダン」Ⅲノ色ヲ著明ニ取ル小顆粒ガ其各節ノ間ニ明カニ認メ得ラル、コト多シ。小顆粒ハ大小不同ニシテ是等ヲ神經纖維ノ横斷面ニ於テ見ル時ハ小顆粒ハ神經纖維ノ周圍ヲ略々一樣ニ周レルモノアレドモ、必シモ常ニ然ルニハ非ズシテ、小顆粒ハ神經纖維ノ一側ニ於テ集團ヲ作レルモノモアリ。而シテ是等ノ變化ハ腫瘍細胞ガ神經纖維ニ對スル位置ノ如何ニ由ル特殊ノ關係アリトハ認メラレズ。而シテ腫瘍細胞ノ侵入ノ程度強キ所ニ於テハ、上述ノ小顆粒ノ出現モ亦強度ナルヲ常トスルモ、然カモ是レ必發ノ事實ニハ非ズ。即、同一視野ニ於テ神經纖維索ノ内外共ニ全ク腫瘍細胞ノ認メラレザルモノ、又ハ多數ノ連續切片檢索ニ依ツテ、尙ホ、神經索ノ内外ニ腫瘍細胞ヲ認メ得ザリシ場合ニ於テモ、上述髓鞘ノ變化ノ極メテ著明ナルコトアリ。而シテ此後者ノ如キ場合ノ大多數ハ、肉腫ニ於ケルヨリモ、寧ろ癌腫細胞ニ因スル變性ノ一部トシテ見得ルコト多シ。

髓鞘ノ變化更ニ進メバ、「ズダン」Ⅲニ著明ニ染色スル小顆粒ハ既ニ其影ヲ沒スルニ至ル。之レ明カニ

ルモノ多シ。又軸索ガ大小ノ斷片ニ斷裂スル場合ニ於テハ體鞘ニ於ケル斷節ト一致シテ起ル場合多キガ如シ。

場合ニヨリテハ一軸索ノ全體ニ於テ其直徑一般ニ腫脹シテ、正常軸索ノソレニ倍スルニ至ル。是等ノ場合ニ於テハ軸索ノ鍍銀力ハ正常ノ場合ニ比シテ甚シク劣レリ。然レドモコハ必シモ常ニ然ルニハ非ズシテ、鍍銀度正常ニ近キモノアリ、時ニハ正常ニ比シ却テ一層高度ニ鍍銀セラ、コトアリ。

而シテ以上ノ腫脹部ニ於テ往々其鍍銀力弱クシテ大小ノ空胞ヲ認メシムルコトアリ、或ハ之ガ極メテ微細ナル網眼ノ如ク見ユル場合アリ。但、斯カル像ノ發現ハ余ノ研究標本ニテハ其例多カラザリキ。

以上ノ變化ニ次デ起ルベキ軸索ノ變性ハ其斷裂ナリ。其斷端ハ大多數ノ場合ニ於テ尖クシテ銳利ナリ。増進セル周圍ノ腫瘍組織中ニ、或ハ萎縮壞死ニ陥ラントシツ、アル周圍結締組織中ニ辛ウジテ尖銳ナル軸索斷端ヲ認メシムルモノアリ。又腫瘍細胞群中ニ在リテ其間質中ニ没入セルガ如キ軸索ヲ認メシムルモノアリ。但、斯カル軸索ハ常ニ變性ニ陷レルモノニシテ、全ク正常ナル軸索ガ腫瘍細胞群中ニ發見セラル、場合ハ之レナカリキ。

尙ホ、軸索ノ走行ニ就テ觀察スルニ其走行ハ常ニ不正トナリテ、屢々迂曲シ且壓迫セラレタル狀ヲ認メシム。是等ハ増殖セル腫瘍細胞及ビ其他ノ諸種組織細胞ノ爲ナルコトヲ明カニ顯微鏡下ニ首肯セシムル像多シ。軸索迂曲ノ狀ハ其彎曲ノ度ニ大小アリテ一樣ナラズ、極メテ大ナル彎曲ヲナシ其數多カラザル場合ト、小彎曲相連リテ起レルモノトアリ。是等ノ二ツノ場合ニ於テ腫瘍ノ種類ニヨル差異ヲ認ムルコトハ極メテ困難ナリ。如何ナル種類ノ腫瘍細胞ニ於テ大彎曲起リ、如何ナル腫瘍細胞ノ場

○赤松・惡性腫瘍組織増殖ノ末梢神經纖維ニ對スル態度



ル小顆粒ガ其斷端間ニ於テ多數ニ認メ得ラル、コト既記ノソレト異ルコト無シ

上述ノ如ク髓鞘ニ於ケル種々ノ變性ノ結果、遂ニ破壊ニ陥レル塊片ハ甚シク大小不同ニシテ、大ナルモノハ Schwann 氏鞘ヲ充シ、小ナルモノハ難然トシテ散在スルヲ常トス。蜂巢狀構造既ニ不明トナレル場合ニモ、尙ホ、軸索片ト認メ得ベキモノヲ其中ニ證明シ得タルモノアリ。

而シテ髓鞘ニ斯クノ如キ變化起レルモノニ於テモ、Schwann 氏鞘ノ尙ホ原形ノマ、ニ殘ルコトアリ。サレドモ多數例ニ於テハ其核ハ増殖ヲ示シタリ。而シテ殆ド内腔ヲ存セザル程度ニ萎縮セルモノニ於テハ其核ノ増殖殊ニ著明ナリ。然レドモ腫瘍細胞ヲ Schwann 氏鞘内ニ著明ニ認メ得ルコトハ殆ド無カリキ。

以上記載スルガ如キ種々ノ變性ハ、同一神經纖維索ノ髓鞘ニ於テ常ニ同一程度ニ認メラル、モノニ非ズシテ、相隣接セル髓鞘ニ種々ノ階級ニアル多クノ變化ガ相接シテ認メラル、場合多シ。且、同一神經纖維ニ於ケル髓鞘ニ於テモ、屢々種々ノ階級アル變性ヲ認メシム。又殆ド正常ナル髓鞘ト變性セル髓鞘トガ相隣接シテ存在セルモノアリ。從テ是等ノ顯微鏡下ノ像ハ極メテ多樣ナリ。

### 七、軸索ニ於ケル所見

Bielschowsky 氏鍍銀法ニ據リテ第一ニ認メラル、軸索變性ハ其腫脹ナリ。卽、軸索ハ處々ニ於テ紡錘形ニ腫脹ス。其腫脹部ノ中心部ハ多クハ鍍銀度弱ク、時ニハ帶褐灰色ニ近キモノアリ。是等ノ腫脹相連リテ起レル場合、若クハ其腫脹ガ小圓形ニシテ相連ル時ハ變性セル軸索ハ恰モ念珠ノ如クナレリ。而シテ是等ノ大小ノ腫脹ノ現ハル、部位ハ大體ニ於テ髓鞘ニ於ケル上述諸種ノ變性部位ト一致シテ起

テモ其局限部位ハ必シモ腫瘍細胞群ノ存在部位トノ間ニ特殊ノ直接關係ヲ有スルヲ認ムル能ハズ。中心部及ビ末梢部ニ明カニ腫瘍細胞ノ存在ナキ部位ニ於テ著明ナル軸索ノ變性竈アル場合アリ。腫瘍細胞群ト相接シタル軸索ニシテ、尙ホ高度ノ變性ニ陥ラザルガ如キアリ。從テ一律ニ記載スル能ハズ。

#### 八、Schwann 氏鞘ニ於ケル所見

腫瘍組織ニヨリテ既ニ軸索、髓鞘ガ或ル程度ノ變化ヲ呈出シタル場合ニ於テ、Schwann 氏鞘ニ認メ得ラル、モノハ其核ノ増殖ナリ。然レドモ、軸索及ビ髓鞘ニ於テ變性可成ニ強ク現ハル、場合ニ非レバ、其核ノ増殖亦著明ナラズ。核ハ多クハ長橢圓形又ハ紡錘形ヲ呈シ相連接シテ増殖セリ。而シテSchwann 氏鞘ハ軸索及ビ髓鞘ノ變性ニ伴フテ膨脹シ又ハ收縮ス。軸索及ビ髓鞘ニ破壊斷裂現ハル、時ニ至レバ、内容ノ收縮減少スルト共ニ、Schwann 氏鞘モ亦容積次第ニ縮小シ終ニ質實セル索狀物トシテ現ハレ來ル。此場合ニ於テハ此變化ヲ呈セル Schwann 氏鞘ト間質結締組織トノ異同分別、屢々困難トナルニ至ル。

#### 九、小圓形細胞浸潤竈ニ於ケル所見

腫瘍組織ニヨリテ侵掠セラレタル神經纖維索ニ伴ヒタル必發ノ現象トシテ神經纖維索周圍或ハ其内部ニ於ケル小圓形細胞浸潤アリ。コハ腫瘍組織ニヨツテ侵サル、凡テノ組織ニ於ケル所見ニシテ、神經纖維索ニ特有ノモノニハ非ズ。從ツテ其浸潤竈自己ノ像モ他ノ諸組織ニ於ケルモノト差別アルコトナシ。然レドモ此浸潤竈可成ニ廣汎ニシテ瀰蔓性ナル場合ニ於テ、神經纖維ノ各成分ニハ又大多數例

○赤松・惡性腫瘍組織増殖ノ末梢神經纖維ニ對スル態度

合ニ於テ小彎曲ノ起ルベキカハ不明ナリ。

軸索ニ腫脹、彎曲ヲ起シ遂ニ斷裂ニ陥ルニ當リ認メ得ルモノハ軸索ノ萎縮ニシテ、軸索ノ直徑ハ極メテ狹小トナル。其表面ハ一般ニハ平滑ナレドモ、時ニ其表面ニ多少ノ凸凹ヲ認メシム。狹細ナル軸索ハ上記種々ノ彎曲ヲ示スコト少ナカラズ、各纖維ノ間隙ニハ腫瘍細胞ノ外、種々ノ形態ノ遊走細胞ヲ入ル、コト多シ。此場合ニ於ケル軸索ノ鍍銀力ハ正常ノ軸索ニ比シテ大差ナキモノモアレドモ、一樣ニハ鍍銀セラレズ、處々ニ不平等ナル鍍銀調ヲ示スモノ多シ。

而シテ軸索ノ變性更ニ高度ニ至レバ、軸索ハ大小種々ノ斷片又ハ小顆粒狀ニ斷裂ス。其斷端ハ大多數例ニ於テハ銳尖ナレドモ、時ニ或ハ鈍圓ナルアリ。且、是等ノ斷端ハ纖維ノ軸部ニ存スルモノアリ、或ハ一側ニ偏シテ全ク Schwann 氏鞘ニ密著シテ起レルガ如キモアリ、一樣ナラザルガ如シ。

上述ノ斷裂ハ上記諸種ノ腫脹乃至變性部位相互ノ連續ガ愈々萎縮シ、遂ニ之ヲナスニ至レリト認ムベキ場合多シ。而シテ顆粒狀乃至不正形紡錘形ノ斷片ガ點々相連リテ是等斷裂ノ間隙ヲ充タス場合アリ。斯カル軸索ノ萎縮斷裂ハ必シモ一神經纖維ノ全體ニ互リテ一樣ニ起ルモノニハ非ズシテ、一見殆ド正常軸索ノ走レルガ如ク見ユルモノニ於テ、此ヲ多數ノ視野ノ下ニ追跡スル時ハ同一軸索ノ一部ニ於テ種々ノ形態ヲナセル腫脹部乃至萎縮變性ヲ示セルモノアリ。而シテ往々ニシテ認メラル、モノハ腫脹部ヨリ急ニ斷裂ニ移行スル像ナリ。斯カル場合ニ於テハ其斷端ハ概シテ「コルベン」狀ヲナセリ。

是等種々ノ所見ハ一神經纖維索ノ全體ニ互リテ一樣ニ起ルモノニハ非ズシテ、變性セル軸索ガ一神經纖維索ノ一局部ニ局限スル場合ト散在性ニ索ノ全者ニ互リテ存在スル場合トアリ。前者ノ場合ニ於

進ミ來ルガ如キハ寧稀有ニシテ、多クハ數路相依ツテ腫瘍組織ノ侵入ニ道ヲ開クモノ、如シ。即、腫瘍細胞ガ神經纖維索外鞘ニ於ケル淋巴管ニ多數ニ認めラル、場合アリ、或ハ此部ノ所謂組織間隙ヲ通ジテ周圍ノ腫瘍細胞竈ヨリ擴張性乃至浸潤性増殖ヲナシテ神經纖維索内ニ比較的廣汎ナル腫瘍竈ヲ形成スルニ至レルモノアリ。或ハ神經榮養血管周圍ノ組織比較的粗鬆ナル結締織中ニ腫瘍組織ガ其進路ヲ求メントシツ、アルガ如キ像ニ接セル場合モアリ。唯神經榮養血管腔内ニ明カニ腫瘍細胞ノ存在ヲ認ムルハ比較的稀有ナル事實ナルガ如シ。而シテ腫瘍組織ニ因ル神經纖維ノ變性漸ク高度トナレルモノニ於テハ、神經纖維索ノ大部分ハ、之ヲ横斷面ニ於テ見ル時ハ腫瘍組織ノ浸潤ヲ被リ、正常ナル構造ヲ有スル神經纖維ハ殆ド認め難キコトアリ。或ハ種々ノ程度ノ變性ニ陷レル神經纖維ガ散在性ニ發見セラレ、或ハ唯一方ニ偏在スルヲ見ルノミ。甚シキ場合ニ於テハ全ク腫瘍組織ニヨリテ充填セラレタル神經纖維索ヲ認メシムル場合アリ。然レドモ神經纖維索ト腫瘍細胞群トガ相隣接スルニ至リ、且、腫瘍細胞群ノ可成廣汎ナル浸潤ガ神經纖維索周圍ノ諸組織ニ認め得ラル、場合ニ於テモ神經纖維内ニ何等腫瘍組織ノ浸潤ノ無キコトアリ。斯クノ如キ所見ハ癌腫細胞ニヨツテ圍マレタル神經纖維索内ニ於テヨリモ、寧、肉腫ノ場合ニ比較的屢々發見セラレタリ。是レ一ハ兩種ノ惡性腫瘍細胞ノ生物學的性質ノ差異ニ歸スベキモノナルベシ。

余ハ多數ノ例ニ於テ腫瘍ノ原發竈ノ附近、殊ニ神經纖維索周圍ニ存在スル淋巴腺ト此神經纖維索トヲ相比較シタルニ、前者ニ於テハ少數、或ハ殆ド認め難キ程度ニ於テノミ腫瘍細胞ガ發見セラル、ニ拘ハラズ、後者ニ於テハ明カニ多數ノ著明ナル腫瘍細胞ガ其神經纖維索ヲ充填シテ餘ス所ナキニ至ル

ニ於テ極メテ著明ナル變性ノ起レルヲ認メシム。此場合ニ於ケル神経纖維ノ變性ハ一方ニハ増殖セル腫瘍組織ニ因スルモノモアルベシト雖、此小圓形細胞浸潤竈ノ直接ノ障碍ガ亦之ニ關與スルヲ否定スル能ハズ。唯此兩者ノ場合ヲ形態學的ニ顯微鏡下ニ區別スルハ極メテ困難ニシテ余ノ遺憾トスル所ナリ。

尙ホ、瘍腫組織ニヨツテ侵サレタル神経纖維索ニ於テ、屢々神経節細胞狀細胞ヲ比較的多數ニ認メ得ラル、場合アリ。此場合ニ於テモ神経纖維自己ノ變性所見トシテ殊ニ特有ト認ムベキモノハ無シ。且、此種細胞ハ腹膜後部淋巴腺、横隔膜等ニ於ケル腫瘍轉移竈ニ於テ認メラル、コト多キモ果シテ其部位ニ固有ナル神経叢ノ神経節細胞ニ屬スルモノナルカ否カハ之ヲ後來ノ研究ニ依ラザル可カラザルナリ。

### 第三章 腫瘍組織ガ神経纖維ヲ侵ス態度——悪性腫瘍組

#### 織増殖ノ進行徑路トシテノ神経纖維

腫瘍組織ガ神経纖維ヲ侵ス場合ニ其通路トシテ考ヘ得ラル、モノハ、(一)淋巴管ニヨルカ、(二)所謂組織間隙ヲトルカ、(三)神经栄養血管ニヨルカ或ハ栄養血管周圍ノ鬆疎ナル結締織中ニ進入シ之ニ沿ヒテ深部ニ侵入スルカ、(四)以上特別ノ徑路ニ由ラズシテ一般ニ互リテ浸潤蔓延シ破壊的ニ神経纖維索ノ周邊部ヨリ壓迫性蠶食性或ハ亂入性ニ侵入シ來ルカヲ考察シ得ベシ。而シテ腫瘍組織ガ他ノ一般諸組織ヲ侵ス場合ニ於ケル如ク神経纖維索ヲ侵掠スル場合ニ於テモ、上述中ノ一徑路ノミヲ取ツテ

ドモ此小圓形細胞浸潤ハ諸氏ノ唱フルガ如キ、唯一定ノ態度ヲノミ取ルモノニハ非ズシテ、侵略シ來レル腫瘍組織ノ生物學的性質ノ差異及ビ該部位ニ於ケル神經纖維索周圍組織ノ生活要約ノ如何ニヨリテ其所見ニ差異アリ。余ノ研究標本ニ就テ觀ルモ、小圓形細胞ノ浸潤ガ組織崩壞ノ助勢トナルガ如ク見ユルアリ、或ハ防禦的態度トモ認メ得ラル、アリテ一樣ナラズト雖、稍々區別シ得ラル、モノハ、小圓形細胞浸潤ガ神經纖維索周圍ニ在ル場合ト神經纖維內ニ在ル場合トニテ其態度ヲ異ニセルガ如キ觀アルコトナリ。即、神經纖維索周圍ニ於テ認ムル小圓形細胞浸潤竈ニ於テハ、其諸組織ノ生物學的乃至ハ生活要約ノ如何ニ依ツテ種々ノ像ヲ示スコト他ノ場合ニ於ケル腫瘍組織ト共存スル小圓形細胞浸潤竈ニ見ルモノト敢テ差異ナシト雖、神經纖維索內ニ於テハ腫瘍組織ノ侵略ニ對シ小圓形細胞ノ浸潤ガ先行スルコト屢々ナリ。且、小圓形細胞ノ浸潤ハ各神經纖維ノ間ニ一般ニ散在シテ瀰蔓性ナルヲ常トス、而シテ腫瘍組織ガ神經纖維索內ニ侵入スルコト比較的少數ナル場合ニ於テ、小圓形細胞ノ浸潤ガ可成ニ著明ナル場合アリ。コハ上記 Bortmann 氏ノ所說ノ如ク「小圓形細胞浸潤ハ組織ヲ粗鬆ニナスニヨリ腫瘍細胞ノ進入ヲ容易ナラシムル」ガ如キ觀ナキニ非ザルモ、余ノ管見ニ依レバ是レ神經纖維索ノ生物學的構造及ビ性質ニ基クモノニシテ、各纖維間ノ所謂組織間隙ヲ潛行スル小圓形細胞ノ浸潤ガ腫瘍組織ノソレニ比シテヨリ好都合ナルガタメ神經纖維索內ニ於テ比較的廣汎ナル小圓形細胞浸潤ガ起リ得ルモノナルベシ。

而シテ是等小圓形細胞浸潤竈ノ神經纖維索內ニ於ケル大小廣狹ハ、余ノ研究標本ノ多數ヲ對比スル場合ニ於テハ、腫瘍組織ノ種類ノ差異如何ニヨリテ、必シモ一定セル所見ナキガ如シ。或ハ癌腫ニ強

モノアリ。斯クノ如キ像ハ明カニ悪性腫瘍組織ガ一般ニ信ゼラル、如ク淋巴管腔ニヨツテ傳播スルコトヨリモ、寧、神經纖維索ヲ其傳播道トシテ選ブコトアルヲ認メシムルナリ。

既ニ神經纖維索内ニ侵入セル是等ノ腫瘍細胞ガ其部ニ於テ増殖ヲ營ム場合ニ於テモ、特ニ一ノ神經纖維間ノ組織ノ比較的鬆疎ナル部ニ沿フテ増殖ノ進路ヲ展開セントスルガ如キ像ヲ示スハ注目スルニ足ル。コハ其部位ニ相當シテ廣ク作レル標本ニ就キ他ノ諸組織殊ニ血管及ビ淋巴管ト共ニ腫瘍細胞ノ増殖ヲ檢索スルコトニヨリテ、著明ニ認メラル、事實ナリ。

悪性腫瘍組織ノ轉移乃至増殖ニ際シテ血管又ハ淋巴管ガ重大ナル關係ヲ有スルゴトニ就キテハ既ニMüller氏ノ統計的研究等アリ、此事ハ多クノ學者ノ研究ニヨリテ人ノ熟知スルコロナルモ、腫瘍ノ増殖及蔓延ノ徑路トシテノ神經纖維索及ビ此神經纖維索ト腫瘍組織殊ニ悪性腫瘍組織トノ關係ノ記載セラレタルモノハ其數尙少シ。然レドモ臨牀上、屢々吾人ノ耳ニスル如ク、腫瘍占居ノ局部ニ於テ解剖學上、吾人ノ思考シ得ラル、神經纖維索ノ方向ニ沿フテ發散スル持續的乃至間歇的疼痛ナルモノアルコト多シ。蓋、之ヲ病理解剖學上ニ檢索シテ腫瘍組織ニヨル局部ノ神經纖維ノ壓迫破壞等ノ以外ニ、神經纖維索ガ是等ノ腫瘍組織ノ増殖乃至轉移ニ對シテ重要ナル徑路ヲナシ、且、神經纖維各成分ニ諸種ノ變性ヲ起サシムルコトヲ知ルハ、臨牀上ニモ亦價值多キ事項ナリ。

尙、悪性腫瘍組織ノ増殖ト殆、常ニ相伴フテ現ハレル神經纖維索ニ於ケル小圓形細胞浸潤ハ、他ノ諸組織ニ於ケル腫瘍竈ノ附近ニテ吾人ノ常ニ認メ得ル所見ト殆ド同様ナリ。而シテ此小圓形細胞浸潤ト腫瘍組織トノ關係ニ就テハ古來種々ノ研究アリ( v. Hansmann, Borrmann, Heidenhain 等)。然レ



部分ハ崩壊斷裂シテ其等ノ所見極メテ強度ナル場合アリ。而シテ上述ノ所見ハソガ癌腫ナル場合ト肉腫ナル場合ナルトヲ間ハズ殆ド同一ナリ。而シテ是等ノ場合ニ於テ神經纖維各成分ガ腫瘍細胞自己ノタメニモ亦大ナル變化ヲ被ムルベキハ勿論ナリ。唯、惡性腫瘍組織ニヨリテ侵サル、神經纖維ト神經榮養血管トヲ比較スルニ血管壁ノ抵抗ハ神經纖維ノ抵抗ニ比シテ可成強度ナルモノ、如シ。即、惡性腫瘍組織ニヨツテ被レル血管壁ノ變化未ダ甚シカラザル場合ニ於テモ、神經纖維各成分ノ間ニハ既ニ明カナル變性ヲ認メ得ラル、ナリ。是レ明カニ神經纖維ト血管壁トノ惡性腫瘍組織ニ對スル生物學的性質ノ差異ニ基クモノト解釋ス可キナリ。而シテ榮養血管ガ惡性腫瘍組織ニヨリテ被ムレル變化自己ハ比較的輕微ナルモ、ソガ二次的ニ神經纖維ニ及ボス影響ハ極メテ大ナルモノアリ。加之、榮養血管既ニ破壞サレテ出血竈ヲ形成セルガ如キ場合ニ於テハ、神經纖維各成分ハ腫瘍組織ニ因ル直接ノ影響ノ外ニ、更ニ神經纖維ノ變性ヲシテ益々強度ナラシムルナリ。

#### 神經纖維索内ニ侵入セシ惡性腫瘍組織ノ態度及ビ運命

神經纖維索内ニ侵入シタル惡性腫瘍細胞ガ其所ニ於テ分裂増殖ヲ營ムコト固ヨリ可能ナリト雖、上述セル如ク、神經榮養血管ノ破壞ニ陷レルモノニ於テハ、侵入セル惡性腫瘍組織ノ中心部ヨリシテ漸次壊死ニ陷ルコトモ亦可能ナリ。然レドモ凡テノ腫瘍細胞ガ悉ク斯クノ如キ退行性變化ニ陷ルニハ非ズシテ、一方ニ於テハ比較的旺盛ナル細胞増殖ヲ實現スル場合アリ。然レドモ一々ノ神經纖維間ニ嵌入セル腫瘍細胞ハ大多數ノ場合ニ各者殆固有ノ細胞形態ヲ具有セズシテ自己ノ形態ニ多少ノ變化ヲ生ジタルモノ多シ。但、是レ腫瘍細胞ガ組織間隙ヲ滲透侵入スルニ適當ナル形態ヲ取りタルニ過ギズシ



ク或ハ肉腫ニ強ク同一例ニ於テモ檢索部位ノ如何ニヨリテ差アリ。極メテ多數ノ例ニヨルニ非レバ、精確ナル斷定ハ不可能ナルモ、唯余ノ標本ノ示ス所ニ從ツテ敢テ憶測ヲ下スヲ得バ、小圓形細胞浸潤ハ肉腫例ヨリモ寧、癌腫例ニ於テ比較の大ナル浸潤竈ヲ其神經纖維索内ニ認ムル場合多キヲ認メタリ。以上ノ所見ヲ以テ臨牀上、惡性腫瘍組織竈ニ因スル持續的乃至間歇的疼痛ト相對比スレバ、是等臨牀上ノ症候ヲ病理解剖學上ニ説明スル一助トナリ得ルヲ見ル可シ。

### 腫瘍組織ニヨリテ侵略セラレタル神經纖維索周圍ノ淋巴管

#### 及ビ神經榮養血管ニ於ケル所見

既ニ記載セルガ如ク、神經纖維索ガ腫瘍組織ニヨツテ侵略セラレタル場合ニハ其索ノ周圍淋巴管腔ハ常ニ擴張ノ狀ニアリ。此擴張ハ大多數例ニ於テ神經纖維索ノ四周ニ於テ認メラレ、其管腔内ニハ腫瘍細胞又ハ小圓形細胞ノ集簇アル場合多シ。而シテ是等ノ淋巴管ノ所見ハ他ノ諸臟器乃至諸組織ニ於ケルト敢テ異ル所ナシ。

次ニ神經榮養血管ノ狀態ニ就テ觀ルニ、既ニ菊地氏ハ惡性腫瘍組織ノ一般血管ニ對スル態度ニ就テ詳細ナル記述ヲ試ミラレタリ。而シテ惡性腫瘍組織ト神經榮養血管トノ關係ヲ相對比スルニ、神經榮養血管殊ニ其毛細管ニ於テ、余ノ研究標本ノ示ス所ニヨレバ、大多數例ニ於テ認メラル、モノハ血管ノ擴張及ビ血球ノ充盈ナリ。而シテ神經榮養血管ニ是等ノ所見アル時ニハ既ニ神經纖維ノ各成分ニ於テ可成著明ナル變性ヲ認メシム。更ニ毛細管壁ガ腫瘍組織ニヨリテ破壊セラレテ血球ガ周圍ノ各神經纖維ノ間ニ滲蔓セル場合ニ於テハ、神經纖維各成分ニ於ケル變性亦極メテ著明ナリ。髓鞘軸索等ハ大

營ミ、其他諸種ノ管腔、例ヘバ肝毛細管或ハ膽管氣管枝腔等ガ腫瘍細胞ノ増殖、轉移ニ重要ナル位置ヲ占ムルコトハ直ニ腫瘍細胞ノ増殖乃至轉移發生ノ全般ヲ説明スルモノニ非ルガ如シ。神經纖維索ガ惡性腫瘍組織ノ増殖乃至轉移ニ際シテ重要ナル一部分ノ役ヲ營ミツ、アルコト又注目スベキ事實ナラズトセズ。

#### 第四章 腫瘍組織ニヨル末梢神經ノ變性所見

末梢神經ノ傷害性乃至非傷害性變性ハ既ニ多數ノ研究業績アリテ殆ド餘ス所ナキノ觀アレドモ、今日尙未解決ノマ、ニ殘サレタル問題モ亦僅少ナリトセズ。

抑、神經纖維ヲ切斷セル場合ニ、其切斷部ヨリ末梢部ニ神經組織ノ崩壞ヲ來スコトノ始メテ唱ヘラレタルハ Nasse 氏ニテ、Waller 氏ニヨツテナサレタル所謂 Waller 氏變性法則ノ發表セラレタルハ一八五三年ナリ。爾來神經纖維變性ニ當リテハ或ハ軸索ハ保存セラレテ髓鞘ノミガ崩壞スルモノト考ヘラレ、或ハ兩者共ニ壞滅ニ陥ルモノト考ヘラレシガ、Büchner 氏ニヨリテ神經纖維ノ變性ニハ兩者共ニ與ツテ共ニ頽廢ニ陥ルモノナルコト確認セラレタリ。爾來傷害性乃至非傷害性神經纖維變性ノ研究ニ際シ、是等神經纖維ノ各成分ノ變化ニ就テ觀察ノ遂グレタルモノ亦甚多シ。然レドモ神經纖維ノ各成分ノ變化ヲ文獻ノ示ス所ニ據テ探究スルニ、是等ノ變性所見ハ傷害性及ビ非傷害性ノ場合ニ於テ大體ニ於テ略、同一ナルガ如シ。軸索髓鞘乃至神經間質組織ノ變性所見ノ詳細ニ至ツテハ諸學者ノ見解今尙一致セザルモノ固ヨリ少ナカラズ(島蘭、木村、本田、青柳、Büchner, Strebe, Nothhaft, Doinkow、

テ、特ニ退行性變化ト認ムベキ像ニハ非ルベシ。

一般諸組織ニ侵入セル腫瘍細胞生活ノ消長ハ自己ノ生物學的性質ニヨルコト勿論ナリト雖、又此腫瘍細胞ヲ含有スル各組織固有ノ性質素因ニ關係スル所大ナリ。例ヘバ腫瘍細胞ガ或ル組織内ニ侵入スルニ際シ、此部ノ理化學的關係ガ其増殖ニ好都合ニ作用スル場合モアルベク或ハ機械的壓迫乃至化學的作用ガ其増殖ニ有害ニ影響スルコトモアルベシ。之ヲ惡性腫瘍組織ガ脈管腔ト神經纖維索トノ各々ニ侵入セル場合ヲ比較スルニ、其ノ理學的性質ノ上ヨリ觀レバ、腫瘍細胞ノ傳播及ビ轉移ニ對シテハ神經纖維索ノ構造ガ脈管腔ノ構造ニ比シテヨリ好都合ナラザルハ否ム可カラザルナリ。而シテ脈管腔内ノ血液及ビ淋巴液ト神經纖維トノ腫瘍細胞ニ對スル理化學的性質ノ差異ヲ精論スルハ、余ノ茲ニ敢テセザル所ナルモ、其理學的構造ガ腫瘍細胞ノ傳播乃至轉移ニヨリ好都合ナル脈管腔ニ多數ノ場合、容易ニ腫瘍細胞ガ認メラル、ニ對シ、其比較的好都合ナラザルベキ神經纖維索内ニ於テハ、脈管腔ニ於テ見ルガ如ク、屢々且、廣汎ナル傳播ノ認メラレザルハ固ヨリ怪ムニ足ラザルナリ。而シテ此兩者ハ畢竟唯數量的ノ差異ノミ其増殖傳道ヲ營ムノ事實ニ於テハ一ナリ。即、神經纖維索ノ周圍ニ存在スル血管及ビ淋巴管内ニ於ケル腫瘍細胞ノ傳播ト相對比シテ、此神經纖維索自己モ亦腫瘍細胞傳播ノ一路ナルコトヲ認メシムルナリ。是レガタメニ一々ノ神經纖維索ハ惡性腫瘍細胞群及ビ是等ト相伴フテ存在スル小圓形細胞浸潤ト相依ツテ、各纖維ハ益々其結束性ヲ失ヒテ個々ノ纖維疎鬆トナリ、或ハ此神經纖維索内ニ新ニ一ツノ腫瘍組織竈トシテ増殖蔓延ノ態度ヲ示スニ至ルモノナリ。

既ニ信ゼラル、ガ如ク、癌腫細胞ハ好ミテ淋巴管ニ依リ、肉腫細胞ハ主トシテ血管ニ依リテ轉移ヲ

ノ多クノ場合ニ於テモ明カニ認メシムル所ナリ。從ツテ其病理學的意義ニ就テモ亦多岐ニ互テ考察セラレ得ベシ。余ハ其意義ノ如何ヲ此所ニ斷定セントスルニハ非ズ。

## II、神經纖維腫脹 (Schwellung der Nervenfaser)

神經纖維ノ變性漸ク増進スル時期ニ於テハ、軸索ハ著シク腫脹シ來ル。之ヲ神經纖維索ノ橫斷面ニ於テ見レバ大小種々ノ直徑ヲ有スル軸索ガ互ニ相入り亂レテ存在スルヲ認ムルナリ。而シテ此腫脹セル軸索ノミガ索ノ一局部ニ偏在スルガ如キ場合モアレドモ、多クノ場合ニ於テハ割然タル別ナクシテ腫脹セル軸索ガ散在性ニ存在スルコト多シ。而シテ此腫脹セル軸索ハ一般ニ Bielschowsky 氏染色法ニヨレバ、其鍍銀力弱クシテ其中ニ種々ノ大サ及ビ形態ヲ有スル空胞出現シ來ルモノナリ。

髓鞘ハ一般ニ伸展セラレ菲薄トナル。其狀、恰モ軸索ノ腫脹ニヨツテ外方ニ壓排セラレタルガ如キ觀アリ。髓鞘ノ腫脹亦軸索ノソレニ略々一致シ、其網狀構造ハ益々不正トナリ、本田氏染色法ニ從ヘバ「ヘマトキシリン」ノ色ヲ取ルコト漸ク少クシテ、「ズダン」Ⅲノ色一般ニ強ク、帶褐黃色トナリ、微細ナル脂肪顆粒ノ發現ヲ認メシムルニ至ルナリ。是等脂肪顆粒ノ存在スル場合ニ於テハ其分布必シモ瀰漫性ナラズシテ髓鞘ノ腫脹殊ニ大ナル部ニ於テ多クノ脂肪顆粒ヲ認メシムルコト多シ。顆粒ノ大サ亦一樣ナラザレドモ、變性漸ク強度ナルニ至レバ、顆粒ノ大サ亦大トナレリ。是等ハ神經纖維ガ腫瘍組織ト直接セルモノ或ハ腫瘍組織群ノ浸潤ヲ蒙ルモノ、乃至ハ腫瘍組織ニヨリテ包埋セラレタルモノ、或ハ腫瘍組織ヨリ離レテ存在スルモノニ於テモ其所見ニ大差ナシ。即、上述神經纖維各成分ノ變性ノ出現ハ神經纖維ガ腫瘍組織ト直接スルヲ唯一ノ條件トスルニハ非ザルコトナリ。

○赤松・惡性腫瘍組織増殖ノ末梢神經纖維ニ對スル態度

Dürk, Bethe, Steiner, Joffe 等)。而シテ余ハ悪性腫瘍組織ニヨル神經纖維ノ變化ニ就テ次ノ如キ場合アルヲ認メタリ。

# 1. 節狀變化 (Segmentäre Veränderung)

既ニ記載セル如ク、余ノ研究標本ノ大多數例ハ之ヲ當教室ノ剖檢例ヨリ求メタリ。故ニ神經纖維ノ檢索ニ當ツテハ貯藏、固定液ノ關係以外ニ死後時間ノ影響ヲモ考慮セザル可カラズ。從テ神經纖維ニ現ハル、節狀ノ變化ヲ以テ、直チニ腫瘍組織ニ原因スルモノナリトハ斷ズ可カラザルモノアリ。且、他種疾患ノ爲メニ斃レタルモノニ於テハ是等疾患ニ起因スル神經纖維ノ變性モアリ得ベク、凡テ以上ノ諸點ニ留意スル時ハ神經纖維ニ現ハル、此節狀變性ガ果シテ悪性腫瘍組織ニ因ルモノナルヤ、或ハ之レ以外ニ起因スルモノナルカラ區別スルハ蓋、至難ノコトナリキ。然レドモ此節狀變性ハ多數例ニ於テ最モ屢々現ハル、モノナリ。髓鞘ニ於テハ此際漸次其構造不鮮明トナリ、次デ大小種々ノ塊狀トナリ、時ニ或ハ棍棒狀トナリ念珠狀トナル。此部ニ於テハ諸種ノ染色法ニ對シテノ反應漸ク不鮮明トナルモ、其髓鞘ナルコトハ尙明カニ顯微鏡下ニ認メ得ラル、ナリ。軸索亦大小種々ノ腫脹ヲ來シ多クハ髓鞘ノ變化ニ從ツテ棍棒狀トナリ念珠狀トナルモ、神經纖維ノ連續尙斷絶スルコトナシ。而シテ是等ノ所見ハ腫瘍組織ニ接スル神經纖維ノ部分ニノミ限ラル、變化ニハ非ズシテ、腫瘍細胞群ヨリ遠ク離レテ組織學的ニハ一見何等ノ交渉ヲモ有セザルガ如キ部位ニ於ケル神經纖維ニ於テモ、尙同様ニ認メ得ルコトアリ。

以上ノ所見ハ上ニ記載セルガ如ク直チニ以テ直接腫瘍組織ニ因スルモノトノミハ斷ズ可カラズ、他

鞘片ヲ認ムルコトナク、軸索片亦求ムルニ由ナシ。Schwann氏鞘ニハ多數ノ增殖セル核ガ相連リ相接シテ存在スルヲ見ルノミナリ。

神經纖維素内ニ出血竈ノミ存シテ、腫瘍組織ヲ認ム可カラザル場合ニ於ケル神經纖維各成分ノ變化ハ腫瘍組織ニ因テ惹起セラレタル神經纖維ノ變化トハ多少趣ヲ異ニスルガ如シ。即、出血竈ニノミ因スル神經纖維ノ變化トシテハ各纖維ハ其走行正常ナラズシテ或ハ蛇行シ或ハ彎曲スルモ、軸索及ビ髓鞘ニ於テ其等ノ腫脹斷裂等ノ像ニ接スルコトナシ。即、出血ニ因スル榮養障礙乃至機械的壓迫其他ノ作用ノ神經纖維ニ及ボス影響ハ腫瘍組織ニヨツテ起ル變化ト自ラ差異アルヲ認メシムルナリ。唯、此兩者ノ作用相依ツテ起ル時ハ、神經纖維變性ハ益々高度ノモノトナルヲ知ルナリ。

## 第五章 結論

以上ヲ總括スルニ、惡性腫瘍組織ニヨツテ侵略セラル、神經纖維變性ノ像ハ、傷害性乃至非傷害性ナル諸種ノ疾患ニ於テ見ルモノト大體ニ於テ略々同一ナリ。而シテ上記諸種ノ神經纖維各成分ノ變性ヲ起サシメタル原因ニ至リテハ單ニ之ヲ惡性腫瘍組織ニ因スル機械的壓迫乃至ハ血行障礙等ノ結果トノミ見ル可カラズ。即、惡性腫瘍細胞ニ因ル一種ノ毒素的物質ノ作用ニヨツテモ尙ホ纖細ナル神經纖維ハ諸種ノ變性ニ陥ルコトヲ認知セシム。蓋、惡性腫瘍組織ノ周圍又ハ其ニ直接セル神經纖維ニ於テハ、是等細胞群ノ物理學的乃至化學的作用共ニ相依ツテ益、其變性ヲ強ムルト共ニ、是等ノ變化ハ又其部位ヨリ末梢部乃至中心部ニ向ツテ其神經纖維變性ヲ廣ク傳播シ得ルモノナリト信ゼラル。

○赤松・惡性腫瘍組織増殖ノ末梢神經纖維ニ對スル態度

### 三、1、軸索顆粒狀變性

神經纖維ノ變性高度トナレバ軸索ハ次第ニ萎縮ニ陥リ、遂ニ大小種々ノ斷片トナル。而シテ此際上記腫瘍部ノ連續ガ愈々萎縮シ、遂ニ斷裂ニ陥レリト認ムベキモノ多シ。小斷片ハ細長キ紡錘形トナリ、又ハ其他種々ノ形態ヲ取ルコト既ニ記載セル如シ。

軸索ノ變性更ニ強度トナレバ、是等大小ノ軸索斷片乃至小顆粒ハ全ク其鍍銀調ヲ消失シテ髓鞘中ニ見ル可カラザルニ至ルナリ。

### ロ、髓鞘顆粒狀變性

髓鞘ニ於テモ其變性高度ニ至レバ略々軸索ノ斷裂ニ一致シテ大小ノ斷片トナル。此場合ニ於テ髓鞘片ハ尙ホ其蜂巢狀構造ヲ認メシムルモノアレドモ、其構造極メテ不正ニシテ、本田氏法ニ從ヘバ「ヘマトキシリン」ノ染色ハ更ニ不良トナル。然レドモ是等ノ髓鞘片中ニハ軸索片ノ斷裂シテ尙ホ認メ得ラル、モノアリ。脂肪顆粒ハ其數ヲ増シ、大サ大トナリ、斷裂セル髓鞘中ニ略々瀰漫性ニ存在スルヲ認メシム。而シテ軸索ニ於テハ其斷端一般ニ銳尖ナレドモ、髓鞘ノ斷端ハ常ニ不正ナル凸凹アル平面ニ於テ限界セラレ、其末端ニ脂肪顆粒ノ殊ニ比較的多數ニ認メラル、場合アリ。

髓鞘ノ變性更ニ強度トナレバ、其斷片ハ益々萎縮シ、微細ナル顆粒狀トナリ、「ヘマトキシリン」ノ色調殆ド見ルベカラズシテ、唯一様ナル無構造ナル「ズダン」Ⅲノ色調トナル。所ニヨリテハ髓鞘片ノ周邊部ノミガ強ク「ズダン」Ⅲノ色ニ富ミ、中央部ニ於テ透明無色ノモノトナルガ如キコトアリ。

Schwann 氏鞘核ハ此時期ニ於テ著シク増殖シ神經纖維ノ變性愈々強度トナレバ Schwann 氏鞘中髓



- nach Verletzungen, Ziegler's Beiträge, Bd. 26. 21) **Ingebrigtsen**, Studies of the degeneration and regeneration of axicylinders in vitro, Journal of exper. Medicine, Vol. 17, 1913. 22) **Gregoris**, Über die Pathologie der Achsencylinder peripherer Nerven bei primärer und sekundärer Degeneration nach der Ernstschen Methode der Nervenfärbung, Ziegler's Beiträge, Bd. 45, 1909.
- 23) **Ernst**, Über das Wachstum und die Verheilung bösariger Geschwülste, insbesondere des Kretzes in den Lymphbahnen der Nerven, Ziegler's Beiträge, VII Suppl., 1905. 24) **Benecke**, Über die histologischen Vorgänge in durchschnittenen Nerven, Virchows Archiv, Bd. 55. 25) **Marshall**, Cancer and cancerous diseases, The Lancet, 1889. 26) **Daniels**, Über das Stromata in Sarkomen, Virchows Archiv, Bd. 105. 27) **Heidenhain**, Über Entstehung und Bedeutung der kleinzelligen Infiltration bei Carcinomen, Virchows Archiv, Bd. 129. 28) **Roth**, Beiträge zur Kenntnis der varicösen Hypertrophie der Nervenfasern, Virchows Archiv, Bd. 55. 29) **Huber**, Über das Verhalten der Kerne der Schwannschen Scheide bei Nervenregeneration, Archiv für mikroskopischen Anatomie Bd. 40, 1892. 30) **Galeotti** und **Levi**, Über die Neubildung der nervösen Elemente in dem wiedererzeugten Muskelgewebe, Ziegler's Beiträge, Bd. 17. 31) **Schmidt**, Die Verheilungswege der Karzinome und die Beziehung generalisierter Sarkome zu den leukämischen Neubildungen, Deutsche med. Wochenschrift, Nr. 41, 1906. 32) **Poscharisky**, Über die histologischen Vorgänge an den peripherischen Nerven nach Kontinuitätsrennung, Ziegler's Beiträge, Bd. 41, 1907. 33) **v. Beckinghausen**, Über die multiplen Filrome der Haut, Berlin, 1882. 34) **Nageotte**, Note sur la croissance des appareils de Schwann à l'extrémité proximale du bout périphérique des nerfs sectionnés, lorsque la régénération a été rendue impossible, Comptes rendus de la société de biologie, 75, 1913. 35) **Kaufmann**, Statistik und Kasuistik metastatischer Tumoren, besonders der Cardiometafasen im Zentralnervensystem, Deutsche med. Wochenschrift, Nr. 15, 1906.
- 36) **Ballance**, Some points in the surgery of the brain and its membranes, London, 1907. 37) **Walter**, Über die fettige Degeneration der Nerven nach ihrer Durchschneidung, Virchows Archiv, Bd. 20. 38) **Wolberg**, Kritische und experimentelle Untersuchungen über die Nervenmahl und Nervenregeneration, Deutsche Zeitschrift für Chirurgie, Bd. 18-19. 39) **Senn**, Pathology and surgical treatment of tumors, Philadelphia, 1900. 40) **Aoyagi**, Beiträge zur pathologischen Anatomie des Nervensystems und des Muskels bei Beriberi, 東京帝國大學醫科大學紀要, 第九冊. 41) **Hammer**, Ein experimenteller Beitrag zur Frage der peripheren degenerativen Neuritis bei Tuberculose, Habilitationsschrift, Heiderberg, 1898. 42) **Kremer**, Versuche



而シテ癌腫及ビ肉腫組織ニ因ツテ侵サル、神経纖維變性ノ程度ヲ比スルニ、概シテ癌腫組織ニ因ルモノハ肉腫組織ニ因ル場合ニ比シテ、ヨリ高度ナルヲ認メシム。即、癌腫細胞ノ生物學的性質ハ肉腫細胞ノソレニ比シテ有害ノ影響ヲ神経纖維ニ及ボス度、更ニ大ナルモノ、如シ。

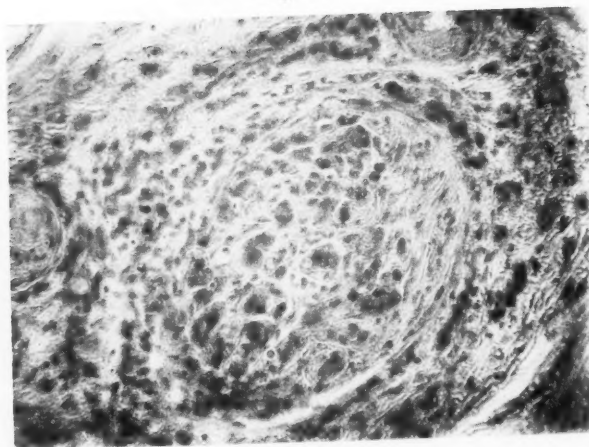
(大正八年二月二日記)

# 主要ナル文献

- 1) 藤澤, 癌腫ノ病理(癌腫組織ノ増殖) 東京醫學會雜誌. 第十九卷. 第十二號. 2) 今, 腸管ニ於ケル悪性腫瘍増殖ニ關スル組織學的研究所遺. 東京醫學會雜誌. 第十七卷. 第一號. 3) 今, 悪性腫瘍ノ骨ニ侵入スル關係ニ就テ. 東京醫學會雜誌. 第十九卷. 第二號. 4) 菊池, 悪性腫瘍組織ノ血管ニ對スル態度. 東京醫學會雜誌. 第二十八卷. 第一號. 5) 田中, 悪性腫瘍血管ニ就テ. 癌. 第一年. 第一號. 6) 東, 諸粘膜彈力纖維ト癌腫發生方向トノ關係. 中外醫事新報. 第五百五十五號. 7) 木村, 非傷害性神經變性及ビソレヨリナル再生機構. 中外醫事新報. 第八百五十九號. 8) 木村, 末梢神経變性. 神經學雜誌. 第十四卷. 第四號. 9) 鹿島, 中樞神経系統及視神經ニ於ケル神經纖維ノ病的變化ニ就テ. 日新醫學. 第七年. 第八號. 10) 本田, 間氣病理追加. 東京醫學會雜誌. 第三十一卷. 第二十三號. 11) 飯田, 泉井内ニ於ケル神經ニ就テ. 日新醫學. 第五年. 第二號. 12) 竹内, 血管内進入腫瘍細胞ノ運命ニ就テ. 癌. 第十一年. 第三冊. 13) Fujimami, Über das histologische Verhalten des quergestreiften Muskels an der Grenze bösartiger Geschwülste, Virchow's Archiv, Bbl. 161. 14) Goldmann, Die Beziehungen des Gefäßsystems zu den malignen Neubildungen, Zeitschrift für Krebsforschung, Bbl. 5. 1907. 15) Müller, Zur Kenntnis der Ausbreitung und Endigungsweise der Magen-Darm-Dankreismerven, Archiv für mikroskopischen Anatomie, Bbl. 40. 16) Young, On the presence of nerves in tumors and of other structures in them as revealed by a modification of Ehrlich's methods of "vital staining" with methylenblau, Journal of exper. Medicine, 897. 17) Perronito, Die Regeneration der Nerven, Ziegler's Beiträge, Nr. 42. 18) Joffe, Histologische und physiologische Wirkung der Druckmassage auf die Nerven, Berl. klinische Wochenschrift, Nr. 42. 1911. 19) Lapinsky, Über Degeneration und Regeneration peripherischen Nerven, Virchow's Archiv, Bbl. 181. 20) Kolster, Beiträge zur Kenntnis der Histogenese der peripheren Nerven, nebst Bemerkungen über die Regeneration desselben

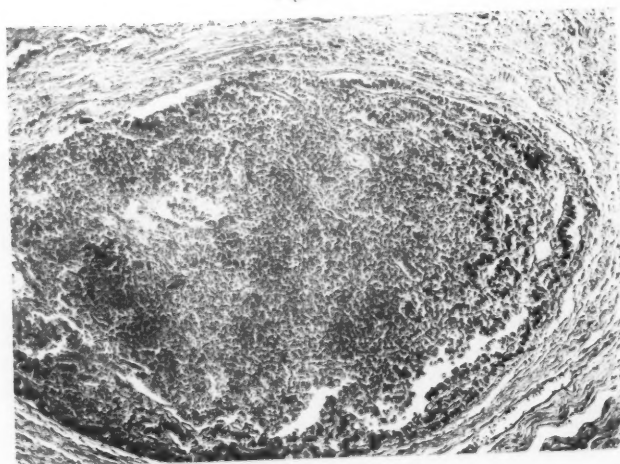
第一圖

Fig. 1.



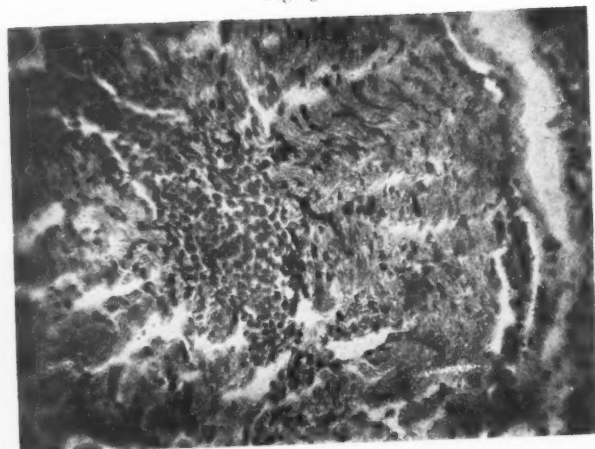
第二圖

Fig. 2.



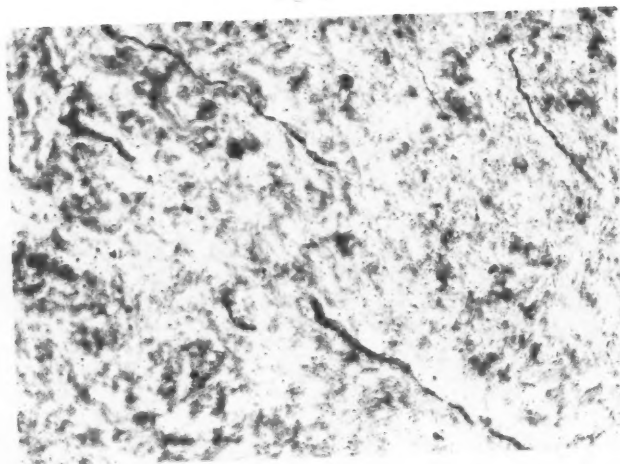
第三圖

Fig. 3.



第四圖

Fig. 4.



○赤松・惡性腫瘍組織増殖ノ末梢神經纖維ニ對スル態度

一三四

über Perineuritis purulenta, Inaugural-Dissertation, Dorpat, 1889. 43) Rosenbach, Experimentelle Untersuchungen über Neuritis, Archiv für experim. Pathologie und Pharmacologie, Bd. 8. 44) Aschner, Über den Einfluss der Innervation auf das Tumorzachstum, Zeitschrift für Krebsforschung, Bd. 13, 1913.

### 附圖説明

第一圖 南氏、胃癌、胃壁ニ於ケル神經纖維索ニ侵入セル腫

瘍組織、「ヘマトキシリン・エオジン」染色、強擴大、

第二圖 平岡氏、腺癌、迷走神經纖維索内ニ侵入セル腫瘍組織

「ヘマトキシリン・エオジン」染色、弱擴大、

第三圖 岡本氏、小圓形細胞肉腫、腹膜後部淋巴腺ニ於ケル轉

第四圖

移竄周圍部ニ於ケル神經纖維索ニ於ケル腫瘍組織、

「ヘマトキシリン・エオジン」染色、強擴大、

和田氏、纖維肉腫、腫瘍組織ニヨリテ侵略セラレタ

ル神經軸索、Bielchowsky 氏鍍銀染色、強擴大、

## 第十一回癌研究會學術集談會演說抄錄

### 一 「オルビトバークス、バラジチクス」ニ就テ

長 由 勝 芳(京都)

嘗テ水尾氏(明治四十一年)、生後五十餘日ノ男兒ノ左眼窩ニ發生セル非相稱的重複畸形ヲ報告シ、之ニ表題ノ如キ命名ヲナセリ。著者ハ、本年一月中此同一患者ニ於テ、該腫瘍ノ一部分、尙ホ眼窩内ニ殘存セルヲ認め、鶏卵大ノ腫瘍ヲ除去シ、此ノ組織的檢索ヲ行ヒ腸管、腸間膜、腸間膜淋巴腺、之ニ附隨スル神經血管等ヨリ成立スルコトヲ證セリ。水尾氏ノ報告中ニ記載セル臍帶樣蒂莖ハ、即チ腹部内臟ノ一部突出セルニヨリ成レルモノニシテ、此ノ尖端ガ下眼窩裂孔ノ附近結締組織ニ癒著シ居タルモノナルヲ證セリ。文獻ニ徵スルニ、眼窩畸形腫殊ニ雙胎ノ稀有ナルコトヲ述ベ、此ノ標本ヲ供覽セリ。

### 二 植物ニ於ケル腫瘍類似ノ新生物ニ就テ(標本供覽)

末 安 吉 雄(京都)

余ハ、米人 Erwin F. Smith 氏ガ、一九二二—一九二四年ニ互リ、詳細ニ研究報告セシ人工的植物癌ノ病原菌 *Bacterium tumefaciens* ヲ、小津學士ノ好意ニヨリテ獲タルヲ以テ、馬鈴薯、桐、梅檀ノ皮下ニ塗リスミス氏ノ記載セルガ如キ新生物ヲ生ゼシメ得タリ、之ト同時ニ自然のニ發生セシ林檎、梨、栗、松ノ樹枝ノ植物癌ヲ蒐集シ是等ノ標本ヲ供覽セリ。



二、腫瘍發育増殖ニ及ボス神經作用ノ影響如何ヲ研究セリ。

腹腔内諸臓器ニ於ケル腫瘍移植ニ關シテハ、同一個體又ハ異リタル鼠ノ脾臓、肝臓、睾丸、腎臓及胃壁ニ細織ナルト

ロアカールヲ以テ大約粟粒大ノ腫瘍片ヲ移植ス。

其ノ移植陽性率ハ睾丸ニ於テ最も低ク、胃壁、腎臓ハ可ナリニ高ク、脾臓、肝臓ニ於テハ共ニ高率ヲ示シ、其間大ナル軒輊無シ、移植腫瘍増殖ノ遲速ニ關シテハ、臓器内發生腫瘍ハ皮下移植腫瘍増大ノ速度ヨリモ小ナリ。然レドモ脾臓ニ發育セルモノト肝臓ニ於ケルモノト大サヲ較レバ孰レモ良好ニシテ大ナル差異ヲ表サズ、睾丸ニ於ケルモノハ一般ニ最小ニシテ、其他ノモノハ睾丸ノモノヨリ大ナリ。斯クノ如ク脾臓ニ於ケル移植陽性率竝ニ其ノ増殖ノ速度ハ肝臓ニ於ケル夫レト大差無ク、他臓器ニ於ケルヨリモ移植容易ニシテ、且、發育佳良ナルヲ知レリ。演者ハ曩ニ脾臓別出動物ニ於ケル腫瘍移植試驗ノ結果ニ依リテ、或論者ノ『脾臓内腫瘍移植ハ困難ナリ。脾臓組織ハ腫瘍發育ヲ阻害ス。脾臓別出ハ腫瘍移植ノ陽性率ヲ高メ發育ヲ促進ス、從テ脾臓ハ腫瘍免疫ニ至大ノ關係ヲ有ス』トノ所說ニ對シ疑惑ヲ置キシガ、本實驗ニ依テ倍々該所說ノ重キヲ措クニ足ラザルヲ知レリ（少クトモ是等鼠肉腫ニ於テハ）増殖ノ態度ハ主トシテ擴大性ナルモ所ニヨリテハ交代性、浸潤性ヲ示ス。是ヲ以テ觀レバ腫瘍ノ擴大性増殖、浸潤性増殖ト云フモ、腫瘍個々ノ特性ニ非ラズシテ段階的移行的ノモノナルヲ知ル可シ。周圍組織ノ反應性變化ニ就テハ周圍組織ハ一般ニ血管充盈シ、出血ヲ伴ヘリ。遊走細胞浸潤輕少ニシテ結締組織細胞新生ハ皮下移植ニ際シテハ旺盛ナルヲ常トスルモ、臓器内移植ニテハ脾臓ニハ殆んど之レヲ缺キ、腎臓、肝臓ニハ時トシテ之レヲ見、胃、睾丸ニハ每常之レ有リ。周圍組織ノ輕微ナル壞死ハ常ニ存ス、睾丸ニテハ常ニ其度強シ。斯ク臓器内移植ニ際シテハ皮下移植ニ於ケル時ヨリモ結締組織新生微弱ナルハ、後者ニ於テハ血管疎ナルヲ以テ結締組織新生シ毛細血管形成セラレ初メテ移植片ヲ養フモ、實質性臓器ニテハ移植地ノ血管密ナルヲ以テ之ノ要ナシト。然レドモ實質臓器ニテモ腎臓、睾丸ノ如キ新生腫瘍ノ邊緣ニ於テ時

### 三 血管肉腫ノ如キ所見ヲ有スル癌腫ニ就テ

古 川 利 三(福岡)

癌腫發育形式ニ種々アリ。余ノ檢索セルハ、鏡下ニ於テ特ニ血管周圍ニ發育シ、所謂血管肉腫ノ如キ像ヲ呈セル例ナリ。

第一例 右肺上葉ノ原發性癌

第二例 胃癌ニシテ肝竝ニ腹膜及ビ腸間膜淋巴腺轉移ヲ有スルモノ。

第三例 腸間膜淋巴腺ニ轉移ヲ有スル胃癌。顯微鏡的所見ハ同一例ニアリテモ、切片ヲ作ル部位ニ依リテ、必ズシモ同一ノ構造ヲ示スニアラザルモ、各例共ニ等シク諸所ニ於テ甚ダ血管ニ富有ニシテ腫瘍細胞ガ特ニ其周圍ニ特別ノ形ヲナシテ群集セルハ、該血管ノ外被細胞ヨリ増殖生成セル感ヲ呈シ、一見血管肉腫ニアラザルヤト想ハシメ余ノ興味ヲ喚起セシメタル點ナリ。サレド精細ナル觀察ヲナス時ハ尙ホ他ノ部ニ於テ著明ナル癌腫ノ構造ヲ示スヲ以テ、元來ハ癌腫ニシテ却テ癌腫細胞ガ特ニ血管ノ周圍ニ群集増殖シテ斯クノ如キ所見ヲ呈セルモノナラント察知セシム。

### 四 鼠肉腫ノ移植増殖ニ關スル知見補遺

藤 繩 喜代 藏(神戸)

歐洲種及ビ本邦種鼠肉腫ニ就テ次ノ二實驗ヲ施セリ。即、

一、腹腔内諸臟器ニ腫瘍ヲ移植シ、其臟器ノ如何ニ由リテ生ズル。腫瘍移植ノ難易、移植腫瘍増殖ノ遲速及其ノ態度、周圍組織ノ呈スル反應性變化ノ差異等ヲ觀察檢索シ、

植ヲ疊加シテ、將ニ三十世代ニ達セリ。此間腫瘍構造ニ多少ノ興味アル變遷ヲ來セリ。其轉化シタル當時ノ腫瘍組織の構造ハ、圓形細胞、紡錘形細胞或ハ不正形細胞等ヨリナル所謂多形性細胞肉腫ナリシモ、漸次移植ヲ疊加スルニヨリテ組織構造ハ分類ヲ來シ、而シテ是等分類シタルモノヲ各別個ニ疊代移植スルコトニヨリテ、略々統一シタル腫瘍型ヲ來セリ。今日ニ於テハ、圓形細胞肉腫、紡錘形細胞肉腫、巨大細胞肉腫、粘液肉腫、纖維肉腫等ノ諸腫瘍型ヲ發顯セリ。以上ノ實驗ニヨリテ、人類ノ肉腫ヲ推考スルニ、從來肉腫ノ分類ハ數種アレドモ、是等ハ畢竟肉腫發生ノ根源ヲ異ニセルモノニハアラズ、寧ろ腫瘍ヲ發生スル個體ノ性質(例之動物ノ抵抗力、營養、發生スル部位ノ周圍的關係、腫瘍原基ノ分化ノ程度等)及腫瘍發生ノ動機又ハ増殖ノ變調等ニヨリテ、斯ク各々異ナル形態ヲ發現シ來ルモノト推定ス。何トナレバ、余ノ實驗の事實ニ徴スルモ、同一腫瘍系ヨリ其移植世代ノ疊加ニヨリ、多數ノ動物個體ヲ通過スル間ニ於テ、各種組織形態ノ異ナレル腫瘍型ヲ得タレバナリ。

猶奇ナル現象トシテハ、腫瘍組織内ニ圓柱上皮ヲ附麗スル管狀腺ヲ發現シ、腺肉腫ト看做スベキ組織構造ヲ呈セルモノアリ、是等ハ考フルニ、腺纖維腫時代ノ腺上皮細胞ハ一定時其性能ヲ潛伏シ、後再ビ腺形成ヲ營ムノ機會ニ到達シタルモノナラズヤトノ考ヲ有ス。

幼弱動物ノ發育ニ對シ、諸種ノ刺激ヲ要スルモノナラントノ考ハ、從來ヨリ説明セラル、所ナリ。例之哺乳動物ノ子宮内ニ存スル胎兒ハ、明ニスノ如キ刺激ヲ要スル者ナルガ如シ。猶自カラ榮養物トナリ得ザル諸種ノ化學的物質ガ發育増生ノ機轉ヲ刺激シ得可キモノト推考セラレ。動物ニ於テ斯クノ如キ實驗ハ、尙多カラザレドモ、就中人ノ熟知セルハ「レチチン」ニシテ Danilewsky, Desjrey, Zaky, Hatai 等ノ實驗アリ。茲ニ於テ、余ハ「レチチン」ノ如キ幼弱又ハ未分化ノ生體組織ヲ刺激シテ、發育増生ヲ促ス化學的物質ハ、腫瘍殊ニ肉腫ノ如キ未分化ノ態度ニアル組織移植ニ際シテ、如何ナル關係ヲ有スルモノナルヤヲ知ラントシ、或ハ移植性能ヲ増加スルナキヤ、又ハ腫瘍發育増生ニ影響ヲ及ボス



トシテ可ナリニ強盛ナル結締組織細胞ノ新生アリ。殊ニ腫瘍ノ發育阻止又ハ一部壊死ニ陥レバ旺盛ナル結締組織新生ヲ見ル。由是觀之、腫瘍移植時ニ發現スル結締組織ハ一面ニ於テハ腫瘍ノ發育ヲ援助シ、他面ニ於テハ發育防禦ノ作用ヲ營ムモノナルヲ知ル可シ。

腫腸増殖ニ及ボス神經作用ノ影響如何ヲ知ランガ爲メ左側坐骨神經ヲ臀部ヨリ切除シタル脚ト、左側健側脚トニ腫瘍片ヲ移植シ其ノ發育増殖ヲ比較セリ。其ノ結果ニ由レバ、神經切除ハ急速ニ増大スル鼠肉腫ノ發育ニハ何等ノ影響ヲ認ムル能ハズ。(自抄)

## 附 議

木 村 男 也

只今、神經ヲ切ツテ移植サレタ御成績ヲ御發表ニナリマシタ故一言追加サシテ戴キマス、私ハ家鶏肉腫(京都種)ヲ移植シマス際ニ成就鶏ノ淺在<sup>レ</sup>、若クハ深在腓骨神經ヲ切ツテ、移植片デソノ中樞切斷端ヲ包ム様ニシテ置き、放養シマスト三乃至四、五ヶ月モシテ急ニ腫瘍ガ發育シテ大トナリマス、非常ニ大トナツタモノデハ神經ノ關係ガ不明ニナリマスケレドモ一例デハ中樞端ガ腫瘍トヨク癒著シ恰カモ、水瓜トソノ蔓トノ如キ狀ヲ示スモノガアリマシテ神經ノ間質組織ト腫瘍組織トガ親密ナ關係ヲ保ツテ居リマシタ。惡性腫瘍内、殊ニ移植シタモノ、中ニ、普通デハ神經ガ全然存在シナイノハ私モ勿論認メマスケレドモ肉腫ノ様ナモノ、中ニ神經纖維ノ成分ガ絶對的ニ進入、生長シ得ザルヤ否ヤハ將來ニ於テ研究ス可キ事ト思ヒマス。

## 五 大鼠ノ人工肉腫移植ニ由ル組織的變遷及レ

## チチン注射ト移植トノ關係ニ就テ

梅 原 信 正(京都)

昨年ノ本學會ニ於テ報告シタル大鼠ノ腺纖維腫ヨリ、人工的ニ轉化セシメタル肉腫ハ、頗ル可移植性ニシテ、漸次移

ナリ。

原種ハ、白色「レグホルン」種中、雌鶏ノ左胸筋内ニ存在スル手掌大ノ扁平橢圓形ノ新生物ニシテ、右肺ニ一箇小豆大ノ轉移竈ヲ認ム。組織學的腫瘍ハ、大體紡錘形細胞ヨリナリ、ソノ間處々限局性ニ粘液化ヲ呈ス、轉移竈ニ於テモ、略々同様ナリ、爲ニ原種ハ大體粘液形成ヲ伴フ紡錘形細胞肉腫ト稱スベキモノナリ。

昨年七月十四日原種死亡セシ爲、之レヲ二羽ニ移植シタルニ、初メ移植個數八箇ノ中五箇ハ増大ノ傾向アリシガ、十  
七日目ニ一羽ノ二箇ノミ陽性トナレリ、而シテソノ後第三世代ハ四二%ノ陽性ヲ示シ、以後ノ世代ハ殆ンド全部陽性  
ニシテ、現今十二世代ニ至レリ、本腫瘍移植後陽性トナルノ日數ハ、平均八一十一十四日ニシテ、移植經過中内臟へ轉  
移竈ヲ形成シタルモノ一例モナシ、而シテ移植シテ得タル腫瘍ハ、肉眼上ハ全ク原種ト同一ナリ。

特別要約ニヨル移植試験ハ、諸所試ミタレドモ、老雞、病雞、筋肉内移植、靜脈内注射何レモ大多數陽性ヲ呈シタリ。  
「グリセリン」浸漬材料移植試験ハ、五〇%再溜「グリセリン」ニ五日間浸漬セルモノハ五〇%陽性、同様二十五日間ノ  
モノハ陰性ニ終リタリ。三〇%「グリセリン」ニ、十日間及二十日間入レシモノハ、各全部陽性、二十五日間浸漬シタル  
モノハ八箇ノ中一ヶ所陽性ヲ呈シタリ。

乾燥末移植試験ハ、三十時間及百六十八時間乾燥セシモノハ、全部陽性、十日間ノモノハ約二七%十日間乾燥シ四十  
一日間暗處ニ置キタルモノハ、二羽ノ中、一羽ノ一ヶ所ハ明ニ陽性ヲ呈シタリ。八日間乾燥セシモノヲ靜脈内注射セ  
シニ、一羽ハ肝臟及肺臟ニ腫瘍形成ヲ認メタリ。

濾過試験ハ濾過紙濾過液ヲ二羽皮下ニ注射シ一羽ハ、確ニ陽性ヲ呈ス。又第十世代ニ相當スル材料ヨリバルケヘルド  
濾過器ヲ以テ濾過シタル濾液約五〇銑宛々幼雞十羽ニ皮下注射シタルニ、二十三日目ニ三羽ハ陽性ヲ呈シタリ。  
移植シ得タル腫瘍ハ、尋常移植特別移植共何レモ、組織學的ニハ粘液形成ヲ伴ヘル纖維肉腫ナリ。

ナキヤトノ考案ヲ有シ、其實驗ニ著手セリ。(實驗)〇・〇一%ノ純「レチチン」水溶液ヲ製シ、之ヲ豫メ腫瘍移植ヲ行ハントスル大鼠ニ、一日一・〇乃至二・〇ノ皮下注射ヲ各種ノ時日ニ於テ連續シテ施シ、然ル後ニ腫瘍移植ヲ行テ其成績ヲ對照移植ノモノト對照シ、又一方ハ移植後モ連續注射シテ其成績ヲ對照スルニ努メタリ。

以上ノ實驗ニ供シタル動物數ハ、十五試驗列ニ於テ四百五十餘頭ヲ使用シ、次ノ成績ヲ得タリ。

「レチチン」注射ノ回数多キモノ程腫瘍移植性能ヲ減退シ、三十回以上ノ注射ヲ施行シタルモノハ殆ド腫瘍移植ニ成功セズ。又移植陽性ヲ呈シタルモノハ、腫瘍ノ發育増生稍々急速トナリ。且早期ニ於テ壞死軟化ヲ來シ、表面皮膚ヲ破壊シテ潰瘍ヲ形成シ、或ハ轉移形成ヲ早期ニ營ムモノ多シ。次ニ鼠體ノ榮養狀態ニ於テハ、「レチチン」注射ハ始メ七日間位ハ漸次鼠體ノ體重増加ヲ來スモノナルモ十日以後ニ於テハ漸次注射回数ノ増加スルニ從テ其體重ノ減少ヲ來シ、二十回乃至三十回以上ニ及ブモノハ著シク羸瘦ノ狀ヲ呈スルモノナリ。

余ハ以上ノ實驗ノ外猶京都大學病理學教室ヨリ、大鼠ノ紡錘形細胞肉腫ノ分與ヲ請ヒ得テ、同様ノ實驗方法ニヨリテ對照試驗トシテ試ミタルニ、此腫瘍種ニ於テモ亦略々同一ノ試驗成績ヲ得タリ。(白抄)

## 六 移植シ得可キ鶏腫瘍一新種(大島系)ニ就テ

大 島 福 造(名古屋)

明治四十二年藤浪博士、稻本學士初メテ家鶏ノ移植性腫瘍ヲ得ラレシヨリ以來、今日迄發見報告サレシ可移植性家鶏腫瘍ハ、十有七種ニ及ベリ。我教室ニ於テハ、大正三年林系、同四年武藤系ヲ得テ研究ノ資料トセリ、然ルニ余ハ最近新ニ毒性ノ弱キ可移植性家鶏腫瘍ヲ得、林博士ヨリ大島系ト命名サレタル一新系統ニ就キテ報告セントス。勿論一可移植性腫瘍、敢テ珍奇トスルニ足ラザレドモ、比較實驗ノ資料ヲ加フル事ハ、腫瘍學ノ爲又徒勞ニ非ズト信ズレバ

肉腫材料注入ニヨリ惹起シ得タル變化ト看做ス可クシテ、最も興味ヲ感ジタリ。然レドモ此靜脈内注射試驗ハ、目下研究續行中ナレバ、詳細ナル所見ニ就キテハ後日機ヲ得テ報告スル處アラントス。(自抄)

## 七 移植シ得ベキ鶏腫瘍(武藤系)ノ異種鳥類移植試驗ニ就テ

向山孝之(名古屋)

輒近我國ニ於ケル腫瘍學殊ニ動物腫瘍ノ研究ハ長足ノ進歩ヲ示シ何處ノ研究室ニ於テモ之レニ手ヲ染メザル處ナキノ盛況ヲ呈セリ。

一般ニ動物ニ於テ何レノ階級、何レノ種族ニモ腫瘍發生スルハ明カナル事實ニシテ之レニ關シテハ大正四年十月藤浪博士ハ日新醫學上ニ比較腫瘍學一斑トシテ記載セラレタリ、又山極市川兩博士等ノ人工的癌腫發生ニ關スル研究ハ斯界ニ於ケル實驗的業績ノ偉大ナルモノナリ。

現今腫瘍比較病理研究ノ好材料トナレルハ鶏類及鼠族ニ發生セル腫瘍ニシテ就中可移植性ノモノ多數發見セラレ非移植性ノモノハ殆ド數フルニ遑ナキノ狀況ナリ。

可移植性腫瘍中鼠癌ハ廣ク研究セラレ其ノ移植ハ種屬ヲ異ニスル鼠ニハ移植不可能ナリト唱ヘラレ嘗テ本多博士英國ヨリ輸入セラレタル「マウス」癌ハ英國產「マウス」ニアラザレバ移植不可能ナルカ或ハ難ナリト云ハレ又最近發見セラレタル梅原氏鼠肉腫モ亦異種「ラット」及他動物ニ移植不可能ナリト記載セラル、尙ホ余モ嘗テ家鼠頸部發生小鶏卵大ノ淋巴細胞肉腫ヲ得テ白鼠「ラット」ニ移植シ陰性ニ終レリ、其後武藤氏ト共ニ家鴨翼發生ノ腺肉腫ヲ鶏ニ移植シ不成功ニ終レリ、或ハ我教室ニ於テ武藤系肉腫ヲ猿、鼠等ニ白血球減少症ヲ起サシムベク脾臟剔出後更ニX光線放射ヲ行ヒ腫瘍移植ヲ行ヒタルニ陰性ニ終リシ事アリ。米國ニ於テルース氏ハ鶏肉腫ハ鶏種ヲ異ニスルニヨリテ既ニ其ノ可移

大正二年林博士ハ、京都系鶏肉腫ノ濾過試驗ニ成功セルヨリ以來、家鶏肉腫ノ中ニハ何物カ生活セル久微小體ナルモノ存在シコノモノガ、周圍ノ細胞ニ加働シテ腫瘍ヲ形成スルモノナリト明言セラレタリ。余ノ系統ニ於テモ、長時日ニ互レル乾燥或ハ「グリセリン」浸漬片移植猶絕對ニ細菌ノ發育セズ、又沈澱検査上何物ヲモ得ルコト能ハザリシベルケヘルド濾過液注射ニヨリ、猶腫瘍ノ發育シ來ルハ、京都系、武藤系等ニヨリ證明サレタルガ如ク、本系統腫瘍ニ於テモ何物カ濾過性久微小體ナルモノ、存在テ絕對ニ認定セントスル處ナリ。

本系統ノ毒力ニ就キ、京都系、武藤系ト比較スルニ、尋常移植ニ於テ、京都系ハ五乃至七日ニシテ陽性成績ヲ呈シ、武藤系ハ六乃至九日、本系統ニ於テハ八―十一―十四日ヲ要ス、又濾過液注射ニヨリテハ京都系ハ十四乃至二十日、武藤系ハ十四乃至十六日、本系統ニ於テハ二十三日ニシテ陽性成績ヲ呈ス。ソノ發育増殖ノ程度ヲ武藤系ニ比スルニ増大ノ度著シク遅ク約二分ノ一ノ増殖力ヲ有スルヲ推知シタリコレガ本種ノ最モ特徴トスル所ナリ。茲ニ於テ從來吾人ノ有スル種々ノ肉腫系統ヨリモ毒力ノ弱キ本系ヲ以テ猶之レガ毒力ヲ減弱シ靜脈内ニ注射セバ何物カ得ルナランカトノ考按ノ下ニ大正七年十二月五羽ノ幼鶏ヘ約九十五日間乾燥セシ粉末一〇瓦ヲ食鹽水一八・〇託ニ混ジ三・〇託宛靜脈内ニ注射シ斃死ニ至ル迄放置シタリ而シテ諸々ノ變化ヲ得タリ。

コノ五例ノ變化ハ何レモ生前ヨリ存在セシモノニ非ザル事ハ是等鶏ハ皆幼鶏ニシテ又對照鶏二羽何等斯クノ如キ變化ヲ認メザレバナリ。是等所見ヲ總括シ分類スレバ、第一、二及四例ノ血管周圍ニハ高度ノ細胞浸潤又往々組織内ニ細胞ノ集團ヲ生ジ、盛ニ細胞増息ヲ呈シ、且ツ第四例ノ如キハ肉眼の組織學の所見及血液検査上白血球數ノ著シク増加セル事ハ、白血病乃至假性白血病様ノ像ト見ルベシ、又第二類變化ハ、多數ノ造結締細胞ノ存在及微細結締組織ノ新生ニシテ、殊ニ第一例ノ如キハ全ク肝硬變症初期狀態樣變化ト看做ス可ク、第三類ノ變化トシテハ、第二例ノ膽管上皮ノ増殖、第五例ノ膽管増殖及實質肝細胞ヨリ、上皮性細胞ノ分裂増殖シタル像ナリトス、是等ノ變化ハ、何レモ

處ナシ然レドモ轉移形成ニ關シテハ余ノ場合移植後ノ日淺キガ故ナルベク、腫瘍ノ爲メ惡液質ヲ來シ衰弱死ニ至ラシメ  
ンカ轉移瘤形成ハ之レアルベキヲ豫想スルモノナリ。

紋上ノ實驗ニ據リ武藤系肉腫ハ鶏ニ移植シ得タリ、更ニ鶏ヨリ鶏ニモ移植シ得ルモノニシテ米國ルース氏成績ノ如キ  
鶏種ノ異ナルニ從ヒ移植不可能ナリト稱セラル、ニ異リ我ガ名古屋ニ於テハ然ラザルヲ證明シ鶏腫瘍ニ於テハ血族的  
關係ノ稀薄ナルヲ意味シ此場合林博士ガ腫瘍形態學的診斷ハ根據ナキヲ唱ヘラレシ事及最近加藤學士ノ所謂腫瘍組織  
形態學的變遷ノ狀態ヲ明カニ示スモノニシテ移植ニ用ヒタル武藤系腫瘍ハ粘液肉腫ナリシニモ拘ラズ鶏移植ニ依リ粘  
液ノ性狀ハ弱度トナリ主トシテ方錐形細胞肉腫ノ象ヲ呈シ圓形細胞ノ如キハ腫瘍塊周圍ニ近キ發育中心ト稱セラル、  
處ニ於テノミ認メタリ、更ニ移植後ノ發育増殖ノ狀態ハ已ニ述ベタルガ如ク極メテ緩徐ニシテ發育上ニモ差異現ハレ  
毒力ノ度ヲ減ジタルノ觀アラシム。此他腫瘍組織粉末移植及靜脈注射等ハ目下試驗中ニ屬シ且ツ本試驗ガ未ダ初步ナ  
ルヲ以テ充分ノ成績ヲ舉グルヲ得ズ向後ノ研究ヲ待チ更ニ報告セントス。(自抄)

## 八 家鶏腫瘍ノ移植増殖ニ關スル知見補遺

加藤 竹 男(京都)

家鶏ノ可移植性腫瘍ノ移植ニ由リテ移植腫瘍組織ノ増殖生長ヲ繼續スルコトガ、常ニ唯腫瘍細胞自身ノ増殖生長ニ  
ミ依ルモノナリヤ、又ハ被移植宿主ニ於ケル移植腫瘍片周外ノ身體組織モ亦之レニ添加シ得ルコト有リヤノ問題ハ、  
是レ腫瘍増殖ヲ論究スル上ニ重大ナル意義ヲ有スルモノナリ。

余ハ自己ノ發見ニ係ル諸種ノ可移植性家鶏腫瘍ヲ他鶏ノ皮下或ハ特ニ翼骨(上膊骨)ニ移植シテ其増殖生長ニ就キ考究  
シタリ。

植ヲ失フモノナリト述ベラレタリ。斯クノ如ク諸家ノ研究竝ニ文獻ニ徵スルモ動物腫瘍ハ他種動物ニ移植不可能ナルハ明カニシテ諸家ノ唱フル如ク可移植性ナル事ハ其動物血族の關係ヲ重要視シ血族關係ヲ遠ザカルニ從ヒ移植%ノ少ナキハ疑フベカラザル事實ナリ、仍テ余ハ是等方向ニ關シ實驗ヲ試ミ併セテ異種鳥類移植ニ因ル移植腫瘍ノ態度變遷ヲ觀察セントス。

我教室ニ於テ現今存スル可移植性腫瘍中最モ惡性ト稱セラル、武藤系ニ於テハ他種鳥類移植成績如何トノ考案ノ下ニ之レガ試驗ヲ行ヒタリ。本移植ハ嘗テ林博士ノ試ミラレタル處ニシテ雀、鳩等ハ陰性ニシテ「チャボ」鳩ニ於テハ陽性ナリシガ當時鴉ヲ多數手ニ入ル、ヲ得ズ遂ニ中止セラレタリ。今回余亦雀、鳩、鴉ヲ用ヒ移植材料ハ武藤系第六十四代及新種大鳥系第九代ヲ以テセリ、雀、鳩ニハ共ニ陰性ナリシカバ更ニ血球減少症ヲ起サシムベキ所見ヲ施シ移植ヒシモ亦陰性ニ終リタリ。

鴉ニ於テハ大鳥系ハ目下實驗觀察中ニ屬スレドモ武藤系ハ明カニ陽性ヲ示シ八羽中六羽ハ十一日目ニ陽性トナリ此內三羽ヨリ腫瘍組織ヲ剔出シ更ニ六羽ニ移植ヲ行ヒタルニ內一羽ハ移植後十四日ニシテ陽性トナリ鴉移植系第二代ヲ得タリ、鴉第一代及第二代ノ發育狀態ヲ見ルニ増殖極メテ緩徐ニシテ武藤系ヲ直チニ鴉ニ移植セル場合ニ比シ急速ノ發育ヲナサズ硬度モ鞏ニシテ恰モ纖維腫ノ如キ觀アリ、剖檢上鴉ニ於テハ肉眼上轉移瘤ト見ルベキモノナシ。

組織學的檢査上(一)移植ニ用ヒタル武藤系腫瘍ハ一般ニ粘液化ヲ呈シ肉腫細胞豐富ナル細胞集簇セルガ如キ部位ナク所謂粘液肉腫ト稱スベキ像ナリ、(二)鴉ニ移植増殖セル腫瘍像ハ主トシテ幼若ナル結締組織細胞豐富ニシテ圓形細胞ハ腫瘍塊周圍ニ見ル發育中心ト思ハシキ處ニ群集セルヲ認ムルノミニシテ粘液化ニ陥ラントスル結締組織細胞ヲ少量認ムルノミニシテ一見軟性纖維腫ノ像ヲ呈セリ、(三)鴉第二代ハ大體ニ於テ第一代ニ類似スレドモ纖維細胞前者ニ比シ稍々多量ナル觀アリ、(四)移植ニ用ヒタル鴉各臟器ニ於テハ肉眼上已ニ轉移瘤ヲ認メザリシガ組織學上亦腫瘍ト見ルベキ

ラズ。

孰レノ試験例ニテモ對照例ニテハ唯一時的の局所性ニ假骨ヲ作ルノミニシテ腫瘍移植例ノ如ク強大ナル骨組織ノ増殖ハ決シテ見ラレズ。

如上、家鶏ニ就テ纖維腫又ハ肉腫ノ皮下移植ニ於テ周圍組織ノ附加的増殖ヲ想ハシメタル腫瘍増殖ハ、又翼骨ニ軟骨腫又ハ骨腫ヲ移植スルコトニ由リテ家鶏ニ於テハ明カニ移植腫瘍細胞以外ニ其周圍ノ被移植宿主ノ身體組織ニ於テモ移植ニ由リテ増殖セル細胞ニシテ腫瘍組織ニ添加スルコトアル事實ヲ以テ之ヲ認メラレ得可シ。且又コノ事實ハ諸種ノ家鶏腫瘍ガ各自適所ニ於テ能ク明カニ之レヲ示サレ、而シテ其適所ニ於ケル適當ナル細胞ニ加働シテ之ヲ増殖セシメ以テ腫瘍ヲ形成スル未知ノ原因アル可キヲ察セシムルニ足ルナリ。

附。余ハ尙移植腫瘍ノ生長狀態ガ神經系統ヨリ影響サル、コトアリヤ否ヤヲ試験セントシ、家鶏ノ一側ノ坐骨神經ヲ一部摘除シテ全ク麻痺ノ狀態ニ在ラシメタル脚部ニ他側ト同時ニ同様腫瘍(纖維腫、軟骨腫、骨腫)ヲ移植シ、兩者ノ生長狀態ヲ多數ノ試験例ニ就キテ逐日相比較檢査シタルニ余ハ兩者ノ間ニ著差ヲ認ムルヲ得ザリキ、即、兩者殆同大ヲ呈スルモノ、或ハ試験側ノ大ナルモノ、或ハ其小ナルモノアリ、又兩者共ニ移植シ得ザリシ例モアリ。其發育ノ大小差異ハ寧ろ個體ニ關スルコト大ナルヲ知レリ。(自抄)

## 九 可移植性家兎肉腫

家兎ノ腫瘍發生ハ由來稀有ナリ。殊ニ其可移植性腫瘍ニ至リテハ文獻上唯シユルチエ氏(千九百十三年)ガ大形圓形細胞肉腫ノ移植試験例ヲ見ルノミ。本邦ニ於テハ家兎ノ可移植性腫瘍移植試験報告ノ如キ余未ダ全ク之ヲ聞カズ。

〇抄 錄

加 藤 竹 (男(京都))



余ハ嘗テ家鶏纖維腫ヲ他鶏ノ皮下ニ移植シ、其移植組織ノ増殖ト共ニ移植腫片周圍ニ帶層狀ニ組織ノ附加増殖ヲ呈セル例ヲ屢々實驗セリ。又粘液肉腫移植例ニ於テモ、其増殖ガ唯常ニ移植腫瘍自身ノ増殖ニノミ因ラザルコトヲ認メタリ。

余ハ家鶏ノ翼骨(上膊骨)ニ小孔ヲ鑿穿シ骨髓中ニ種々ノ家鶏腫瘍ヲ移植シタリ。又他例ノ骨ヲ對照トシテ、唯之ヲ穿孔シタルノミノモノ、煮沸腫片ヲ移植セルモノ又左右異種ノ腫瘍ヲ同時ニ移植セルモノヲモ用ヒタリ。試驗家鶏ハ合計略二百餘羽ナリ。

纖維腫ハ移植後數日ニテ既ニ骨壁穿孔部ニ骨成生細胞ノ増生現ハレ、爾後腫瘍片存在部ハ他部ヨリモ多ク假骨ヲ生ズ。例ニヨリテハ甚長キ時日ヲ經タルモノニテ既成骨質(上膊骨)ノ壓小サル、ヲモ見タリ。

軟骨腫ニテハ特ニ興趣ニ富ム。即、數日後ニシテ移植腫瘍ノ増大ト共ニ腫片存在部ハ殊ニ骨膜部ニ於テ骨組織増殖ヲ呈シ骨成生細胞ノ増殖ヲ來スコト纖維腫ニ比シテ更ニ強大。時日經過ニ從ヒ増生シタル假骨中ソノ軟骨細胞ハ大多數例ニ於テハ明カニ一部ニ其増生甚異型的トナリ、コノ細胞ガ排列ノ狀ヲ亂シテ移植腫瘍組織中ニ移入増殖シ以テ茲ニ腫瘍増大ヲ助長セシムルノ觀ヲ示ス。其狀纖維腫トハ大ニ異ナリ。且或例ニ於テ移植後略々六十日ニ至レル者ノ如キハ一方骨髓中ノ移植腫瘍組織(主ニ紡錘形細胞ニ傾ケル像ヲ有セルモノ)モ亦茲ニ自ラ定型性軟骨腫ニ充分分化シタル像ヲ現ハスニ至レルト同時ニ、又骨壁ニ於ケル軟骨細胞ガ排列不規則トナリ、異型的ニ増殖シテ、ソノ細胞群ハ明カニ移植腫瘍組織中ニ加入増殖シ、又尙腫瘍組織中ニハ骨質ノ形成ヲモ來セリ。

骨腫ハ皮下移植ニテ骨髓性増殖ニ傾ケルモノガ、翼骨ニ移植セルモノハ骨質形成ガ之ニ比シ甚多シ。又定型性骨腫ヲ形成セザリシ時ニテモ所謂「エキソストージス」ヲ生ズルモノヲ多數例ニ見ル。

肉腫(粘液肉腫)移植例ハ亦纖維腫ニ於ケルト略々似タリ。只局所的ニ骨組織増殖ヲ來スモ軟骨腫及骨腫ノ如クハ強力

事實ハ既ニ報告セル如シ而シテ轉移形成ノ個所タル胃ニ多キハ又何等カノ理由アルヲ思ハシムルモノナリ。

元來惡性腫瘍殊ニ癌腫ノ轉移局所ニ關シテハ腫瘍ノ生物學的性質、轉移局所ノ化學的性質、原發腫瘍局所ノ相互關係並ニ局所ノ理學的關係等ノ影響スルコトアルハ多クノ人ノ考フル所ニシテ又種々ノ論議アリ。

肉腫ノ轉移局所ニ關シテハシカク多クノ論議ヲ見ズ而シテ一般ニ今日ニ於テハ癌腫ノ轉移ノ起ルヤ否ニ好適地ナル故ナリトシ更ニ明確ニ満足ナル事實の證明ヲ見ズ亦肉腫ニ於テモ血流ノ關係ヨリ肺臟ニ最も多シト解セラル、ニトバマル。

余等ノ實驗事實ニ依リ得タル家鶏肉腫ノ轉移ノ局所ノ如キ肺臟ニ少クシテ胃ニ多ク、シカモ胃ノ一定部位ニ好ンデ現ハル、ハ其ノ筋肉胃ノ構造ヨリ理化學作用ニ依テ血流ノ緩慢トナルタメニ轉移ヲ生ズルモノト考ヘ得ラル、モノニシテ本肉腫ノ轉移ニ於テ胃ニ轉移ヲ起ス如キハ正ニ理學的の影響ノ大ナルヲ想像セシムルモノナリ。

## 一 家鶏肉腫ノ研究(第四報告)

醫學博士 緒方知三郎(東京)

川北眞太郎(東京)

醫學博士 三田定則(東京)

大正六年以後二ケ年ニ亙ル研究ノ一部ヲ茲ニ報告ス。

(一) 肉腫發生的刺激作用ヲ有スル物質ハ肉腫組織ノ蒸餾水越幾斯中ニ多量ニ含有セラル。其證據トシテ次ノ事實ヲ確メタリ。

(イ) 蒸餾水越幾斯ハ腫瘍發生率ニ於テ生理的食鹽水越幾斯ニ著ルシク勝ル。

余ハ大正七年八月偶然京都ニ於テ家兎ノ一新可移植性腫瘍ヲ獲タリ。該原發腫瘍ハ一中等大中老ノ牝兎ノ脊部ニ發生シ、略ミ手拳大ナル殆ド球狀ノ稍ミ掌固ナル腫瘍ヲ形成セリ。腫瘍ハ時日ヲ經ルト共ニ益ミ増大シタリ。之ヲ解體シテ腫瘍ヲ檢スルニ其剖面概テ一樣ニ淡紅灰白色多少黃味ヲ加ヘタル所アリ、明カニ新生組織ノ觀ヲ呈シ、鏡檢ニ據レバ明カニ紡錘形細胞肉腫ナリ。

同年九月余ハ之ヲ三頭ノ家兎ノ背部皮下ニ移植ヲ試ミソノ中一頭ニ於テ腫瘍ハ發育セリ。次ニ又之ヲ三頭ニ移植シテ又一頭ニ陽性ナルヲ知り、此腫瘍組織ノ移植可能ナルヲ確メタリ。初メハ移植能率甚低小ナリシガ後ニハ大イニ高上シテ、今第四移植世代ニ至ル。

移植腫瘍ハ時日ト共ニ球塊狀ニ可ナリ速カニ増大シ、大約一ヶ月程ヲ經テ略ミ鶏卵大以上ト成ル、其形態性狀ハ全ク原發腫瘍ト同一様ニシテ明カニ紡錘形細胞肉腫ナリ。第二及第三移植世代ニ於ケルモノニシテ月餘ニ亙リテ發育シ手拳大程ニ達シタルモノニテハ背部腹部ノ皮下又ハ淋巴腺ニ多數轉移シ、又第三、第四移植世代ニテ肺肝腎等ニ著明ニ轉移腫瘍ヲ形成セル例アリ。又腹腔内ニ插入シテ能ク腹膜面ニモ移植サレ得、又轉移腫瘍ヲ以テ試ミ移植陽性ナリ。移植陰性ナルモノニ更ニ移植シタルニ陰性ナル例アルハ注意スルニ足ル。

吾人ハ此新タニ獲タル家兎ノ可移植性腫瘍ヲ以テ後來ノ腫瘍移植研究上ニ資センコトヲ期ス。(自抄)

## 一〇 家鶏肉腫ノ胃轉移ニ就テ

藜 沼 憲 二(東京)

小 此 木 修 三(東京)

家鶏肉腫、藤浪、加藤兩氏粘液肉腫第二系ニ於テ移植家鶏ヨリ屢ミ採血ヲ行フ時ニ對照ニ比シ轉移形成ノ多數ナルノ

但シ濾過性病原體説ハ絶對ニ否認シ能ハザルモ、再生増生力ヲ有スル腫瘍成分ニ因セザルコト疑ナシ。  
該化學的物質ノ本態ニ關スル研究ハ未ダ完成セザルヲ以テ其發表ハ之レヲ次回報告ニ譲ル可シ。(自抄)

### 附 議

烏 潟 隆 三

濾過液ヲ高溫或ハ煮沸ニヨリテ處置シタル後ニテ發生ノ有様ハ如何ナリシヤ。

ベルケフエルド濾過液即チ組織細胞ハ全然取除キタリト思考セラル、液ニテモ猶且ツ腫瘍發生スト謂フ事實ニヨレバ其中ニ溶解性ノ物質カ或ハ何カ極微ノ有形體ノアル證ナラン要スルニ何カノ「エトワス」ガ原因ト爲リ居ルナラン其ノ何物タルカノ研究ニ向ツテハ種々ナル方面ヨリスルコト必要ナルガ其中ノ一ハ血清學的檢索ナラン此方法ニヨレバ腫瘍ニ固有ノ而シテ腫瘍發生母地ノ蛋白ト無關係ナル或ル他ノ特殊ナル抗體元ヲ證明シ得ル處迄ハ進ミ得ルガ如シ余ハ惡性腫瘍ノ血清學的研究方針ニ對シ卑見ヲ近刊ノ中外醫事新誌ニ登載スルコト、ナセリ。御參考トナレバ幸福ナリ。

マタ人類ノ惡性腫瘍即チ癌腫或ハ肉腫ノ血清學的研究結果ハ初步ナガラ之ヲ第二十回日本外科學會ニテ發表セリ是亦御參考トナラバ幸甚ナリ。

### 附 議

林 直 助

鶏肉腫殊ニベ氏濾過液注射ノ場合ニ鶏ノ年齡並ニ分量等ニ關係スルコト勿論ナリ此點ハ如何ニ處置セラレタルカ又水ニ溶解性ノモノナラバ其移植ノ成シ得ルヲ如何ニ説明セラレントスルカ御伺致シマス。

### 答 辯

緒 方 知 三 郎

○烏潟博士ニ答フ。

溫度ニ對スル抵抗ニ關シテハルース、藤浪、稻本、其他ノ諸氏ノ研究ガアリマスガ私共ガ行フテ見タ所ニヨレバ五十五度デ三十分作用セシムレバ全く破壊セラル、様デ有リマス。血清學研究方面ニ就テハ三田教授モ大ニ必要ト認メラ

從來本腫瘍ノ濾過性ニ關スル研究ハリンゲル氏液或ハ生理的食鹽水越幾斯ニ就テ行ハレタリ。余等ノ研究ニヨレバ此等ノ實驗ハ寧ロ蒸餾水越幾斯ヲ以テ試ム可キナリ。總計六百六十羽(注射個所千三百二十)ノ家鶏ヲ用ヒ反復比較實驗セシ成績ハ一回ノ除外例モナク常ニ蒸餾水越幾斯注射家鶏ニ極メテ高キ腫瘍發生率ヲ示セリ。此事實ハ余等ノ初メテ發見セル所ニシテ今後研究ノ基礎タル可キ重要ナル知見ナリト思考ス。

(ロ) 生理的食鹽水ト等壓ヲ有スル無機鹽水溶液ヲ以テ作レル腫瘍越幾斯モ亦生理的食鹽水越幾スト同様ニ腫瘍發生率ニ於テ蒸餾水越幾斯ニ劣ル。

三・六九%硫酸「マグネシウム」水溶液・〇・八三%鹽化「カルシウム」水溶液及ビ一・一六%硝酸「ナトリウム」水溶液ヲ以テ作リシ越幾斯ニ就テ右ノ事實ヲ確認セリ。

(ハ) 蒸餾水越幾斯ニ〇・八%ノ割合ニ食鹽ヲ加ヘタル後ニ家鶏ニ注射スルモ其腫瘍發生率ニ相異ヲ認メズ。

(ニ) 生理的食鹽水越幾斯ヨリ透折法ニヨリテ食鹽ヲ除去シタル後ニ家鶏ニ注射スルモ亦腫瘍發生率ニ相異ヲ現ハサズ。

(ハ) (ニ)ノ事實ハ蒸餾水越幾斯ガ腫瘍發生率ニ於テ生理的食鹽水越幾斯ニ勝ルハ越幾斯中ニ食鹽ノ含有セラル、カ否ヤニ關セザルコトヲ證明ス。

以上(イ)(ロ)(ハ)(ニ)ノ事實ニヨリ腫瘍發生的刺激作用ヲ有スル物質ガ蒸餾水越幾斯中ニ多量ニ含有セラル、コト並ニ極メテ少量ノ無機鹽類ノ存在ハ既ニ甚ダシク其抽出ヲ妨グルコト明白トナレリ。其他ニ余等ハ

(二) 肉腫發生的刺激作用ヲ有スル該物質ハ透折性ヲ有セズ。

(三) 肉腫發生的刺激作用ヲ有スル該物質ハ肯炭及ビ「カチリン」ニ容易ニ吸著セラル。

ノ二事實ヲ確メ得タリ。

以上ノ諸性狀ヲ深ク考察スルニ肉腫發生的刺激作用ヲ有スル物質ハ水ニ可溶性ノ膠樣物質有機化合物ナルガ如シ、

頻度ヲ明カニスルヲ要ス、前問題ニ對ズル疑問ニ對シ家兎ニ十頭ニ於テ耳ニ「ラノリン」ノ塗擦試驗ヲ行ヒシガ全ク陰性ナリキ飼養試驗ニ於テ今回得タル成績ハ前回ノ分ヲ合セテ總計二百〇一例中陽性五三例ヲ得タリ毎百日ニツキテ見ルニ遞次的ニ増加シ三百日以上十八例ニシテ四八・七%ニ及ブ血管變化ノ程度ト乳嘴腫ノ頻度トヲ比較スルニ陽性ノモノニアリテハ陰性ノモノニ比シテ強キ變化ヲ呈スルモノ、割合適カニ多シ是等ノ事實ニヨリテ腫瘍ノ發生ガ「リボイドーシス」ト密接ノ關係アルハ疑ナシ腫瘍ノ發生部位組織的構造ハ前回述ベタル處ト大差ナシ。

### 附 議

市 川 厚 一

余等モ兎耳痛發生實驗中家兎ノ舌ニハ何等所置セザルニ乳嘴腫ノ發生シ居ルモノアルヲ經驗シ先年今博士報告ニ追加セリ。其後特ニ此點ニ注意セルニ長期間(二百日以上)ノ實驗ニ堪ヘ得タル家兎ニ在リテハ屢々經驗シ且兎耳殼内面ニ塗擦セル「テール」ヲ甜メタル直接ノ結果ト認ムベカラザルガ如キ者(「テール」拭去後ニ發生)ニモアリ又アル全身的變化アリト認ムベキ者アリ。故ニ余ハ健體ニ於テハ舌ニ日常加ハル器械的乃至化學的刺戟ノ何等病的變化ヲ催起セズト雖定期間「テール」塗擦ヲ行フ事ニヨリテ全身的變化ノ惹起セラル、ヤ克ク外來刺戟感受性増進シ乳嘴腫ヲ發生セシムルニ至ルニ非ズヤトノ想定ヲ抱クニ至レリ。其全身的變化ニ就テハ未ダ茲ニ述ブルヲ得ズ今博士ノ「リボイドーシス」カ又ハ更ニ他ニ何カアリヤ今後ノ問題トナサントス。

### 答 辯

今 裕

余ハ「リボイドーシス」ノミガ腫瘍發生ニ關スル唯一ノ全身的要約ト考フルモノニアラズ「リボイドーシス」モ其重要ナルモノ、一ナリト云フノミ。

レ目下實驗中デアリマス御注意下サリマシタコトヲ深ク感謝致シマス。

○林博士ニ答フ。

試驗方法ニ就テ色々御注意下サイマシテ實ニ有リ難ク存ジマス私共モ充分注意シテ誤リノ無イ様ニ心掛テ居リマス積デ有マス。茲ニ掲ゲマシタ表ニ現ハシマシタ實驗成績ハ有ノマ、ノ事實デ有マスカラ御信用下サレタク存ジマス同様ノ方法ヲ以テ御實驗ヲ下サルレバ必ズ同ジ成績ヲ得ラル、コト、信ジマス。

私共ハ濾過性病原體說ニ決シテ絕對ニ反對スルモノデハ有リセマン、唯私共ノ見出シマシタ事實ヲ解釋スルニハ水ニ可溶性ノ化學的物質ヲ以テスルノヲ最モ穩當デアルカノ様ニ考ヘラレマス。化學的物質ヲ以テ説明スレバ濾過液ノ注射ニヨリテ腫瘍發生ヲ數代ニ互ツテ行ヘバ漸次其發生率ガ減ジル様ニアラズヤトノ考案ハ濾過性病原體ナルモノヲフレンケル氏が鷺口瘡ニ就テ初メテ認メタル際ニモ大ニ問題トナツタコト、聞イテ居リマス。右ノ場合ニ於テ若シ化學的物質デ有リマスレバ如何ニ説明シテヨロシキヤ未ダ化學的物質ヲ確カニツカマヘタノデモ有リマセンカラ其ノ上ノコトニ致シタウ御座リマス吾人ハ一層多クノ新知見ヲ得タル上ニアザレバ其説明ハ一ツノ憶説タルニ止マルカラデ有マス。

## 一二 「ラノリン」飼養ニヨル家兎舌乳嘴腫ニ就テ

醫學博士 今

裕(東京)

演者ハ前回「ラノリン」飼養家兎ニ於ケル舌乳嘴腫ノ八例ヲ實驗シテ之ヲ報告セシガ、其原因的要件ニ關シテ尙全ク決定的解決ノ域ニ達セザリキ實際所ニ「リポイド」ノ沈著ヲ證明セザルヲ以テ之ガ「リポイド」ノ表面刺戟ニヨルカ將又榮養的刺戟ニヨルカノ解決ハ家兎ノ外皮ニ於ケル「ラノリン」塗擦試驗及「リポイド」新陳代謝障礙程度ト乳嘴腫發生ノ

ニ據リ、家兎(殆ンド皆雌性)ヲ用キタリ。  
諸實驗方法トシテ演者等ハ。

#### 第一試驗例

「ラノリン」ト「テール」水製「エキス」トノ混合液(一ト三トノ容積ノ割合)後ニ一ト四トノ割合ノ〇・五乃至一・〇ヲ、乳嘴附近皮下ニ乳腺ニ向ツテ、始メ毎月二回位、後一回ヅ、注射セリ、使用家兎全數二十頭。

#### 第二試驗例

始メ上記ノ如ク所置シタル動物ニ、途中ヨリ「ラノリン」ト「テール」其儘ノ(四ト一トノ割合デノ)混合液ノ前ト同量ヲ、一ヶ月二回乃至一回(後ニ)ヅ、注射シタリ、使用家兎九頭。

#### 第三試驗例

「ラノリン」ト「テール」トノ混合液(四ト一トノ割合)前ト同量ヲ始メヨリ一ヶ月二回乃至一回(後ニ)宛注射セリ、使用家兎五頭。

#### 第四試驗例

第三試驗例ノ如ク所置セル動物ニ純「テール」ヲ每常約〇・三耗宛中途ヨリ、使用家兎四頭。

#### 第五試驗例

第二試驗例ノ如ク所置セル動物ニ、更ラニ純「テール」ヲ每常約〇・三耗宛、使用家兎九頭。

#### 第六試驗例

新ナル動物ニ、純「テール」ヲ每常約〇・三耗宛毎月一回(第四乃至第六試驗例ニ於テハ)極細キ注射針ヲ用ヒテ、乳嘴ヲ通ジテ、可成の排乳管ニ注入セリ、使用動物二十五頭、

注射ハ唯一頭ヲ除キ一乳腺部ノミニ行ヘリ是レ動物ノ榮養ヲ害セズ、可成の長ク生存セシメンガ爲ナリ。

著者等ハ又實驗動物ヲ可成の屢イ妊娠セシムルヤウ工夫セリ然カモ實驗開始ノ大正六年六月以來一回モ妊娠セザル者二回妊娠セル者等多數ニシテ唯一頭ノ四回妊娠セル者アリ、是レ後述ノ乳腺腺扁平上皮細胞癌ヲ發生シタル例ナリ。

第六試驗例ノ動物ハ最近開始ノ者ニシテ今回報告中ニ加ヘズ第一、第二、第三、第四、第五試驗例合計四十七頭中、死セル者ノ注射部硬結、乃至腫瘍及生前該部ヨリ一部切除セル材料ノ肉眼的及組織的調査ヲ行ヘリ。

### 三、實驗成績



# 一三 人工的乳癌發生ニ就テ(第一回報告)

醫學博士 山極 勝三郎

獸醫學博士 市川 厚一

## 一、實驗ノ目的

著者等が大正二年秋以來著手シタル「兔耳翼」テール塗擦實驗ニ依リテ人工的兔耳翼上皮膚發生ノ陽性成績ヲ擧ゲ得タルコトハ今や國際醫學界ニ周知ノ事實ナリ。其後千葉醫學專門學校教授筒井秀二郎博士ハ、二十日鼠脊部皮膚ニ同ク「テール」塗擦ヲ施シ、著者等ト同様ニ上皮膚ヲ發生セシメ得タリ。又腺癌ニ關シテハ山極ガ大野學士ト共ニ、家鷄輸卵管壁ニ「シヤールラツハ・オレーフ」油注射ニ依リテ、四十一羽中三羽ニ輸卵管癌ノ發生ヲ認メ、英ノラツアールス・バローガ「ラデイユム」鹽ヲ膽石内ニ入レ込ミ、之ヲ家兔膽囊内ニ插入スルコトニ依リ、一回腺癌ノ發生ヲ見タリトノ事ナレドモ未ダ確實ナリト云フヲ得ザル點アリ。

抑々上皮膚癌ト腺癌トハ其性狀ニ相異アリ、概シテ前者ハ比較的良性、後者ハ惡性ナル者多キ等ノ。人類腫瘍ニ於ケル經驗上ヨリシテ往々著者等ノ實驗ニ對シ「上皮膚癌ハ「テール」ノ刺激デ出來タデモアラフガ、腺癌ハ六ヶ敷カラフ」ト謂フ人アリ、隨ツテ著者ハ第一、此ノ疑問ヲ解決シ、第二、可成の大ナル充實性腫瘍ヲ人工的ニ發生セシメ、陽性移植ヲ可能ナラシメンガ爲メ「兔耳癌ハ忽チ潰瘍ニ陥リ、「バクテリア」侵入ヲ來シ、移植不成績ナリシナリ」腺癌ノ人工的發生ヲ企圖シ然カモ諸腺中ニ於テ體ノ外表ニ近ク、常ニ其發生ノ狀況觀察ニ便宜ナル乳腺ヲ選ベリ。

## 二、實驗方法

使用動物トシテハ其取扱ヒ易キト、其乳腺ニハ從來癌腫ノ偶發セル報告無キヲ以テ、人工的ナルヤ否ヲ判定シ易キト

認メラレ、コハ殊ニ「ヲノリン」、「テール」混合液ヲ注射(第二試驗列以下)セル動物ニ目撃セラレタリ。

(第五) 著者等ハ四十七頭ノ使用家兎中三頭ニツキテ(六・四%)乳腺注射部ニ於テ甚ダ興味アル變化ヲ實驗セリ、即第二十一號動物ノ排乳管澀滯囊胞壁ヨリ發生セル腺扁平上皮細胞癌(約大豆大結節)第九號及ビ第二十七號動物ノ慢性乳腺間質炎竈中ニ於テ初期「スキルス」像ヲ見タリ。

(第六) 人工的乳癌初期第一例 家兎二十一號ニ在リテハ、其發生發眞ニ明瞭ニ著者等ノ眼前ニ展開セラレタリ、即チ充實セル内容ニ因ル器械的壓迫ニヨル腺管壁上皮ノ偽性化生、真空填塞の肥大及ビ代償性增生ノ爲メノ化生的増生、疣性乳嚢狀物形成、此ノ化生腺管上皮ガ發育方向ヲ壁質ニ向ツテ轉ズルニ因ル浸潤性腺扁平上皮癌性成長發育是レ一旦管腔内ニ向ツテ増生セル上皮ガ腔内狹隘ト成リ内壓高マリ成長抗抵抗マルニ由リ其ノ頭粘液樣腺嚢ト成レル壁質ノ抗抵抗方ニ侵入スル組織機制ニ由ルナリ。此際甚ダ面白キハ腺管壁上皮ノ子孫ガ外表上皮ノ角化性皮脂腺上皮ノ脂肪變性ト、排乳管壁上皮ノ管形成性ノ三性能ヲ具有シ、其諸時期ノ像ヲ交互ニ表示スルニアリ。

(第七) 人工的乳癌初期第二例 家兎第九號ニ在リテハ組織發生及組織機制ガ前者ノ如ク判然タラズ、然レドモ茲ニモ、何レカノ太キ排乳管ニ損傷アリ、其裂隙ヲ通ジテ、周圍組織隙ニ異所的且化生的増生ヲ遂ゲタル腺管上皮ガ更ラニ「ヲノリン」空胞性乃至癰疽性組織内ニ浸潤性發育ヲ示スモノナルコトハ疑無ク、且ツ此ノ「スキルス」像ヲ呈スル上皮細胞索ノ細胞ガ、胞巢壁ナル一列ト中央部集團トノ間ニ空隙ヲ生ジ、若クハ多數ノ上皮細胞ガ細胞體內ニ空隙ヲ生ジ、管腔形成ノ傾キヲ示スガ如キハ、本例上皮細胞ノ本來排乳管上皮細胞ナリシコトヲ證スルモノナリ。

(第八) 人工的乳癌初期第三例 家兎第二十七號ニ在リテハ其所見第二例「スキルス」型ニシテヨリ著明ナル初期癌腫例ナリ。本例ハ太キ排乳管ヲ中心トシ、該壁及細小排乳管壁腺上皮ヨリ癌性化ノ行ハレタル事ノ疑無キ者ナリ。

(第九) 四十七實驗動物中最初期ニ於ケル癌ノ三例、然カモ其ノ始メテ鏡下ニ於テ認定サレ得タルニ止マリ、未ダ轉移

右ノ五試驗例動物中、第一試驗例(二乃至三十八日生存十四頭、百四十三乃至二百二十七日生存六頭)第三試驗例(十七乃至三十九日生存四頭、尙生存一頭)ニ屬スル者ハ概シテ試驗開始後生存日數短カク、第二試驗例(七十乃至八十七日生存二頭、百九十二乃至二百七十七日生存七頭)ニ屬スル者ニ於テ少ク長ク、第五試驗例(多數生存、去ル二月五日ノ計算ニ據リ、短カキモ三百七十五日長キハ六百十三日生存)ニ屬スル動物最長ク生存シ、死セル者モ、一頭ハ四百六十三日(乳腺腺扁平上皮細胞癌ノ例)一頭ハ五百十九日間生存セリ、隨ツテ此ノ第五試驗例動物ニ於テ最興味アル所見ヲ得タルナリ。各所見ニ就テノ縷述ヲ省略シ、茲ニハ唯全成績ノ適要ヲ掲ゲベシ。

(第一) 乳腺部ヘ「ラノリン」ト「テール」水製「エキス」混和液、或ハ「ラノリン」「テール」混合液ヲ注射スルヤ、其處ニ眞皮及皮下織内ニ無數ノ「ラノリン」含有細胞ヲ以テ界サレタル空胞ヲ生ジ、空胞ノ間ニハ「ラノリン」細胞充滿ス。

(第二) 注射ノ反復行ハル、ヤ(一ヶ月ニ一回乃至一回、是ヨリ近キ間隔ニ於テ屢々行フトキハ組織ノ頽敗ノミ見ラレ、組織新生再生行レズ)、上記空胞以外尙多數「ラノリン」(含有)細胞、結節ヲ生ズ、コノ細胞ハ内被細胞性乃至迷走細胞性ナリ、終ニ腺組織ノ頽敗消失ヲ伴ヒ、結締組織ノ新生ヲ見ル、内ニ淋巴球、「プラスマ」細胞「エオジン」嗜好細胞等ノ浸潤アリ、殊ニ後者ハ遺存排乳管腔内ニ多ク頓集ス。

(第三) 既ニ八乃至十回注射後ヨリ始マリ、十四回注射後ニ於テハ、上記所見以外、稀ニ平等ナル屢々限局性ノ排乳管擴張、囊胞壁上皮等ノ丘狀肥厚ヲ認ム、是レハ壁腺上皮ノ化生の増生ニ由來ス、又遺存細小排乳管腔内「エオジン」嗜好細胞以外、壁上皮ノ扁平細胞ニ化生増殖シツ、然カモ求心性ナラズ、平等ニ腔ノ一部、半分或ハ全部ヲ占ムルモノアルヲ見ル、斯クノ如キ像ハ慢性乳腺間質炎性ニ硬結セル癰痕性結締織内ニ多ク發見セラル、此ノ場合ニ於テハ其ガ化生の產物ナルヤ、外表上皮ノ單ナル異所ナルヤノ鑑別困難ナルコト少カラズ。

(第四) 尤モ單純ナル外表上皮毛囊上皮ノ異所ハ普通眞皮表層ニ在シ、又常ニ求心性層疊性角化ヲ示ス角化囊胞トシテ

小喜多君ノ御質問ノ意味ガ要領ヲ得ニクイガ。演題ニ在ル通り人工的乳癌發生ニ關スル實驗的研究ノ第一回報告デア  
ル。今回得タル成績ハ今報告シタ通り、既ニ組織學的ニハ癌腫ノ性狀ヲ有スル者三例ヲ得タ、其標本ハ御覽ノ通りデ  
アル實驗開始後四百日以上モ生存シタ動物デアツテソノ組織的ノ所見ハ一時的ノ所見デナク、余等ノ兔耳癌發生實驗  
ニ得タル所見ニ徴シ正ニ癌腫乃至同初期ト認ムベキ者ト考ヘルノデ。今回報告ノ三例ヲ初期癌腫トシテオイタ次第デ  
アル。勿論未ダ轉移及ビ移植性ヲ證明シ得ナイカラ癌腫トシテ完全ナル凡テノ性狀ヲ有ストハ云ハレ無イカラ遠慮シ  
タノデアアル併シ斯ルモノヲ發生サス事モ遠カラズ出來ルト確信シテ居ルノデアリマス。

ヲ生ジタルニ非ラズ、勿論未ダ移植試驗ノ試ミラレザルガ如キハ甚ダ不充タルヲ免カレズ、然レドモ吾人ハ兎耳癌ノ例ニ鑑ミ、玆ニ於テモ亦尙忍耐シテ「ラノリン」「テール」或ハ「テール」注射ヲ持續シ、且ツ動物ヲシテ可成の長ク生存セシムルヲ得バ、將來完全ナル資格ヲ具備セル乳癌ノ發生可能ナルヲ豫期シ得ベキヲ確信ス。

〔第十〕終ニ乳癌初期第一及第二例家兎ハ、共ニ實驗經過中四回妊娠分娩セル動物ニシテ前者ハ實驗開始後四百六十三日目ニ死シ、後者ハ第五百五十五日目ニ試驗切除ヲ行ヒ鏡檢確定セル者ナル事ハ、動物乳癌モ亦人類ノ夫レガ妊娠分娩シタル婦人ニ於テ多シ(八二%以上)ト云フ說ニ一致スル者ト謂フベシ。

〔第十一〕人工的乳癌初期三例、就中第一例ハ、組織所見上壁腺細胞ヨリ化生的ニ發生セル者ニシテ、胎生の迷芽等ノ先天性基礎ヨリセル者ニ非ラズ、又或ハ未ダ完全ニ腺細胞ニ發育シ居ラザリシ未熟細胞ノ存在ヲ假定スルヲ要セザル者ナリ。

## 附 議

小 喜 多 晴 雄

(前略) 次第二御意見ヲウカガヒマシテ、既ニ御掲ゲ置キニナリマシタ「人工的乳癌發生ニ就テ」ノ御演題ニ於テ、癌ト唱ヘラルル御意見ハ。

此ノ像(標本ノ顯微鏡寫眞圖)ガ、現在ニ於テ、最早ヤ既ニ、吾等ノ一般ニ認メテ居リマス癌腫ノ性狀ヲ示シテ居ルト御認メニナラレテノ上デハナク、コノ像若シクハ、之レト同種類ノ像)ガ、現在ノ性狀ヲ次第二變ジテ癌腫ニ普通ノ種々ノ性狀ヲ將來ニ於テ具フルニ至ルカモ知レントノ假定的要約ノモトニ、(ソノ際ハ)此ノ像ガ癌腫デアアル(嘗テ人工的扁平上皮癌ニ就テ唱ヘラレタル如ク)。トノ意味ニ於テデアラレルト。承ル事が出来マシテ、満足ニ堪ヘナイ次第デアリマス。云々。

## 答 辯

市 川 厚 一

七鼠肉腫ノ移植及ビ増殖ニ關スル知見補遺

藤繩喜代藏君(京都)

八大鼠ノ人工的肉腫移植ニ由ル組織の變遷及ビ

移植ト「レチチン」注射ノ關係ニ就テ

梅原信正君(京都)

九移植シ得ベキ雞腫瘍(武藤系)ノ異種鳥類移植

試驗ニ就テ 向山孝之君(名古屋)

一〇家雞腫瘍ノ移植ニ關スル知見補遺附可移植性

家兎肉腫ノ供覽 加藤竹男君(京都)

一一家雞肉腫ノ移植ニ就テ 蓼沼憲二君(東京)

一二家雞肉腫ノ胃轉移 蓼沼憲二君(東京)

一三家雞肉腫ノ研究(第四報告)

醫學博士 緒方知三郎君(東京)

醫學博士 河北眞太郎君(東京)

一四「ヲノリン」飼養ニ因スル家兎ノ舌乳嘴腫ニ就テ

醫學博士 今裕君(東京)

一五人工の乳癌發生ニ就テ(第一報告)

醫學博士 山極勝三郎君(東京)

〇雜報

# 〇大正七年度懸賞論文審査要旨

梅原信正君

著者ガ癌研究會第十回學術集談會ニ於テ發表セル論文

『大鼠ノ纖維性腺腫ノ移植實驗竝ニ該腫瘍ヨリ人工のニ肉

腫ヲ形成セシメタル實驗的研究ニ就テ』「ラツテ」ノ良性偶

發腫瘍(纖維性腺腫ヲ發見シ之レヲ十四世代ニ互リテ移植

試驗ヲ行ヒソノ性狀ヲ究メ更ニ之レニ種々ナル理化學的ノ

刺戟ヲ加ヘ其結果ヲ精査セルニ其中「ズダン」Ⅲ、「オリヴ」

油ヲ注射セル例ニ於テハ之レヲ紡錘細胞肉腫即チ惡性ノ肉

腫性化セシムルコトヲ發見シ更ニ十四世代ニ互リ移植可

能、能ク其性狀ヲ保持スルコトヲ立證シタルモノナリ、是

レ良性腫瘍ガ外來ノ刺戟ニ因リ惡性化スルコトヲ立證セル

モノト謂フベク腫瘍生物學上ノ知見ヲ増補スルモノタルコ

トヲ認ム。茲ニ本會授賞規定ニ基キ審査委員ノ決議ニヨリ

授賞ス。

〇理事會記事 大正八年五月二日第二回理事會開會決議左

ノ如シ

報告

雜報

◎社団法人癌研究会第十二回定期總會

並第十一回學術集談會記事

大正八年四月三日午前十一時ヨリ京都帝國大學醫科大學病理學教室ニ於テ、本會第十二回定期總會並第十一回學術集談會ヲ開催セリ、出席者ハ本多會頭、長與理事長ヲ初メ荒木總長、藤浪、佐多、今、角田、林、富士川各博士及細野氏等本會役員及會員多數ナリシ、尙ホ多數ノ來聽者ヲ以テ充サレ盛會ナリキ、聽テ開會ヲ報ズルヤ本多會頭先ヅ開會ノ辭ヲ述ベ、次デ細野理事ノ前年度ノ庶務會計報告(第三年第一冊雜報參照)アリ、次デ本多會頭懸賞論文審査要旨報告(別項參照)ヲナシタル後授與式ヲ行ヒ本多會頭ヨリ梅原信正氏ニ賞記並資金ノ授與ヲ爲シタリ、終リテ學術集談會ニ移リ、左記十五ノ演說アリ何レモ内容充實シ、實ニ癌研究上世界ニ誇ルベキモノ尠ナカラズ、是レ會員諸君ノ熱心ナル研究ニ由ル所ニシテ殊ニ東京、福岡等ノ遠隔地ヨリ

出席演說セラレタル諸君少ナカラズ、左ニ其演題及氏名ヲ掲ゲ、謹テ諸君ノ勞ヲ深謝ス。

○第十一回學術集談會演題

一「オルヒドバクス、ハラヂチクス」ニ就テ

長 田 勝 芳君(京都)

二植物ニ於ケル腫瘍類似ノ新生物ニ就テ(供覽)

末 安 吉 雄君(京都)

三家畜腫瘍ノ研究(第一回報告)

山 本 耕 橘君(福岡)

四移植シ得ベキ犬腫瘍ノ一新種報告

山 本 耕 橘君(福岡)

五癌腫發育ノ一形式ニ就テ(所謂血管肉腫トノ比較研究)

古 川 利 三君(福岡)

六移植腫瘍増殖ノ上ニ及ボスレントゲン放射線ノ作用

緒 方 英 俊君(京都)

○高木理事ノ逝去 本會理事醫學博士高木兼二氏ハ四月上

旬腸窒扶斯ニ罹患シ去ル五月三日午前四時遂ニ鳥居坂町ノ自邸ニ於テ溘焉遠逝セラレタリ、享年三十有九洵ニ哀悼ノ至リニ堪エザルナリ、氏ハ本會理事トシテ多年盡瘁セラレ

會運ノ發展ニ努力セラレタル所尠ナカラズ、同博士ノ遠逝ハ醫學界ノ大損失タルト同時ニ本會ニトリテモ誠ニ痛恨事ナリ、本會ハ謹デ深厚ナル弔意ヲ表ス、同博士ノ葬儀ニ際シ本會ハ弔辭竝ニ生花ヲ靈前ニ供セリ。

○篤志家ノ寄附 男爵岩崎久彌、男爵三井八郎右衛門兩氏五ヶ年繼續ノ寄附金ハ本年度ヲ以テ金壹萬圓ニ達シ滿期トナリタルガ、頃日兩男爵家ハ本會事業ノ有益ニシテ成績ノ舉ガレルモノアルニ對シ深ク贊意ヲ表セラレ明年度以降五ヶ年間ニ亙リ更ニ各金壹萬五千圓(年賦參千圓)ノ繼續寄附金ヲ申出ラレタリ。

麻布區三河臺町三十一番地井上準之助氏ハ本會ノ主旨ヲ贊助シ大正八年五月二十六日附ヲ以テ本會ヘ金五百圓ヲ寄附セラル。

深川區數矢町九十番地若林英一氏ハ本會ノ主旨ヲ贊助シ會テ金貳百圓ヲ寄附セラレタルガ今同大正八年七月十二日

附ヲ以テ更ニ金貳百圓ヲ寄附セラル。

○緒方評議員ノ逝去、本會評議員醫學博士緒方正規氏ハ病痾ノ爲メ本年七月三十日逝去セラル、本會ハ謹ンデ哀悼ノ意ヲ表ス

### ◎會員異動

轉居

本郷區弓町二丁目三十四番地

入會

千葉縣立千葉病院外科

千葉醫學專門學校外科教室

稻田龍吉

後藤健介  
田中康昌



一、大正八年二月以降ニ於ケル寄附金ニ關スル件

二、ジョージ、クロツカー研究所ヨリ動物腫瘍材料送付ニ

關スル交渉ノ件

議 事

一、大正八年度研究補助費支給追加之件

二、年賦寄附金繼續依頼之件

三、施料患者收容ニ關スル件

四、新理事囑托ニ關スル件

五、雜誌編輯者囑托ニ關スル件

六、評議員推薦ニ關スル件

七、大正八年度懸賞論文審査委員囑托ニ關スル件

左ノ諸氏ニ囑托ス

- |      |            |
|------|------------|
| 醫學博士 | 本 多 忠 夫氏   |
| 醫學博士 | 土 肥 慶 藏氏   |
| 醫學博士 | 山 極 勝 三 郎氏 |
| 醫學博士 | 長 與 又 郎氏   |
| 醫學博士 | 藤 浪 鑑氏     |
| 醫學博士 | 佐 多 愛 彦氏   |
| 醫學博士 | 佐 々 木 隆 興氏 |

八、書記増給之件

○癌研究費補助追加 大正八年度癌研究補助規定ニ依リ本

誌第十三年第一冊報告後理事會ノ決議ニ因リ追加補助ヲ受

クベキ諸氏及金額左ノ如シ

金五百圓

醫學博士 鳥 潟 隆 三氏

金五百圓

醫學博士 角 田 隆 正氏

金貳百五十拾圓

醫學博士 梅 原 信 正氏

醫學博士 風 川 村 麟 也氏

○山極、市川兩博士授賞之件

山極市川兩博士ハ多年苦心努力ノ結果成功セラレタル人

工的癌發生ノ研究ニヨリテ大正八年四月二十五日帝國學士

院ヨリ學士院賞ヲ授與セラレタリ。

○理事、評議員囑託 大正八年八月本多會頭ノ推薦ニ因リ

澁澤副總裁ヨリ左記ノ諸氏ニ理事、評議員ヲ囑託ス

- |     |        |            |
|-----|--------|------------|
| 理事  | 醫學博士   | 木 村 德 衛氏   |
| 理事  |        | 高 木 喜 寛氏   |
| 評議員 | 醫學博士   | 稻 田 龍 吉氏   |
| 同   | 醫學博士   | 三 田 定 則氏   |
| 同   | 日本銀行總裁 | 井 上 準 之 助氏 |



V  
1  
3  
-  
2  
A  
U  
G  
1  
9

XUM